

寶は王の云ふなりになつて酒を飲んだ。酒が三四まはると笙歌が下から聞えて來たが、鉦かねや鼓つづみは鳴らさなかつた。その笙歌の聲も小さくかすかであつた。やや暫くして王は左右を顧みて、

「朕ちんが一言云ふから、その方達に對句をしてもらはふ、」

と云つて一聯の句を口にした。

「才人桂府に登る、四座方きさに思ふ、」

寶がそこでそれに應じて云つた。

「君子蓮花を愛す、」

すると王が云つた。

「蓮花はすなはち公主の幼な名だ、どうしてもこんなに適合したであらう、これはどうしても夙縁しゆくえんだ、公主にさう傳へてくれ、どうしても出て來て君子にお目にかからなければならぬ、」

暫くたつてから珮環の音がちりちりと近くに聞えて、蘭麝の香をむんむんとさしながら公主が出て來た。それは十六七の美しい女であつた。王は公主に命じて寶を展拜せんぱいさせて云つた。

「これが蓮花です、」

公主はすぐ往つてしまつた。寶は公主を見て心を動かした。彼は黙りこんでちつと考へてゐた。王は觴をあけて寶に酒を勧めたが、寶の目はその方に往かなかつた。王はかすかに寶の氣持ちを察したやうであつた。そこで

王が云つた。

「小供はもう婚禮させなくてはならないが、ただ世界が違つてゐるのを慚るのだ、どう思ふ、」

寶は癡ばかのやうに考へこんでゐたので、そこで又その言葉が聞えなかつた。寶の近くゐる侍臣の一人が寶の足をそつと踏んで云つた。

「王が觴をあけたが君は未だ見ないですか、王が云はれたが君は未だ聞かないですか、」

寶はほんやりしてゐる物を忘れたやうであつた。そこで氣が注いでひどく慚ぢた。席を離れて云つた。

「臣は優渥なお言葉を賜はりながら、覺えず酔ひすごして、禮儀を失ひました、どうかおゆるしくいただきますやうに、」

そして寶が退出しやうとすると王は起つて云つた。

「君に逢ふてから、ひどく好きになつた、なぜそんなにあはてて歸られる、君がもうゐることができないなら、強ひはしないが、もし君が心にかけてゐてくれるなら、更に改めてお迎ひをしよう、」

たうと、彼の褐衣の内官に命じて、寶を送つて歸らした。その途中で内官は寶に云つた。

「さつき王が婚禮をさすと云つたのは、あなたを駙馬にして結婚させやうとしてゐたやうですよ、なぜ黙つてゐたのです、」

寶は足すりして悔んだがおつかなかつた。そこでたうとう家に歸つた。歸つたかと思ふと忽ち夢が醒めた。寢



には夕陽が残つてゐた。寶は起きて目をつむつてぢつと考へた。王宮へ往つたことがありありと目に見えて來た。晩になつて寶は、齊の燭を消して、また彼の夢のことを思ふたが、夢の國の路は遠くて往くことができなかつた。寶はただ悔み歎くのみであつた。

ある晩、寶は友人と榻を一つにして寝てゐた。と、忽ち前の褐衣の内官が來て、王の命を傳へて寶を召した。寶は喜んで従いて往つた。

寶は王の前へ往つて拜謁した。王は起つて寶の手を曳いて殿上にあけ、すこし引さがつて坐つて云つた。

『君がその後、小供のことを思ふてくれたことを知つてをる。小供と婚禮してもらひたいが、君は疑はないだらうか、』

寶はそこで禮を云つた。王は學士や大臣に命じて宴席に陪侍させた。酒が闌になつた時、宮女が進み出て云つた。

『公主のお仕度がととのひました、』

俄に三四十人の宮女が公主を奉じて出て來た。公主は紅い錦で顔をくるんでしつとりと歩いて來た。二人は毛氈の上へあがつて、たがひに拜しあつて結婚の式をあけた。

式がをはると公主は寶を送つて館舎に歸つた。夫婦のゐる室は温で清らかであつた。寶は公主に云つた。

『あなたを見ると、ほんとに楽しくつて、死ぬることも忘れるが、ただこれが夢でないかと心配するのです、』

公主は口に袖をやつて云つた。

『私とあなたと確にかうしてゐるではありませんか、どうしてこれが夢なものですか、』

朝になつて起きると、寶はたはむれに公主の顔に白粉をつけてやつた。寶はまたその後で帯で公主の腰のまはりをはかり、それから指で足のまはりをはかつた。公主は笑つて訊いた。

『あなたは氣が違つたのではありませんか、』

寶は云つた。

『わたしは時どき夢のためにあやまれるから、精しくしらべておくのです、かうしておけば、もし、これが夢であつても、想ひだすことができるのですから、』

寶の戯れ笑ふ聲が未だをほらないうちに、一人の宮女があたふたと走つて來て云つた。

『妖怪が宮門に入りましたから、王は偏殿に避けられました、おそろしい禍がすぐ起ります、』

寶は大に驚いて王の所へかけつけた、王は寶の手を執つて泣いて云つた。

『どうか棄てないで、國の安泰をはかつてくれ、天が彗を降して、國祚が覆らうとしてをる、どうしたらいいだらう、』

寶は驚いて訊いた。

『それはどんなことでもいいます、』



王は案の上の上奏文を取つて寶の前に投げた。寶は啓けて讀んだ。それは含香殿大學士黒翼の上奏文であつた。含香殿大學士、臣黒翼、非常の妖異を爲す、早く都を遷し、以て國脈を存することを祈る。黃門の報稱に據るに、五月初六日より、一千丈の巨蟒來り、宮外に盤踞し、内外臣民を吞食する一萬三千八百餘口、過ぐる所の宮殿、盡く邱墟と成りて等し。因て臣勇を奮ひ前み窺ひて、確に妖蟒を見る。頭、山岳の如く、目、江海に等し。首を昂ぐれば即ち殿閣齋しく呑み、腰を伸ばせば則ち樓垣盡く覆る。眞に千古未だ見ざるの凶、萬代遭はざるの禍、社稷宗廟、危、且夕に在り。乞ふ皇上早く宮眷を率ゐて、速に樂土に遷れよ云云。寶は讀み畢つて顔の色が土のやうになつた。その時宮女が奔つて來て奏聞した。

『妖物がまゐりました。』

宮殿の中は哀しさうに泣く泣き聲で満たされた。それは天日も無くなつたやうな慘澹たるものであつた。王はあはてふためいて何をするともできなかつた。ただ泣いて寶の方を向いて云つた。

『小供はもう先生に願ひます。』

寶は息をきつて歸つた。公主は侍女と首を抱きあつて哀しさうに泣いてゐた。寶が入つて往くのを見ると公主は袷にとりついて云つた。

『あなたは、なぜ私をすてておくのです。』

寶は公主がいたましくてたまらなかつた。そこで腕に手をかけて抱きかかへるやうにして云つた。

『わたしは貧しいから、立派な邸宅のないのを慚ぢます、ただ茅廬あはらやがあります、しばらく一緒に匿れようではありませんか。』

公主は目に涙をためて云つた。

『こんな場合です、そんなことを云つてる時ではありません、どうか早く伴れてつて下さい。』

寶はそこで公主を扶けて宮殿を逃げましたが、間もなく家へ著いた。公主は云つた。

『これなら安心です、私の國に勝つてをります、私はかうしてあなたに従いてまゐりましたが、お父様とお母様は何處にをりませう、どうか別にも一つ家をたてて下さい、國の者も皆まゐりますから。』

寶は貧しいので急に家を新建することはできなかつた。寶は困つた。公主は泣き叫んで云つた。

『妻の家の急を救つてくだされないで、夫が何處に必要です。』

寶はそれをなぐさめて自分の室へ入つた。公主は牀につつぷしたなりに啼き悲しんでよさなかつた。寶は心を苦しめたが他に手段がなかつた。と、急に目があいた。寶は始めて夢であつたと云ふことを知つた。そして、氣が注くと耳もとで物の啼く聲が聞えてゐるが、ちつと聞くと人の聲ではなかつた。それは二三疋の蜂が枕もとを飛びながら鳴く聲であつた。寶は叫んだ。

『不思議なことがあるぞ。』

一緒に寝てゐた友人がその故を訊いた。寶はそこで夢の話友人に告げた。友人も不思議がつて一緒に起きて



蜂を見た。蜂は竈の袂と裳の間にまっはりついて拂つても去らなかつた。

友人はそこで竈に蜂の巢を造つてやれと勧めた。竈は友人の言葉に従うてそれを造り、兩方の堵かきを堅くした。すると蜂の群が牆の外から來はじめたが、それは絡繹として織るやうであつた。蜂はまだ巢の頂上ができあがらないのに、一斗ほども集まつて來た。竈はその蜂が何處から來たかと思つて、來た所をしらべてみるとそれは隣の圃からであつた。その隣の圃には蜂の巢が二つあつて、三十年あまりも蜂が棲んでゐた。竈はそれを隣の老人に話した。老人は圃に往つてその巢を覗いた。巢の中はひっそりとして蜂はもう一疋もゐなかつた。壁をあばいてみるとその中に蛇がゐた。蛇の長さは一丈ばかりもあつた。老人はそれを殺してしまつた。そこで夢の中の蜂は、即ちその蛇であつたと云ふことが解つた。蜂は竈の家へ移つてますます蕃息した。

小

翠



王太常は越人であつた。少年の時、晝、榻の上で寝てゐると、空が不意に曇つて暗くなり、大きな雷がにはかに鳴りだした。一疋の猫のやうで猫よりはすこし大きな獸が入つて来て、榻の下に隠れるやうに入つて體を延べたり屈めたりして離れなかつた。

暫くたつて雷雨がやんだ。榻の下にゐた獸はすぐ出て往つたが、出て往く時に好く見るとどうしても猫でないから、そこでふと怖くなつて、次の室にゐる兄を呼んだ。兄はそれを聞いて喜んで云つた。

『弟はきつと、ひどく貴い者になるだらう、これは狐が来て、雷霆の劫を避けてゐたのだ、』

後、果して少年で進士になり、縣令から侍御になつた。その王は元豊と云ふ小供を生んだが、ひどい馬鹿で、十六になつても男女の道を知らなかつた。そこで郷黨では王と縁組する者がなかつた。王はそれを憂へてゐた。ちやうどその時、一人の女が少女を伴れて王の家へ来て、その少女を元豊の夫人にしてくれと云つた。王夫妻はその少女に注意した。少女はにつと笑つた。その顔なり容なりが仙女のやうに美しかつた。二人は喜んで名を訊いた。女は自分達の姓は虞、少女の名は小翠で、年は十六であると云つた。そこで少女を買ひ受ける金のことを相談した。すると女が云つた。

『私と一緒にゐると腹一ぱいたべることもできません、かうした大きなお宅に置いていただいて、下女下男を使つて、おいしいものがだべられるなら、本人も満足ですし、私も安心します、金はいただかなくてよろしうございます、』

王夫人は悦んで小翠をもらひ受けることにして厚くもてなした。女はそこで小翠に云ひつけて、王と王夫人に拜をさして、云ひきかせた。

『このお二方は、今日からお前のお父さんお母さんだから、大事に事へなくてはいけないよ、私はひどく忙しいから、これから歸つて、三四日したら復た来るよ、』

王は下男に云ひつけて女を馬で歸さうとた。女は家はすぐ近いから、人手を煩はさなくても好いと云つて、たうとうそのまま歸つて往つた。小翠は悲しさうな顔もせず、平氣で區の中からいろいろの模様を取り出して弄つてゐた。

王夫人は小翠を可愛がつた。夫人は三四日しても小翠の母親が來ないので、家は何處かと云つて訊いてみたが、小翠は知らなかつた。それではどの方角からどうして來たかと訊いたが、それも云ふことができなかった。

王夫妻はたうとう外の室をかまへて、元豊と小翠を夫婦にした。親戚の者は王の家で貧乏人の小供を拾つて來て新婦にすると云ふことを聞いて皆で笑つてゐたが、小翠の美しい姿を見て驚き、もう何人も何も云はないやうになつた。

小翠は美しいうへに又ひどく慧であつた。能く翁姑の顔色を窺て事へた。王夫妻もなみはづれて小翠を可愛がつた。それでも二人は嫁が馬鹿な倅を嫌ひはしないかと思つて恐れた。小翠はむやみに笑ふ癖があつてよく諷をしたが、元豊を嫌ふやうなことはなかつた。



小翠は布を刺して毬をこしらへて毬蹴をして遊んだ。小さな皮靴を著けて、その毬を數十歩の先に蹴ておいて、元豊をだまして奔つて往つて拾はした。元豊と婢はいつも汗を流して小翠の云ふとほりになつてゐた。ある日、王がちやうど其所を通つてゐた。毬がほんど音を立てて飛んで来て、いきなりその顔に中つた。小翠と婢は一緒に逃げて往つた。元豊はまだ勢込んで奔つて往つてその毬を拾はふとした。王は怒つて石を投げつけた。元豊はそこでつつぶして啼きだした。

王はそのことを夫人に告げた。夫人は小翠の室へ往つて小翠を責めた。小翠はただ首を垂れて微笑しながら手で牀の隅をむしりだした。夫人が往つてしまふと小翠はもういたづらははじめて、元豊の顔を脂と粉でくまどつて鬼のやうにした。夫人はそれを見て、ひどく怒つて、小翠を呼びつけて口ぎたなく叱つた。小翠は几に倚つかりながら帯を弄つて、平氣な顔をして懼れもしなければ亦何も云はなかつた。夫人はどうすることもできないので、そこで元豊を杖で敲いた。元豊は大聲をあけて啼き叫んだ。すると小翠が始めて顔の色を變へて膝を折つてあやまつた。それで夫人の怒もすぐ解けて、元豊を敲くことをやめて往つてしまつた。小翠は笑つて泣いてゐる元豊を伴れて室へ入り、元豊の著物の上についた塵を拂ひ、涙を拭き、敲かれた痕をもんでやつたうへで、菓をやつたので元豊はやつと笑ひ顔になつた。

小翠は戸を閉めて、復た元豊を扮装して項羽にしたて、呼韓耶單子をこしらへ、自分はきれいな著物を著て虞美人に扮装して帳下の舞を舞ふた。又ある時は王昭君に扮装して琵琶を撥いた。その戯れ笑ふ聲が毎日のやうにやかましく室の中から漏れてゐたが、王は馬鹿な倅が可愛いので嫁を叱ることができなかつた。そこで聞かないやうなふりをして、そのままにしてあつた。

同じ巷に王と同姓の給諫の職にゐる者がゐた。王侍御の家とは家の數で十三四軒隔つてゐたが、はじめから仲がわるかつた。その時は三年毎に行ふことになつてゐる官吏の治績を計つて、功のある者は賞し、過のある者は罰する大計の歳に當つてゐたが、王給諫は王侍御の河南道を監督してゐることを忌みきらつて、中傷しようとした。王侍御はその謀を知つてひどく心配したがどうすることもできなかつた。ある夜王侍御が早く寝た。小翠は衣冠束帯して宰相に扮装したうへに、白い絲でたくさんなつくり髭までこしらへ、二人の婢に青い著物を著せて従者に扮装させて、厩の馬を引きだして家を出、作り聲をして云つた。

『王先生にお目にかからう、』

馬を進めて王給諫の門口まで往つたが、そこで鞭をあげて従者を敲いて云つた。

『わしは王侍御にお目にかかるのぢや、王給諫に逢ふのぢやない、彼方へ往け、』

そこで馬を回して歸つた。そして家の門口へ來たところで、門番は眞の宰相と思つたので、奔つて往つて王侍御に知らした。王侍御は急いで起きて迎へに出てみると、小翠であつたからひどく怒つて夫人に云つた。

『人が、わしのあらをさがしてゐる時ぢやないか、これでは家庭がをさまらなないと云ふことで中傷せられる、わしの禍も遠くはない、』



夫人は怒つて小翠の室へ走り込んで往つてせめ罵つた。小翠はただ馬鹿のやうに笑ふのみで辨解しなかつた。夫人はますます怒つたがまさか敵くこともできないし、また出さうにも家がないので出すこともできなかつた。夫妻は嫁を怨みもだえて一晩中睡らなかつた。

その當時宰相は權勢が非常に盛であつたが、その風手は小翠の扮装にそっくりであつたから、王給諫も小翠を眞の宰相と思つた。そこでしばしば王侍御の門口へ人をやつてさぐらしたが、夜半になつても宰相の歸つて往く氣配がなかつた。王給諫はそこで宰相と王侍御とが何かもくろんでゐると思つたので不安になり、翌日早朝、王侍御に逢つて訊いた。

『昨夜宰相があなたの所へ往つたのですか、』

王侍御は王給諫がいよいよ自分を中傷しようとするしたがまへだと思つたので、慙ぢると共にひどく恐れて、はつきりと返事をする事ができなかつた。王給諫の方では王侍御が言葉を濁すのは確に宰相が往つて何かもくろんでゐるから、王侍御を彈劾してはかへつて危険であると思つて、彈劾することはたうとやめてしまひ、それから王侍御に交際を求めて往くやうになつた。王侍御はその情を知つて心に喜んで、そしてひそかに夫人に云ひつけて、小翠に行を改めるやうに勧めさせた。小翠は笑つてうなづいた。

翌年になつて宰相は官を免ぜられた。ちやうどその時、秘密の手紙を王侍御に送つて來た者があつたが、それが誤つて王給諫の許へ届いた。王給諫はひどく喜んで、その秘密の手紙を種に王侍御を恐喝して金を取るつもり

で、先づ王侍御と仲の善い者にその手紙を持つて往かして一萬の金を假らした。王侍御はそれを拒んで金を出さなかつた。そこで王給諫が自分で王侍御の家へ出かけて往つた。王侍御は王給諫に逢はふと思つて客の前へ著てゆく巾つぎんと袍たうをさがしたが、二つとも見つからないので、すぐ出ることができなかつた。王給諫は長く待つてゐたが王侍御が出て來ないので、これは王侍御が傲慢で出て來ないだらうと思つて、腹を立てて歸らうとした。と、元豊が天子の著るやうな袞龍こんりゆうの服ふくを著まつて、室の中から一人の女に推し出されて出て來た。王給諫はひどく駭くと共に、王侍御を陥れる材料があるがらに見つかつたので、笑顏をして元豊を旁へ呼んで、だましてその服と冕みんを脱がせ、風呂敷に包んで往つてしまつた。王侍御は急いで出て來たが、客がもう歸つてゐないので、訊いてみるとその事情が解つた。王侍御は顛うづへあがつて顔色が土のやうになつた。彼は大聲を出して哭いて云つた。

『もうたすからない、大變なことになつた、』

王侍御は陽に指をさして、我が一族が誅滅せられることは、この陽を見るよりも明であると云つた。王侍御は小翠を殺しても飽きたらなと思つた。彼は夫人と杖を持つて小翠の室へ往つた。小翠はもうそれを知つて扉を閉めて、二人が何と云つて罵つてもそのままにして啓けなかつた。王侍御は怒つて斧で扉を破つた。小翠は笑ひを含んだ聲で云つた。

『お父様、どうか怒らないでください、私がをりますから、罪があれば私一人が受けます、どんなことがあつて



も御両親をまきぞへにはいたしません、お父様がそんなことをなさるのは、私を殺して人の口をふさがうとなさるのですか、」

王侍御もそこで止めてしまつた。家へ歸つた王給諫は上疏して王侍御が不軌を謀つてゐると云つて、元豊から剃ぎとつた服と冕を證據としてさし出した。天子は驚いてそれを調べてみると、旒冕は糜藥ひびやくの心しんで編んだもので、袞龍の服は敗れた黄ろな風呂敷であつた。天子は王給諫が人を誣しひるのを怒つた。又元豊を召したところで、ひどい馬鹿であつたから、笑つて云つた。

「これで天子になれるのか、」

そこでその事件を法司の役人にわたした。その時王給諫は又王侍御の家に怪しい人がゐると訟へた。法司の役人は王侍御の家の奴婢ひつを呼び出して嚴重に詮議をしたがそれにも異状がなかつた。ただお轉婆の嫁と馬鹿な倅とが毎日ふざけてゐると云ふことが解つた。隣家について詮議をしても他に違つたことを云ふ者がなかつた。そこで裁判が決定して、王給諫は雲南軍にやられた。

王侍御はそれから小翠を不思議な女だと思ひだした。又母親が久しく來ないので人でないかもわからないと思つて、夫人にそれを訊かした。小翠はただ笑ふのみで何も云はなかつた。二度目に復た問ひつめると小翠は口に袂をやつて笑ひをこらへながら、

「私は玉皇の女です、母は知りません、」

と云つて眞まことのことは云はなかつた。それから間もなく王侍御は京兆尹に拔擢せられた。年はもう五十あまりになつてゐた。王は何時も孫の無いのを患へてゐた。小翠は王の家へ來てからもう三年になつてゐたが、元豊とは夜よる榻を別にしてゐた。夫人はその時から元豊の榻をとりあけて、小翠の榻に同寢させるやうにした。

ある日、小翠は室で湯あみをしてゐた。元豊がそれを見て一緒に湯あみをしようとした。小翠は笑ひ笑ひそれを止めて、湯あみをすまし、その後で熱い煮たつた湯を甕かめに入れて、元豊の著物を脱ぎ、婢に手傳はして伴れて往つてその中へ入れた。元豊は湯氣に蒸こされて苦悶しながら大聲を出して出ようとした。小翠は出さなればかりか衾かきんを持つて來てそのうへからかけた。

間もなく元豊は何も云はなくなつた。衾をとつて見るともう死んでゐた。小翠は平氣で笑ひながら元豊の屍を曳きあけて牀の上に置き、體をすつかり拭いて乾かし、復たそれに被よぎを著せた。夫人は元豊の死んだことを聞いて、泣きさげびながら入つて來て罵つた。

「この氣ちがひ、何故私の小供を殺した、」

小翠は笑つて云つた。

「こんな馬鹿な小供は、無い方がいいぢやありませんか、」

夫人はますます怒つて、小翠にむしやぶりついて自分の首を小翠の首にくつつけるやうにした。婢達はなだめなだめ曳き別けようとした。さうしてやかましく云つてゐるうちに、一人の婢が云つた。



『若旦那様が呻つてますよ、』

夫人は喜んで泣くことをやめて元豊を撫でた。元豊は微に息をしてゐるが、びつしより大汗をかいて、それが裊裊まで濡らしてゐた。食事する位の時間をおいて汗がやんだところで、元豊は忽ち目をぱつちり開けて四邊を見た。そして家の人をぢつと見たが、見おほえがないやうなふうであつた。元豊は云つた。

『私は、これまでのことを思つてみるに、すべて夢のやうです、どうしたのでせう、』

夫人はその言葉がはつきりして今までの馬鹿でないから、ひどく不思議に思つた。父の前へ伴れて往つて試みてみたが、生れかはずつたやうになつてゐるので、不思議な寶を獲たやうに大喜びをした。そこで夫人は元豊から取りあけてあつた榻を故の處へ還して、更めて寢床をしつらへて注意してゐた。元豊は自分の室へ入ると婢を出した。朝早く往つて覗いてみると榻を空にして小翠の室に往つてゐた。それから元豊の病氣は二度と起らなかつた。元豊と小翠は夫婦の間がいたつて和合して、影の形に隨ふがやうであつた。

一年あまりして王は給諫の黨から彈劾せられて免官になつた。王の家に一つの玉瓶があつた。廣西中丞が小さな過失があつて譴責を受けた時に賂賄として贈つて來たものであつた。それは千金の價があつた。王はそれを出して當路の者に賂賄に贈らうとしてゐた。小翠はそれが好きで平生玩つてゐるが、ある日それを取り墮して碎いてしまつた。小翠は自分の過を慙ぢて王夫妻の前へ往つてあやまつた。王はちやうど免官になつて不平な際であつたから怒つて口を尖らして罵つた。小翠も怒つて元豊の所へ往つて云つた。

『私があなたの家を援ふたことは、一つの瓶位ではありません、なぜすこしは私の顔もたててくれないので、私は、今、あなたに眞のことを云ひます、私は人ではありません、私の母が雷霆の劫に遭ふて、あなたのお父様の御恩を受けましたし、又私とあなたは、五年の夙分しゆくぶんがありましたから、母が私をよこして、御恩返しをしたのです、もう私達の宿願は達しました、私がこれまで罵られ、はづかしめられても往かなかつたのは、五年の愛が未だ盈たなかつたからです、かうなつてはもうすこしもゐることはできません、』

小翠は威張つて出て往つた。元豊は驚いて追つかけたがもう何處へ往つたか見えなかつた。王は茫然とした。そして後悔したがおつつかかなかつた。元豊は室へ入つて、小翠の化粧の道具を見て、またしても小翠に往かれたのが悲しくなつて、泣き叫んで死なうとまで思つた。彼は寢ても睡られず食事をして味がなかつた。彼は日に日に瘦せて往つた。王はひどく心配して、急に後妻を迎へてその悲しみを忘れさせようとしたが、元豊はどうしても忘れなかつた。そこで上手な畫工に小翠の像を畫かして、夜も晝もそれに禱つてゐた。

幾んど二年位してのことであつた。元豊は故があつて他村へ往つて夜になつて歸つてゐた。圓い明月が出てゐた。村の外に王の家の亭園があつた。元豊は馬でその牆の外を通つてゐるが、中から笑ひ聲が聞えるので、馬を停め、従者に轡をしつかり捉へさせてその上にあがつて見た。そこには二人の女郎むすめが戯れてゐた。ちやうどその時月に雲がかかつたので、どんな者とも見わけることができなかつた。ただ一方の翠の著物を著た女の云ふ聲が聞えた。



「お前を此所から逐ひだすわよ、」

すると一方の紅い著物を著た女が云つた。

「あなたは、私の家の庭にゐながら、何人を逐ひだすと云ふのです、」

翠の著物の女は云つた。

「お前はお嫁になることもできないで、おんだされたのを羞ぢないの、未だ人の家の財産を自分の所有にしてゐるつもりなの、」

紅い著物の女は云つた。

「姉さんは、ひとりほつちでゐる者に勝たうとしてゐるのですね、」

その紅い著物の女の聲を聴くとひどく小翠に似てゐるので、急いで大聲で云つた。

「小翠、小翠、」

翠の著物の女は往つてしまつた。往く時紅い著物の女に云つた。

「暫く喧嘩するのを待たうね、お前の男が來たのだから、」

紅い著物の女がもう來た。思つたとほりそれは小翠であつた。元豊にうれしくてたまらなかつた。小翠を垣の上へのほらして、手をかしておりにこさした。小翠は云つた。

「二年お目にかからないうちに、ひどくお痩せになりましたね、」

元豊は小翠の手を握つて泣いた。そして思ひつめてゐたと云ふことを云つた。小翠は云つた。

「私もよくそれを知つてゐたのですが、ただお宅へは歸へれないものですから、今、姉と遊んでましたが、又かうしてお目にかかるのも、因縁ですね、」

元豊は小翠を伴れて歸らうとしたが、小翠はきかなかつた。それではこの亭園にゐてくれと云ふと承知した。

そこで従者をやつて夫人に知らせた。夫人は驚いて轎に乗つて往き、鑰を啓けて亭に入つた。小翠は趨つて往つて迎へた。夫人は小翠の手を捉つて涙を流し、力めて前の過を謝した。

「もし、前のことを氣にかけないでゐてくれるなら、一緒に歸つておくれでないかね、私も年をとつたし、」

小翠ははげしい言葉でそれを斷つた。夫人はそこで田舎の荒れた寂しい亭園に二人でゐるのは不便だらうと思つて、多くの奴婢をつけて置かうとした。女は云つた。

「私はそんなたくさんな人の顔を見るのはいやです、ただ前の二人の婢と、外に年とつた下男を一人、門番によこしてくださいまし、その外には一人も必要がありません、」

夫人は小翠の云ふなりになつて、元豊に頼んでその亭園の中で靜養さすことにし、毎日食物を送つてよこした。小翠は何時も元豊に、別に結婚せよと勧めたが、元豊は承知しなかつた。

一年あまりして小翠の容貌や音聲がだんだん變つて來た。元豊は何時か畫かした小翠の像を出して見くらべたが、別の人のやうであるからひどく怪しんだ。女は云つた。



『私は今と昔とどうなつてゐるのです、』

元豊は云つた。

『今も美しいことは美しいが、昔に較べると及ばないやうだな、』

小翠は云つた。

『それは私が年とつたからでせう、』

元豊は云つた。

『二十歳あまりで、どうして急に年をとるものかね、』

小翠は笑つてその畫を焚いた。元豊はそれを焚かすまいとしたが、もうめらめらと燃えてしまつた。

ある日小翠は元豊に話して云つた。

『昔、お宅にゐる時に、お母様が私を死ぬるやうな目に逢はせましたから、私にはもう小供が生まれません、今、御両親がお年を召してゐらつしやるのに、あなたが一人ほつちでは、私に小供はできないし、あなたの血統がたへるやうなことがあつては大變です、お宅へ奥さんをお迎へになつて、御両親のお世話をさし、あなたは兩方の間を往來なさるなら、不便なこともないぢやありませんか、』

元豊はそれをもつともだと思つた。そこで幣ひなを鍾太史の家へ納れて婚約を結んだ。その結婚の式が近くなつたところで、小翠は新婦のために衣装から履物までこしらへて送つたが、その日になつて新婦が元豊の家の門を

入ると、その容貌から言語舉動まで、そつくり小翠のやうになつて、すこしもかはらなかつた。元豊はひどく不思議に思つて亭園へ往つて見た。小翠はもう何處へか往つて往つた所が解らなくなつてゐた。婢に訊くと婢は紅い巾てふきを出して云つた。

『奥さんは、ちよつとお里へお歸りになるとおつしやつて、これをあなたにおあけしてくれと申しました、』

元豊が巾をあけてみると玉珓を一枚結びつけてあつた。元豊はもう心に小翠が二度と返つて來ないと云ふことを知つた。そこでたうとう婢を伴れて家に歸つた。元豊はすこしの間も小翠を忘れることはできなかつたが、幸に小翠そつくりの新婦の顔を見ると小翠を見るやうで心が慰められた。そこで元豊は始めて鍾氏との結婚を小翠が預め知つてゐて、先づその容貌を變へて、他日の思ひを慰めてくれるやうにしてくれてあつたと云ふことを悟つた。



偷

桃



少年の時郡へ往つたが、ちやうど立春の節であつた。昔からの習慣によるとその立春の前日には、同種類の商買をしてゐる者が山車をこしらへ、笛をふき鼓をならして、郡の役所へ往つた。それを演春と云ふのであつた。私も友人に従いてそれを見物してゐた。その日は外へ出て遊んでゐる人が人垣を作つてゐた。堂の上には四人の官人に扮した者がゐるが、皆赤い著物を著て東西に向きあつて坐つてゐた。私は小さかつたからそれが何の官であつたと云ふことは解らなかつた。たださはがしい人聲と笛や鼓の音が耳に一ぱいになつてゐたのを覚えてゐる。その時一人の男が髪を垂らした小供を伴れて出て来て、官人の方に向つて何か云ふやうなふりであつたが、さはがしいので何を云つてゐるのか聞くことができなかった。と、見ると山車の上に笑ひ聲をする者があつた。それは青い著物を著た下役人であつた。下役人は大聲で彼の男に向つて芝居をせよと云ひつけた。彼の男は何の芝居をしようかと訊いた。官人達は顔を見あはして三言四言云つた。そこで下役人が、

「お前は何が得意か、」

と訊いた。彼の男は、

「何もない所から物を取つてくることができます、」

と云つた。下役人はそこで官人に申しあげた。と、しばらくして命がくだつた。下役人は彼の男に向つて云つた。

「桃を取つてまわれ、」

彼の男は承知して、衣をぬいで笥の上に向け、物を怨むやうな所作をして云つた。

「お役人様は、物がわからない、こんな氷の張つてゐる時に、何處に桃があるだらう、しかし、又取らなければ怒に觸れる、さて、どうしたらいいかなア、」

すると彼の伴れてゐる小供が云つた。

「お父さんは、もう承知したぢやないか、今更できないとは云はれないだらう、」

彼の男は困つてなげくやうな所作をしてゐて、やや暫くして云つた。

「よし、思ひついた、この春の雪の積んでゐる時に、人間世界に何處に桃がある、ただ西王母の園の中は、一年中草木が凋まないから、もしかするとあるだらう、天上から竊むがいいや、」

そこで小供が云つた。

「天へ階をかけて昇つて往くの、」

彼の男が云つた。

「それは俺に術があるよ、」

そこで笥を啓けて一束の繩を出したが、その長さは二三十丈もあつた。彼の男はその端を持つて、空中へ向つて投げた。と、繩は物があつてかけたやうに空中にかかつたので、手許にある分を順順に投げあげると繩は高く高く昇つて往つて、その端は雲の中へ入つた。それと共に手に持つてゐた繩もなくなつた。そこで小供を呼んで



云つた。

「來な、俺は年寄で、體が重いから往けない、お前が往つて來な、  
たうとう繩を小供に持たして、

「これから登つて往きな、」

と云つた。小供は繩を持つて困つたやうな所作をして、そして父親を怨むやうに云つた。

「お父さんは、あまり物がわからないや、こんな一本の繩でどうして天へ登れる、もし道中で切れでもしたら、  
骨も肉もみぢんになるのだよ、」

彼の男は無理に昇らさうとして云つた。

「俺がつい口をすべらして、引き上げたから、もう後悔してもおツつかない、往つてくれ、もし、桃を竊んで來  
たなら、きつと百圓、金を出して、それで佳い女を買つてお前の嫁にしてやる、」

小供はそこで繩を登つて往つた。それはちやうど蛛くもが糸を傳つて往くやうであつた。そしてだんだん雲の中へ  
登つて往つて見えないやうになつた。

暫くして空から一つの桃が墜ちて來た。それは盃よりも大きなものであつた。彼の男は喜んで、それを堂の上  
の官人にたてまつつた。官人は順順にそれを見たが、それは眞ほんまの桃であるかないかをしらべるやうなさまであ  
つた。と、忽ち繩が空から落ちて來た。彼の男は驚いて叫んだ。

「あぶない、天に人がゐて、繩を斷つたのだ、忤こたがたいへんだ、」

暫くして空から物が墜ちて來た。それは小供の首であつた。彼の男は首を抱きかかへて泣いて云つた。

「これは、きつと、桃を偷んでゐて、番人に見つかつたのだ。」

又暫くして一つの足が落ちて來たが、それにつづいて手も胴も體もばらばらと墜ちて來た。

彼の男は非常に悲しんで、一いちそれを拾つて筒の中へ入れて蓋をして、そして云つた。

「私はただこの小供しかありません、この小供は毎日私について來て手助けをしてくれましたが、たうと  
うこんなことになりました、これから往つて瘞なぐさめませう、」

そこで官人の前に跪いて云つた。

「桃のために小供を殺しました、もし、私を憐んでくださるなら、葬式を助けてください、どうにかしてこの御  
恩は返します、」

傍に坐つてゐる者は同情して、それぞれ金を出してくれた。彼の男はそれを腰につけてから、筒を扣いて云つ  
た。

「八八、出てお禮を云はないかい、何をぐずぐずしてゐるのだ、」

忽ち髪をもしやもしやにした小供の首が筒の蓋をもちあけて出て來て、北の方を向いてお辭儀をした。それは  
彼の小供であつた。それは不思議な術であつたから、私は今にそれを覚えてゐるが、後に聞くと白蓮教の者はこ



劉  
海  
石

倫  
桃

の術をすると云ふことであつたが、ついすると彼の男はその苗裔かも知れない。



劉海石は蒲臺の人であつた。十四歳の時にその地方に戦亂が起つたので、両親に従いて濱州に逃げて往つて、其所に住んでゐたが、その濱州に劉滄客と云ふ者があつて、同じ教師に就いて學問をした關係から仲が好くなつて、たうとう義兄弟の約束をした。

間もなく海石の両親が亡くなり、海石はその遺骨を奉じて蒲臺の故郷へ歸つたので、二人の間の音問は絶えてしまつた。

滄客の家は頗る裕であつた。年が四十になつたところで、二人ある小供のうちの長男の吉と云ふのは、十七歳で邑の名士となり、次男も亦慧であつた。滄客はその時、邑の倪と云ふ家の女を妾にしてひどく愛してゐたが、半年ばかりして長男が腦の痛む病氣になつて歿くなつた。夫妻はひどくそれを歎いたが、間もなくその細君も病氣になつて歿くなつた。そして三四箇月したところで、長男の媳であつた女も病氣になつてこれ亦歿くなつてしまつた。そのうへに婢や僕もつぎつぎに歿くなつたので、滄客は悲みにたへられなかつた。

ある日、つくねんと坐つて悲しんでゐると、不意に門番が來て、海石が來たと云つて知らした。滄客は喜んで急いで戸口へ往つて迎へて來た。二人はそこで寒いあついの挨拶をしようとした。ところで海石は驚いて云つた。

『君は一家族が全滅するが、知らないかね、』

滄客はびつくりしたが、海石がどうしてそんなことを云ふのかその理由が解らなかつた。海石は云つた。

『久しく逢はなかつたが、君はこの頃、どうもしあはせが悪いやうだね、』

滄客は泣きながら家の不幸を話した。海石もすすり泣きをしたが、やがて笑つて云つた。

『しかし、もう僕が來たから大丈夫だ、安心したまへ、』

滄客は云つた。

『久しく逢はないうちに、醫者の修業をしたかね、』

海石は云つた。

『醫者のことは知らない、家相と方位を見ることを、すこし習つたばかりだよ、』

滄客は喜んで、そこで家相を見てくれと云つた。海石は中へ入つて残らず家の内外を觀まはつたが、その後で家族の者を見たいと云ひだした。滄客は海石の云ふとほり、小供、媳、婢、妾、家族全體を座敷へ集めて、それにいち指をさして教へた。滄客の指が妾の倪に往つたところで、海石は仰向いて大聲に笑ひだしたが暫くその笑聲がやまなかつた。一座の者は何事だらうと思つて不思議がつた。と、見ると、倪がわなわなと慄ひだして顔の色が無くなつたが、にはかにその體が縮んで、二尺あまりになつてしまつた。海石は文鎮を持つてその首を撃つた。その音が缶を打つ音のやうであつた。海石はそこでその髪をひつつかんで、後腦のところを檢べた。三四本の白髪が其所にあつた。海石はそれを抜かうとした。女は頸を縮めて啼いて、

『此所を出て往きますから、どうか抜かないでください、』  
と云つた。海石は怒つて、



「汝は未だ悪い心がうせないのか、」

と云つて、その白髪を抜いた。白髪を抜くと同時に女は毛の黒い狸のやうな獣になつた。一座の者はひどく駭いた。海石はその獸をつかまへて袖の中へ納れ、次男の媳の方を向いて云つた。

「あなたはひどく毒を受けてゐらつしやる、背にかはつたことがあるでせう、見ませう、」

媳は羞かしがつてどうしても肩ぬぎにならなかつた。それを次男が強いてぬがしてみると、背の上に四寸ばかりの白い毛が生えてゐた。海石は針でその毛を抜きとつて云つた。

「この毛はもう古くなつてゐるから、七日おくれたなら、助からないところでした、」

又次男の背を見た。その背にも二寸ばかりの白い毛が生えてゐた。海石は云つた。

「これは、一月あまりすると死ぬるところだつた、」

滄客はそこで婢や僕の背も調べてもらつた。海石が云つた。

「僕がもし來なかつたら、君の一家族は全滅するところだつたよ、」

滄客は海石の袖の中に納れた獸のことを訊いた。

「それは何だね、」

海石は云つた。

「狐の類だよ、人の神氣を吸うて、不思議なことをする奴なんだから、人の死ぬるのを喜ぶのだよ、」

滄客が云つた。

「久しく逢はなかつた間に、君は不思議なことをやりだしたが、君は仙人になつたのぢやないかね、」

海石は笑つて云つた。

「師匠について小技を習つたまでだ、仙人ぢやないよ、」

滄客はその師匠のことを訊いた。海石は云つた。

「山石道人だ、だが、僕は、この獸を殺すことができないから、師匠に献上することにする、」

海石はそこで歸らうとして別れの挨拶をしたところで、袖の中が空になつてゐるのに氣がついた。海石は駭いた。

「しまつた、しつほの先に大きな毛があつたのを、未だ抜かなかつたから、遁けて往つたのだ、」

一座の者は駭いた。海石は云つた。

「首の毛を皆抜いてあるから、人に化けることはできない、ただ獸には化けられる、遁けても遠くへは往つてゐないだらう、」

そこで室の中へ入つて往つて飼つてある猫を見、門を出て往つて犬をけしかけたが、それには異状がなかつた。豕を飼つてある圈を啓けて笑つて云つた。

「此所にゐる、」



滄客は其所に往つてみた。圈の中には豕が一疋多くなつてゐた。豕は海石の笑聲を聞くと、たうとう寢て動か  
なかつた。海石はその耳をつかんでつかまへて出た。しつほに一本の針のやうな硬い白い毛があつた。海石がそ  
れを檢べて抜かうとした。豕は體を動かして抜かさなかつた。海石が云つた。

「汝はたくさん悪いことをしながら、未だ一本の毛を惜しがるのか、」

海石はしつかと豕をつかまへてその毛を抜いた。と、豕はそのまま狸になつた。海石はそれを袖に納れて出て  
往かうとした。滄客が無理に留めたので飯を喫つて歸つた。海石は云つた。

「この次は、何日比逢へるだらう、」

「どうも預定することができない、僕の師匠は、大きな願を立てて、僕等を海上へ傲遊さして、衆生を救はして  
ゐるから、二度と逢へるか逢へないかも解らない、」

滄客は海石と別れた後になつて、山石道人の名を靜に考へてから、始めて悟つて云つた。

「海石は仙人だ、」

それは山と石の字を合はすと岩の字になるが、それは呂仙の諱であつた。

# 聊齋志異

清蒲松齡著  
公田連太郎註



聊齋志異

考城隍

清蒲松齡著

公田連太郎註

- (一) 邑廩生は邑より廩祿を給する生員、邑の給費生なり。
- (二) 牒は官文書。
- (三) 白顛馬は額に白毛ある馬。
- (四) 文宗は文章を能くして人に宗仰せらるる者。今、試験官をいふ。考は試験する也。文宗云は、未だ試験の期日に至らざるが故に、試験を受くるを得ずとの意。
- (五) 生疎は未だ嘗て通過したること無き路なるをいふ。
- (六) 府廨は官署なり。
- (七) 關壯繆は關帝即ち關羽なり。漢の後帝建興七年、關羽に壯繆と諡す。
- (八) 几墩は、つくゑと腰掛。
- (九) 札は木簡の薄き者。
- (一〇) 題紙は題を書きたる紙。
- (一一) 俵贊は相傳へて之を見て賞賛するなり。
- (一二) 城隍は城の隍(ホリ)の神。
- (一三) 録用は採用する也。

予姉夫之祖。宋公諱燾。邑廩生。一日病臥。見吏持牒。牽白顛馬來。云。請赴試。公言。文宗未臨。何遽得考。吏不言。但敦促之。公力疾乘馬從去。路甚生疎。至一城郭。如王者都。移時。入府廨。宮室壯麗。上坐十餘官。都不知何人。惟關壯繆可識。簷下設几墩各二。先有一秀才坐其末。公便與連肩。几上各有筆札。俄題紙飛下。視之。八字云。一人二人。有心無心。二公文成。呈殿上。公文中。有云。有心爲善。雖善不賞。無心爲惡。雖惡不罰。諸神傳贊不已。召公上。諭曰。河南缺一城隍。君稱其職。公方悟。頓首泣曰。辱膺寵命。何敢多辭。但老母七旬。奉養無人。請得終其天年。惟聽錄用。上一帝王像者。即令



- (一四)稽は取調べる也。壽籍は壽命を記録したる帳簿。
- (一五)陽算は人間世界の壽命。
- (一六)攝篆。篆は書體の一種にて、印章に用ふ。攝篆は官職を代理するをいふ。
- (一七)瓜代は更代する也。左傳の莊公八年に、齊侯、連稱管至父をして葵邱に成せしむ。瓜の時にして往く。曰く、瓜に及びて代らんと」とあるに本づく。
- (一八)卽は即時なり。
- (一九)給假は休假を給する也。
- (二〇)長山は縣の名、今、山東省濟南道に屬す。
- (二一)營葬は葬事を處置する也。
- (二二)浣濯は沐浴する也。
- (二三)岳家は妻の父の家。
- (二四)臂は馬の飾なり。鑣臂は彫飾を施したる馬の帶なり。詩經秦風に「虎韞鑣臂」とあるに本づく。幘は馬の飾なり。朱幘は國君の用ふる馬の飾なり。詩經衛風に「朱幘鑣鑣」とあるに本づく。

(四)稽母壽籍有長鬚吏捧冊翻閱一過。自有陽算九年共躊躇間。關帝曰不妨令張生攝篆。九年瓜代可也。乃謂公應卽赴任。今推仁孝之心給假九年。及期當復相召。又勉勵秀才數語。二公稽首並下。秀才握手送諸郊野。自言長山張某。以詩贈別。都忘其詞。中有有花有酒春常在。無月無燈夜自明之句。公既騎乃別而去。及抵里。豁若夢寤。時卒已三日。母聞棺中呻吟。扶出。半日始能語。問之長山果有張生。於是日死矣。後九年母果卒。營葬既畢。浣濯入室而沒。其岳家居城中西門內。忽見公鑣臂朱幘。與馬甚衆。登其堂一拜而行。相共驚疑。不知其爲神。奔訊鄉中。則已沒矣。公有自記小傳。惜亂後無存。此其略耳。

瞳人語

- (一)方棟。方は姓、棟は名。
- (二)佻脫は輕薄脫落なり。かるぼづみにして禮義などに頓著せざること。
- (三)陌上は道上の意。游女はぶらぶら遊ぶで居る女。
- (四)輕薄は、うはき心を起しての意。尾綴は、あとをつけて行くなり。
- (五)清明は春分の後十五日。陽曆の四月五日又は六日の頃。二十四節の一。
- (六)郊郭は郊外。
- (七)蒲。婦人の乗車には顔を入に見られたぬやうに前後に戸の如き者をつけたる母衣の如きもの。幘は車の上に張る母衣の如きもの。
- (八)青衣は婢なり。
- (九)軟段は馬の形段舒緩なるなり。馬に乗じて徐行すること。
- (一〇)風狂兒は狂人。
- (一一)歸窻。女子既に嫁して後、歸りて父母の安否を問ふなり。
- (一二)胡覩は、むやみに何ひ見るなり。
- (一三)眺は投げかけるなり。
- (一四)眺は物、目の中に入るなり。
- (一五)經宿は一夜を經るなり。
- (一六)旋螺は涙のほろ／＼出る貌。
- (一七)旋螺は螺の貝殻の如きうづまきの形を爲したるくも。
- (一八)光明經は佛經の名。
- (一九)洗は事を以て人に託するなり。

長安士方棟。頗有才名。而佻脫不持儀節。每陌上見游女。輒輕薄尾綴之。清明前一日。偶步郊郭。見一小車。朱葦繡幘。青衣數輩。款段以從。內一婢。乘小駟。容色絕美。稍稍近覘之。見車幔洞開。內坐二八女郎。紅妝豔麗。尤生平所未睹。目眩神奪。瞻戀弗舍。或先或後。從駟數里。忽聞女郎呼婢近車側。曰。爲我垂簾下。何處風狂兒郎。頻來窺瞻。婢乃下簾。怒顧生曰。此芙蓉城七郎子新婦歸窻。非同田舍娘子。放教秀才胡覩。言已。掬轍土。矚生。生眯目不可開。纔一拭視。車馬已渺。驚疑而返。覺目終不快。倩人啓臉撥視。則睛上生小翳。經宿益劇。淚殺不得止。翳漸大。數日厚如錢。右睛起旋螺。百藥無效。懊悶欲絕。頗思自懺悔。聞光明經能解厄。持一卷。洗人教誦。初猶煩躁。久漸自安。且晚無事。惟趺坐捻珠。持之一年。萬緣俱靜。忽聞右目中。小語如蠅。曰。黑漆似。耐耐殺人。左目中應曰。可



- (一〇) 跌坐は結跏趺坐。坐禪を組むこと。珠は數珠なり。
- (一一) 萬縁俱靜とは心身共に寂靜なるをいふ。
- (一二) 黒漆似耐耐殺人。まつ暗でとてもたまたむとの意。耐は匠と同じ。耐耐は耐ふ可からざるなり。殺は笑殺惱殺等の殺と同じく、甚だしきないふ。「ゴロス」の意に非ず。
- (一三) 出此悶氣は鬱悶の氣を散するなり。きばらしをする事。
- (一四) 蠕蠕作癢。むづくと癢きこと。
- (一五) 匣はまぶた。
- (一六) 珍珠蘭は一名魚子蘭、色紫にして其蕾、珠の如く、花、穂を成し、香甚だ濃なり。
- (一七) 營營然は往來する貌。詩經に「營營たる青蠅」とあり。
- (一八) 隧道は地中の道。今のトンネル。
- (一九) 抓裂は爪にて引つ掻き裂くこと。
- (二〇) 脂膜は眼膜をいふ。
- (二一) 檢束は法度を以て節制するなり。

同小遊遊。出此悶氣。漸覺兩鼻中蠕蠕作癢。似有物出。離孔而去。久之乃返。復自鼻入。匣中又言曰。許時不窺園亭。珍珠蘭遽枯瘠死。生素喜香蘭。園中多種植。日常灌溉。自失明。久置不問。忽聞其言。遽問妻。蘭花何使憔悴死。妻詰其所自知。告之故。妻趨驗之。花果稿矣。大異之。靜匿房中。見有小人自生鼻內出。大不及豆。營營然竟出門去。漸遠。遂迷所在。俄連臂歸。飛上面。如蜂蟻之投穴者。如此二三日。又聞左言曰。隧道迂。還往非所甚便。不如自啓門。右應曰。我壁子厚。大不易。左曰。我試闢。得與而俱。遂覺左匣內。隱似抓裂。有頃。開視。豁見凡物。喜告妻。妻審之。則脂膜破。小竅。黑睛熒熒。纔如破椒。越一宿。障盡消。細視。竟重瞳也。但右目旋螺如故。乃知兩瞳人合居一匣矣。生雖一目眇。而較之雙目者。殊更了了。由是益自檢束。鄉中稱盛德焉。

種

- (一) 貨は賣るなり。
- (二) 破巾絮衣は、破れたるかぶりもの、破れたる綿入。
- (三) 咄は叱するなり。
- (四) 居士はもと道藝ある處士を謂ふ。こにては「あなた」といふが如し。
- (五) 劣者は品質下等なる者。一枚は一箇なり。
- (六) 傭保者はやとひ人。
- (七) 喋聒はかまびすしきこと。
- (八) 市は買ふなり。
- (九) 鏡は犁なり。又、藥を採る用具。道士は兼れて藥草を採集するを業とす。故に鏡を肩になひたるなり。
- (一〇) 吹は穿つなり。
- (一一) 沸瀦は沸騰したる湯。
- (一二) 接は受け取る也。
- (一三) 句萌。草木始めて生ずるとき、屈みたる者を句といひ、直なる者を萌といふ。ここにては桃の芽生えをいふ。
- (一四) 扶疎は繁茂するなり。
- (一五) 藥業は重なり合ふ貌。
- (一六) 丁は木を伐る聲。音サウサウ。

梨

有鄉人貨梨於市。頗甘芳。價騰貴。有道士破巾絮衣。丐於車前。鄉人咄之而不去。鄉人怒。加以叱罵。道士曰。一車數百顆。老衲止丐其一。於居士亦無大損。何怒爲。觀者勸置劣者一枚。令去。鄉人執不肯。肆中傭保者見喋聒不堪。遂出錢市一枚。付道士。道士拜謝。謂衆曰。出家人不解吝惜。我有佳梨。請出供客。或曰。既有之。何不食。曰。吾特需此核作種。於是掬梨大啗。且盡。把核於手。解肩上鏡。坎地上。深數寸。納之。而覆以土。向市人索湯沃灌。好事者於臨路店。索得沸瀦。道士接浸坎處。萬目攢視。見有句萌出。漸大。俄成樹。枝葉扶疎。倏而花。倏而實。碩大芳馥。纍纍滿樹。道人乃卽樹頭摘。賜觀者。頃刻而盡。已乃以鏡伐樹丁丁。良久。乃斷。帶葉荷肩頭。從容徐步而去。初道士作法時。鄉人亦雜衆中。引領注目。竟忘其業。道士既去。始顧車中。則梨已空矣。方悟適所俵散。皆己物也。又



- (二七) 俄散は分ちて人に與ふるなり。俄は分つなり。  
 (二八) 靶は響革なり。たづな。  
 (二九) 跡は跡を追うて行くこと。  
 (三〇) 梨本は梨の樹なり。  
 (三一) 粲然は大笑する貌。大に笑つて白齒か露はすこと。

細視車上一靶亡。是新鑿斷者。心大憤恨。急跡之。轉過牆隅。則斷靶棄垣下。始知所伐梨本。即是物也。道士不知所在。一市粲然。

嬌

- (一) 聖裔は孔子の苗裔。  
 (二) 執友は同師の友にして共に志を執る者。志を同じうする友をいふ。  
 (三) 天台は浙江省會稽道の縣の名。  
 (四) 函は封書をいふ。  
 (五) 落拓は落魄と同じ。落ちぶれること。貧窮なるをいふ。  
 (六) 蕭條は寂寥なる貌。眷口は家族なり。  
 (七) 籤は書籍の標題をいふ。  
 (八) 瑯環瑣記は、書名。蓋し實在の書に非ざるべし。瑯環の字は、元の伊士珍の撰と稱せらるる瑯環記に、張華、洞宮に遊び、一人に遇ふ。引いて一處に至れば、別にはれ天地、每室各々奇書有り。華、諸室の書を歴観するに、皆、漢以前の事にして、未だ聞かざる所の者多し。三墳・九丘・檮杌・春秋、亦皆在り。其地を問へば、曰く、瑯環福地なり」とあるに本づく。  
 (九) 行蹤は來歴の意。  
 (一〇) 設帳授徒は學舎を開きて生徒に教授すること。  
 (一一) 曹邴が季布の名聲を天下に宣揚したること、史記季布列傳に詳かなり。此處にては、自分は旅客にして

娜

孔生雪笠。聖裔也。爲人蘊藉。工詩。有執友令天台。寄函招之。生往。令適卒。落拓不得歸。寓普陀寺。備爲寺僧抄錄。寺西百餘步。有單先生第。先生故公子。以大詔蕭條。眷口寡。移而鄉居。宅遂曠焉。一日。大雪崩騰。寂無行旅。偶過其門。一少年出。丰采甚都。見生。趨與爲禮。畧致慰問。即乞降臨。生愛悅之。慨然從入。屋宇都不甚廣。處處悉懸錦幕。壁上多古人書畫。案頭書一冊。籤云。瑯環瑣記。翻閱一過。俱目所未睹。生以居單第。意爲第主。即亦不審官閥。少年細詰行蹤。意憐之。勸設帳授徒。生歎曰。羈旅之人。誰作曹邴者。少年曰。倘不以驚駘見斥。願拜門牆。生喜。不敢當師。請爲友。便問。宅何久。鋼答曰。此爲單府。曩以公子鄉居。是以久曠。僕皇甫氏。祖居陝。以家宅焚於野火。暫借安頓。生始知非單。當晚談笑甚懽。即留共榻。味爽。即有僮子熾炭於室。少年先起入內。生尙擁被坐。僮入白。



知已無きが故に、曹邴が季布の名を  
 宣揚せしが如く、自分を世話してく  
 れる人無しの意。  
 (一) 驚駭は愚鈍劣才の意。  
 (二) 拜門牆は門弟子と爲らんとの意。  
 (三) 安頓は寓居するをいふ。  
 (四) 榻は臥榻。寢室なり。  
 (五) 擁被は寝衣なり。寝ぬる時に  
 體を覆ふに用ふ。夜著にくるまるこ  
 と。  
 (六) 股謝は大に謝する也。股は盛なり。  
 (七) 塗鴉は字を書くことの拙劣なるを  
 言ふ。學塗鴉とは、てならぬに字を書  
 くことを學んだとの意なり。盧全の書  
 詩に「塗抹詩書如老鴉」とある。本づ  
 く。全の子年幼なるとき、常に墨を以  
 て詩書を塗抹せり、故に然云ふ。  
 (八) 行輩は同輩の親類。  
 (九) 几榻の榻は腰掛なり。牀の狭くし  
 て長き者を榻と謂ふ。  
 (一〇) 湘妃は琵琶の曲の名。  
 (一一) 牙撥は象牙のばち。勾動はばちを  
 動かすを云ふ。  
 (一二) 命筆筆絶は文章を作ることの奇警  
 にして大に人にすぐるをいふ。  
 (一三) 噴道無家は、郷里を離ること遙  
 遠にして家室無きなり。無家とは妻  
 無きをいふ。  
 (一四) 代籌とは、生に代りて家室有らん  
 ことを謀るをいふ。  
 (一五) 少所見多所怪とは、半子に引きたる  
 古諺なり。  
 (一六) 翱翔は散歩すること。

八  
 太公來。生驚起。一叟入。鬢髮幡然。向生殷謝。曰。先生不棄頑兒。遂  
 肯賜教。小子初學塗鴉。勿以友故。行輩視之也。已乃進錦衣一襲。  
 貂帽襪履各一事。視生盥櫛已。乃呼酒薦饌。几榻裙衣。不知何名。  
 光彩射目。酒數行。叟興辭。曳杖而去。餐訖。公子呈課業。類皆古文  
 詞。並無時藝。問之。笑曰。僕不求進取也。抵暮更酌。曰。今夕盡懽。明  
 日便不許矣。呼僮曰。視太公寢未已。寢。可暗喚香奴來。僮去。先以  
 繡囊將琵琶。至少頃。一婢入。紅粧豔絕。公子命彈湘妃。婢以牙撥  
 勾動。激揚哀烈。節拍不類。夙聞。又命以巨觴行酒。三更始罷。次日。  
 早起共讀。公子最慧。過目成誦。二三月後。命筆警絶。相約五日一  
 飲。每飲必招香奴。一夕酒酣氣熱。目注之。公子已會其意。曰。此婢  
 爲老父所豢養。兄曠邈無家。我夙夜代籌久矣。行當爲君謀一佳  
 偶。生曰。如果惠好。必如香奴者。公子笑曰。君誠少所見而多所怪  
 者矣。以此爲佳。君願亦易足也。居半載。生欲翱翔郊郭。至門。則雙  
 扉外扃。問之。公子曰。家君恐交游紛意念。故謝客耳。生亦安之。時  
 盛暑溽熱。移齋園亭。生胸間腫起如桃。一夜如盤。痛楚呻吟。公子

(三二) 娜姑は嬌娜、お嬢さんといふが如  
 し。  
 (三三) 姨は母の姉妹なり。  
 (三四) 嬌波流慧は、嬌羞を帯びたる様子  
 の賢さうなるをいふ。細柳生姿は、  
 ほっそりとしてしなやかなる様をい  
 ふ。  
 (三五) 嘖呻は疾苦の聲。  
 (三六) 胞は同胞兄弟。  
 (三七) 掄は引く也。  
 (三八) 釧は臂環なり。  
 (三九) 僂傍は近くに倚りそうて居るこ  
 と。  
 (四〇) 習習は和舒なる貌、今、癢きこと  
 の甚だしからざるを形容す。  
 (四一) 無復聊賴は心安からざるを言ふ。

九  
 朝夕省視。眠食俱廢。又數日。創劇。益絶食飲。太公亦至。相對太息。  
 公子曰。兒前夜思先生清恙。嬌娜妹子能療之。遣人於外祖母處。  
 呼令歸。何久不至。俄僮入白。娜姑至。姨與松姑同來。父子疾趨入  
 內。少間。引妹來視生。年約十三四。嬌波流慧。細柳生姿。生望見顏  
 色。嘖呻頓忘。精神爲之一爽。公子便言。此兄良友。不啻胞也。妹子  
 好醫之。女乃斂羞容。掄長袖。就榻診視。把握之間。覺芳氣勝蘭。女  
 笑曰。宜有是症。心脈動矣。然症雖危。可治。但膚塊已盈。非伐皮削  
 肉不可。乃脫臂上金釧。安患處。徐徐按下之。創突起寸許。高出釧  
 外。而根際餘腫。盡束在內。不似前如盤闊矣。乃一手啓羅衿。解佩  
 刀。刃薄於紙。把釧握刀。輕輕附根而割。紫血流溢。沾染牀席。生貪  
 近嬌姿。不惟不覺其苦。且恐速竣。割事。僂傍不久。未幾。割斷腐肉。  
 團團然如樹上削下之瘻。又呼水來。爲洗割處。口吐紅丸如彈大。  
 著肉上。按令旋轉。才一週。覺熱火蒸騰。再周。習習作癢。三周已徧  
 體清涼。沁入骨髓。女收丸入咽。曰。愈矣。趨步出。生躍起。走謝。沈痼  
 若失。而懸想容輝。苦不自己。自是廢卷癡坐。無復聊賴。公子已窺



- (四二)物色は形貌を以て之を求むるを言ふ。
- (四三)曾經滄海難爲水云の二句は、唐の元稹が其亡妻を追懐する詩句なり。ここにては、嬌娜の如き美人を見れば、他人は美人とするに足らずとの意。
- (四四)畫黛彎娥。黛を以て畫きたる眉の細くして長く曲りて美しきをいふ。
- (四五)蓮鈎蹴鳳。細小なる足に、鳳頭の靴を履きて歩行する様の美しきをいふ。
- (四六)作伐は媒妁を爲すこと。
- (四七)翼日は翌日と同じ。
- (四八)除は掃除する也。
- (四九)鼓吹闐咽。鼓を打ち笛を吹くなどの音楽の賑かなるをいふ。
- (五〇)廣寒宮殿。月世界の中に在りといふ宮殿。
- (五一)合昏は婚を成すの禮なり。昏は半瓢なり。瓢を分ちて兩瓢と爲す、之を昏と曰ふ。婿と婦と各其一を執りて飲む、故に合昏と曰ふ。
- (五二)離緒縈懷。離別を悲むの情、胸中に結ばるる也。
- (五三)出非望は望外の幸なりとて大に悦ぶなり。
- (五四)延安司李。延安は府の名。司李は司理と同じ。刑獄を治むる官。

之曰。弟爲兄物色。得一佳偶。問何人。曰。亦弟眷屬。生凝思良久。但云勿須。面壁吟曰。曾經滄海難爲水。除却巫山不是雲。公子會其指曰。家君仰慕鴻才。常欲附爲婚姻。但止一少妹。齒太穉。有姨女阿松。年十七矣。頗不粗陋。如不見信。松姊日涉園亭。伺前廂。可望見之。生如其教。果見嬌娜偕麗人來。畫黛彎娥。蓮鈎蹴鳳。與嬌娜相伯仲也。生大悅。請公子作伐。翼日。公子自內出。賀曰。諧矣。乃除別院爲生成禮。是夕。鼓吹闐咽。塵落漫飛。似望中仙人。忽同衾幄。遂疑廣寒宮殿。未必在雲霄矣。合昏之後。甚愜心懷。一夕。公子謂生曰。切磋之惠。無日可以忘之。近單公子訟解歸。索宅甚急。意將棄此而西。勢難復聚。因而離緒縈懷。生願從之而去。公子勸還鄉里。生難之。公子曰。勿慮。可即送君行。無何太公引松娘至。以黃金百兩贈生。公子以左右手與夫婦相把握。囑閉眸勿視。飄然履空。但覺耳際風鳴。久之曰。至矣。啓目。果見故里。始知公子非人。喜叩家門。母出。非望。又睹美婦。方共忻慰。及回顧。公子逝矣。松娘事姑孝。豔色賢名聲聞遐邇。後生舉進士。授延安司李。攜家之任。母以

- (五五)直指は直指使者。朝廷より差遣せられ地方を巡察する官。
- (五六)金盃浮釘。金色の盃の形を爲したる浮き紙。
- (五七)亂音種。狐なるに人間の子を生みたるをいふ。生が此時未だ此言の意を解せざるは言を待たず。
- (五八)妹夫は即ち嬌娜の夫なり。
- (五九)信宿は二晩宿るなり。一宿を宿と曰ひ、再宿を信と曰ふ。
- (六〇)銳自任。奮つて自ら任ずるなり。
- (六一)閉闕は門なり。
- (六二)擺簸は振動するなり。
- (六三)繁煙黑絮は黒き絮の如き濃厚なる煙をいふ。
- (六四)瞥睹は瞥見と同じ。ちらりと見るなり。
- (六五)山崩雷暴烈。雷暴烈にして、山岳の崩るるが如し。

道遠不行。松娘舉一男。名小宦。生以忤直指罷官。罣礙不得歸。偶獵郊外。逢一美少年跨驪駒。頻頻瞻顧。細視則皇甫公子也。攬轡停驂。悲喜交至。邀生去。至一村。樹木濃昏。陰翳天日。入其家。則金盃浮釘。宛然世族。問妹子則嫁。岳母已亡。深相感悼。經宿別去。偕妻同返。嬌娜亦至。抱生子。掇提而弄曰。姊姊亂吾種矣。生拜謝。曩德笑曰。姊夫貴矣。創口已合。未忘痛耶。妹夫吳郎亦來拜謁。信宿乃去。一日。公子有憂色。謂生曰。天降凶殃。能相救否。生不知何事。但銳自任。公子趨出。招一家人俱入。羅拜堂上。生大駭。亟問。公子曰。余非人類。狐也。今有雷霆之劫。君肯以身赴難。一門可望生全。不然。請抱子而行。無相累。生矢其生死。乃使仗劍於門。囑曰。雷霆轟擊。勿動也。生如所教。果見陰雲晝暝。昏墨如馨。回視舊居。無復閉闕。惟見高冢歸然。巨穴無底。方錯愕間。霹靂一聲。擺簸山岳。急雨狂風。老樹爲拔。生目眩耳聾。屹不少動。忽於繁煙黑絮之中。見一鬼物。利喙長爪。自穴攫一人出。隨煙直上。瞥睹衣履。念似嬌娜。乃急躍離地。以劍擊之。隨手墮落。忽而山崩雷暴烈。生仆。遂斃。少



(六六)呵は息を吹きかける也。

(六七)眷口は一家族の人人。

(六八)氣促は息切れがすること。

(六九)研詰は其故を究問する也。

(七〇)勾當は事を處理すること。

(七一)趣裝。趣は促と通ず。急ぎて旅行の用意をすること。

(七二)閑園は閑靜なる庭園。

(七三)韶秀は美にして人に秀づるなり。韶は美なり。

間晴霽。嬌娜已能自蘇。見生死於傍。大哭曰。孔郎爲我而死。我何生焉。松娘亦出。共昇生歸。嬌娜使松娘捧其首。兄以簪撥其齒。自乃撮其頤。以舌度紅丸入。又接吻而呵之。紅丸隨氣入喉。格格作響。移時醒然而蘇。見眷口滿前。恍如夢寤。於是一門團欒。驚定而喜。生以幽壙不可久居。議同旋里。滿堂交贊。惟嬌娜不樂。生請與吳郎俱。又慮翁媪不肯離幼子。終日議不果。忽吳家一小奴。汗流氣促而至。驚致研詰。則吳郎家亦同日遭劫。一門俱沒。嬌娜頓足悲傷。涕不可止。共慰勸之。而同歸之計遂決。生入城。勾當數日。遂連夜趣裝。既歸。以閒園寓公子。恆反關之。生及松娘至。始發局。生與公子兄妹。棋酒談讌。若一家然。小宦長成。貌韶秀。有狐意。出遊都市。共知爲狐兒也。

成

仙

(一)文登は山東省膠東道の縣の名。

(二)共筆研は學友なるをいふ。研は硯と通ず。

(三)杵臼交は親密なる交際をいふ。後漢書に、「公沙穆來りて太學に遊ぶ。資糧無し。乃ち服を變じて客傭し、吳祐の爲めに賃春す。祐與に語り、大に驚き、遂に共に交を杵臼の間に訂す」とあるに本づく。

(四)内寢は居間。

(五)通白は取次ぐこと。

(六)黃吏部。黃は姓、吏部は官名。

(七)牛蹊周田。牛を牽きて周の田の中を通過せしなり。

(八)牧豬奴。豚を畜ふ奴僕。罵る辭。

(九)氣填吭臆。怒氣、喉に塞がり胸に滿つ。腹が立つてたまらぬこと。

(一〇)強梁世界原無皂白。強い者勝ちの世の中にして、もとより黒い白いの差別は無しとの意。

(一一)強寇は強盜。

(一二)矛ははこ。弧は弓。

(一三)轉側は輾轉反側するなり。眠ること能はずして、頻りに寢反りすること。

(一四)欺は侮蔑するなり。

文登周生。與成生少共筆研。遂訂爲杵臼交。而成貧。故終歲常依周。以齒則周爲長。呼周妻以嫂。節序登堂。如一家焉。周妻生子。產後暴卒。繼聘王氏。成以少故。未嘗請見之也。一日王氏弟省姊。宴於內寢。成適至。家人通白。周命邀之。成不入。辭去。周移席外舍。追之而還。甫坐。卽有人白別業之僕。爲邑宰重笞者。先是黃吏部家牧傭。牛蹊周田。以是相詬。牧庸奔告主。捉僕送官。遂被笞責。周詰得其故。大怒曰。黃家牧豬奴。何敢爾。其先世爲大父服役。促得志。乃無人耶。氣填吭臆。忿而起。欲往尋黃。成捺而止之曰。強梁世界。原無皂白。況今日官宰。半強寇。有不操矛弧者耶。周不聽。成諫止再三。至泣下。周乃止。怒終不釋。轉側達旦。謂家人曰。黃家欺我。我仇也。姑置之。邑令爲朝廷官。非勢家官。縱有互爭。亦須兩造。何至如狗之隨嗾者。我亦呈治其傭。視彼將何處分。家人悉懲息之。計



- (一) 勢家は權勢ある家。
- (二) 兩造は原告被告皆至るなり。
- (三) 喉は犬をけしかけること。
- (四) 呈治は告訴すること。
- (五) 懲息は勸むること。
- (六) 連繫は逮捕縛するなり。
- (七) 控は捏造するなり。
- (八) 詞申は申立ての言。
- (九) 榜掠は拷問する也。掠は音リヤリ。
- (一〇) 叩關は人民無實の罪あるとき、關に詣りて自ら懇ふる也。直訴。
- (一一) 重狂は牢獄なり。
- (一二) 弱弟は年少き弟。
- (一三) 囚飯は獄中に差入れする食物。
- (一四) 無門入控は宮中に入りて控訴すべき手がかり無きを云ふ。
- (一五) 木市は材木市場。
- (一六) 得准は御取上げになることを得しとの意。
- (一七) 誣服論辟は無實の罪に服して刑を論告せらるる也。
- (一八) 御批は天子の御指圖。批は示すなり。是非を判決して以て之に示すを謂ふ。
- (一九) 復提躬讞。再び其事を自ら取調べることせりとの意。
- (二〇) 聲屈は無實の罪なることを言明すること。
- (二一) 院臺は部院の長官。
- (二二) 杖斃は打ち殺す也。
- (二三) 營脫は方法を設けて罪を免るるをいふ。
- (二四) 朦朧題免は、事分明ならず、よい加減な事にて、事済みなること。
- (二五) 擬流は流刑に處せらるる也。
- (二六) 肝膽は深く親しむ也。
- (二七) 寺觀は佛寺と道觀。

遂決具狀赴宰。宰裂而擲之。周怒。語侵宰。宰慚恚。因逮繫之。辰後。成往訪周。始知入城訟理。急奔勸止。則已在囹圄矣。頓足無所爲計。時獲海寇三名。宰與黃路囑之。使控周同黨。據詞申黜頂衣。榜掠酷慘。成入獄。相顧悽酸。謀叩關。周曰。身繫重狂。如鳥在籠。雖有弱弟。止足供囚飯耳。成銳身自任。曰。是予責也。難而不急。烏用友也。乃行。周弟驢之。則去已久矣。至都無門入控。相傳駕將出獵。成預隱木市中。俄駕過。伏舞哀號。遂得准。驛送而下。著部院審奏。時閱十月餘。周已誣服。論辟。院接御批。大駭。復提躬讞。黃亦駭。謀殺周。因賂監者。絕其食飲。弟來餽問。苦禁拒之。成又爲赴院聲屈。始蒙提問。業已飢餓不起。院臺怒。杖斃監者。黃大怖。納數千金。囑爲營脫。以是得朦朧題免。宰以枉法擬流。周放歸。益肝膽成。成自經。訟繫。世情盡灰。招周偕隱。周溺少婦。輒迂笑之。成雖不言。而意甚決。別後。數日不至。周使探諸其家。家人疑其在周所。兩無所見。始疑。周心知其異。遣人蹤跡之。寺觀壑谷。物色殊徧。時以金帛郵其子。又八九年。成忽自至。黃巾斃服。岸然道貌。周大喜。把臂曰。君何

- (四三) 黃巾斃服。道士の服裝なり。唐の李播、道士と爲り、黃冠子と號す。王恭は鶴斃を著る。羽を析きて爲りたる蓑衣を斃と曰ふ。
- (四四) 岸然は氣高き貌。
- (四五) 上清宮は山東省膠東道即墨縣勞山の明霞洞の下に在り、宋建つ、即ち雲崑子の修真の處なり。下清宮は天門峯の北海濱に在り。
- (四六) 抵足寢は並んで寢ること。
- (四七) 火之は火を點じて見ること。
- (四八) 招隱は招きて隱遁せしむる也。
- (四九) 羽客は仙人又は道士をいふ。廬山記に、唐の保太中、道士譚紫霄、號を金門羽客と賜はる。
- (五〇) 同社生は同窓の友といふが如し。
- (五一) 今尙游戲人間耶。世説補に、蘇長公、惠州に在り。天下、其の己に死せるを傳ふ。後七年にして、北に歸り、南昌の太守葉祖洽を見る。問うて曰く、世傳ふ、端明已に道山に歸せりと。今尙人間に遊戲するやと。
- (五二) 無蹤兆。跡かたも無きこと。
- (五三) 難以自主。如何してよきや分らぬこと。

往。使我尋欲徧笑。曰。孤雲野鶴。棲無定所。別後幸復頑健。周命置酒。略道間闊。欲爲變易道裝。成笑不語。周曰。愚哉。何棄妻孥猶敵。屣也。成笑曰。不然。人將棄予。其何人之能棄。問所棲止。答在勞山之上清宮。既而抵足寢。夢成裸伏胸上。氣不能息。訝問。何爲。殊不答。忽驚而寤。呼成不應。坐而索之。杳然不知所往。定移時。始覺在成榻。駭曰。昨不醉。何顛倒至此耶。乃呼家人。家人火之儼然成也。周故多髯。以手自捋。則疎無幾莖。取鏡自照。訝曰。成生在此。我何往也。已而大寤。知成以幻術招隱。意欲歸內。弟以其貌異。禁不聽前。周亦無以自明。卽命僕馬往尋成。數日入勞山。馬行疾。僕不能及。休止樹下。見羽客往來甚衆。內一道人目周。周因以成問道。士笑曰。耳其名矣。似在上清。言已逕去。周目送之。見一矢之外。又與一人語。亦不數言而去。與言者漸至。乃同社生。見周愕曰。數年不晤。人以君學道名山。今尙游戲人間耶。周述其異。生驚曰。我適遇之。而以爲君也。去無幾時。或當不遠。周大異曰。怪哉。何自己面目而不之識。僕尋至。急馳之。竟無蹤兆。一望寥闊。進退難以自主。



(五四) 逡巡はうねりくりりて行く貌。

(五五) 星飯は夜の未だ明けきらぬうちに飯を食ふこと。

(五六) 遠行は遠く行く也。

(五七) 流連は長く滞在すること。

(五八) 于思は鬚多き貌。

(五九) 踽踽は獨り行く貌。

(六〇) 内人は妻を謂ふ。

(六一) 嘖嘖は多言して聲細きなり。ひそひそ話をすること。

(六二) 張皇は、あわつる也。

(六三) 劃然はがらりと門の開く貌。

自念無家可歸。遂決意窮追。而怪險不復可騎。遂以馬付僕歸。逡巡自往。遙見一僮獨坐。趨近問程。且告以故。僮自言爲成弟子。代荷衣糧。導與俱行。星飯露宿。進行殊遠。三日始至。又非世之所謂上清。時十月中。山花滿路。不類初冬。僮入報客。成即遽出。始認己形。執手入。置酒讌語。見異彩之禽。馴人不驚。聲如笙簧。時坐鳴於座上。心甚異之。然塵俗念切。無意流連。地下有蒲團二。曳與並坐。至二更後。萬慮俱寂。忽似瞥然一眈。身覺與成易位。疑之。自將領下。則于思者如故矣。既曙。浩然思返。成固留之。越三日。乃曰。乞少寐息。早送君行。甫交睫。聞成呼曰。行裝已具矣。遂起從之。所行殊非舊途。覺無幾時。里居在望中。成坐候路側。俾自歸。周強之不得。因踽踽至家門。叩不能應。思欲越牆。覺身飄似葉。一躍已過。凡踰數重垣。始抵臥室。燈燭熒然。內人未寢。嘖嘖與人語。舐窗以窺。則妻與一厮僕同杯飲。狀甚狎褻。於是怒火如焚。計將掩執。又恐孤力難勝。遂潛身脫扇而出。奔告成。乞爲助。成慨然從。直抵內寢。周舉石搗門。內張皇甚。搗愈急。門閉益堅。成撥以劍。劃然頓闢。周奔

(六四) 拷訊は拷問する也。

(六五) 習は掛くる也。

(六六) 怪夢參差。參差は齊はざるなり。つじつまの合はぬ奇怪な夢を見たとの意。

(六七) 譁張は欺説する也。譁張爲幻は書經無逸篇の語。

(六八) 荏苒は日數を重ねての意。

(六九) 勿究。深く其事を吟味すること無かれとの意。

(七〇) 襁褓物は幼少の子をいふ。

(七一) 宗緒は先祖以來の系統。

(七二) 延師は師を招きて教を受くる也。

入。僕衝戸而走。成在門外。以劍擊之。斷其肩臂。周執妻拷訊。乃知被收時。即與僕私。周借劍決其首。寘腸庭樹間。乃從成出。尋途而返。驀然忽醒。則身在臥榻。驚而言曰。怪夢參差。使人駭懼。成笑曰。夢者兄以爲真。真者乃以爲夢。周愕而問之。成出劍示之。澱血猶存。周驚懼欲絕。竊疑成譁張爲幻。成知其意。乃促裝送之。歸荏苒至里門。乃曰。疇昔之夜。倚劍而相待者。非此處耶。吾厭見惡濁。請還待君於此。如過晡不來。予自去。周至家。門戶蕭索。似無居人。還入弟家。弟見兄。雙淚遽墮。曰。兄去後。盜夜殺嫂。刳腸去。酷慘可悼。於今官捕未獲。周亦夢醒。因以情告。戒勿究。弟錯愕良久。周問其子。乃命老媪抱至。周曰。此襁褓物。宗緒所關。弟好視之。兄欲辭人世矣。遂起。徑去。弟涕泗追挽。笑行不顧。至野外。見成與俱行。遙回頭曰。忍事最樂。弟欲有言。成闊袖一舉。即不可見。悵立移時。痛哭而返。周弟樸拙。不善治家人生產。居數年。家益貧。周子漸長。不能延師。因自教讀。一日。早至齋。見案頭有函書。緘封甚固。簽題仲氏啓。審之爲兄迹。開視則虛無所有。祇有爪甲一枚。長二指許。心怪



之。以甲置硯上。出問家人所自來。並無知者。回視。則硯石粲粲。化爲黃金。大驚。以試銅鐵。皆然。由此大富。以千金賜成氏子。因相傳兩家有點金術云。

王

成

- (一) 平原は縣の名。
- (二) 生涯日落。日に日に貧困になること。
- (三) 牛衣は亂麻を編みて之を爲る。前漢の王章傳に「章、諸生たるとき、疾病し、被無く、牛衣の中に臥し、妻と對して泣く。京兆と爲るに及びて封事を上らんと欲す。妻之を止めて曰く、君、牛衣の中に泣涕せし時を憶はずや」とあるに本づく。
- (四) 交謫。家人のぶつ／＼言ふ小言をいふ。詩經邶風に「室人交々、偏く我を謫む」とあるに本づく。
- (五) 紅日三竿。日升りて既に高きなり。
- (六) 一股は一本なり。
- (七) 儀賓。明の制、皇姑を大長公主と曰ひ、皇の姉妹を長公主と曰ひ、皇女を公主と曰ひ、親王の女を郡主と曰ひ、諸郡王の女を縣主と曰ひ、郡王の孫女を郡君と曰ひ、郡王の曾孫女を縣君と曰ふ。公主の壻を駙馬都尉と曰ひ、其他の壻は皆儀賓と曰ふ。
- (八) 衡府。明史に衡の恭王祐揮は、憲宗の第六子。成化十三年、封せられ、宏治十三年、藩青州に之き、國を建てて衡と曰ふ。
- (九) 款式は、しるし。器物の上に刻する所の文字をいふ。

王成。平原故家子。性最懶。生涯日落。惟剝破屋數間。與妻臥牛衣中。交謫不堪。時盛夏燠熱。村中故有周氏園。牆宇盡傾。惟存一亭。村人多寄宿其中。王亦在焉。既曉。睡者盡去。紅日三竿。王始起。逡巡欲歸。見草際金釵一股。拾視之。鐫有細字云。儀賓府造。王祖爲衡府儀賓。家中故物。多此款式。因把釵躊躇。歎一嫗來尋釵。王雖故貧。然性介。遽出授之。嫗喜極贊盛德。曰。釵值幾何。先夫之遺澤也。問夫君伊誰。答云。故儀賓王東之也。王驚曰。吾祖也。何以相遇。嫗亦驚曰。汝卽王東之之孫耶。我乃狐仙。百年前。與君祖繼絳。君祖歿。老身遂隱。過此遺釵。適入子手。非天數耶。王亦曾聞祖有狐妻。信其言。便邀臨顧。嫗從之。王呼妻出見。敝衣蓬首。菜色黯焉。嫗歎曰。嘻。王東之孫子。乃一貧至此哉。又顧敗竈無煙。曰。家計若此。何以聊生。妻因細述貧狀。嗚咽飲泣。嫗以釵授婦。使姑質錢市米。



- (二〇)介は節義有るなり。
- (二一)釵值幾何云云。釵の價は大して高の賜物なるが故に大切に思ふなりとの意。
- (二二)何以相遇。此處で御目に懸つたのは實に不思議ですれとの意。
- (二三)縫紉は固く相著くの意。情緒纏綿たるをいふ。
- (二四)天數は天命。
- (二五)蓬首は頭髮の亂れたるをいふ。詩經衛風に「首は飛蓬の如し」とあるに本づく。
- (二六)菜色黧焉は糧食缺乏し營養不其の爲めに顔色青ざめて薄黒みを帯びたるなり。
- (二七)仰屋。一籌も展ぶる莫きに喩ふ。じつとして何も爲すして居ること。宋史富弼の手疏に「屋を仰ぎて竊に歎す」と云とあるに本づく。
- (二八)拳拳は懇切なり。
- (二九)小生業は小さな商賣。
- (三〇)花粉の金は化粧料。
- (三一)微息は少しばかりの利益。
- (三二)燕都は今の北京。
- (三三)就路は出發する也。
- (三四)委頓は挫傷折壞するを謂ふ。へこたれること。
- (三五)淙淙は、ざめ／＼と雨の降る音。
- (三六)淙は、ぬかるみ。
- (三七)翔貴は騰貴する也。
- (三八)越日は明日なり。

三日後、請復相見。王挽留之。嫗曰：汝一妻不能自存活。我在仰屋而居。復何裨益。遂徑去。王爲妻言其故。妻大怖。王誦其義。使姑事之。妻諾。踰三日。果至。出數金。糶粟麥各一石。夜與婦共短榻。婦初懼之。然察其意。殊拳拳。遂不之疑。翌日。謂王曰：孫勿惰。宜操小生業。坐食烏可長也。王告以無貲。曰：汝祖在時。金帛憑所取。我以世外人。無需是物。故未嘗多取。積花粉之金四十兩。至今猶存。久貯亦無所用。可將去。悉以市葛。刻日赴都。可得微息。王從之。購五十餘端。以歸。嫗命趣裝。計六七日。可達燕都。囑曰：宜勤勿懶。宜急勿緩。遲之一日。悔之已晚。王敬諾。囊貨就路。中途遇雨。衣履浸濡。王生平未歷風霜。委頓不堪。因暫休旅舍。不意淙淙徹暮。簷雨如繩。過宿。溽益甚。見往來行人。踐淖沒脛。心畏苦之。待至亭午。始漸燥。而陰雲復合。雨又大作。信宿乃行。將近京。傳聞葛價翔貴。心竊喜。入都。解裝客店。主人深惜其晚。先是南道初通。葛至絕少。京中巨室。購者頗多。價甚昂。較常可三倍。前一日。貨葛雲集。價頓貶。後來者皆失望。主人以故告王。王鬱鬱不得志。越日。葛至愈多。價益下。

- (二九)食耗は旅店の滞在費用。
- (三〇)賤鬻は、やすく賣る也。他圖は他の工夫を爲す也。
- (三一)虧貲は損失なり。悉脱去は残らず賣つてしまふ也。
- (三二)鳴官は官に訴ふる也。
- (三三)數は運命。
- (三四)蹠蹠内外。じつとして居ること出來ず、内外をあても無く歩きまはること。心中惱悶すること甚だしきなり。
- (三五)質其速售。其の速に賣れんことを祈るなり。
- (三六)淋零は雨の降ること。
- (三七)英物は、すぐれ物。
- (三八)謀生は生計を立つること。

王以無利不肯售。遲十餘日。計食耗繁多。倍益憂悶。主人勸令賤鬻。改而他圖。從之。虧貲十餘兩。悉脱去。早起將作歸計。啓視囊中。則金亡矣。驚告主人。主人無所爲計。或勸鳴官。責主人償。王歎曰：此我數也。於主人何尤。主人聞而德之。贈金五兩。慰之。使歸。自念無以見祖母。蹠蹠内外。進退維谷。適見鬪鶉者。一賭輒數千。每市一鶉。恆百錢。不止。意忽動。計囊中貲。僅僅足販鶉。以商主人。主人亟懲懇之。且約假寓。飲食不取其直。王喜。遂行。購鶉盈擔。復入都。主人喜。賀其速售。至夜。大雨徹曙。天明。衢水如河。淋零猶未休也。居以待晴。連綿數日。更無休止。起視籠中。鶉漸死。王大懼。不知計之所出。越日。死愈多。僅餘數頭。併一籠飼之。經宿往窺。則一鶉僅存。因告主人。不覺涕墮。主人亦爲扼腕。王自度。金盡罔歸。但欲覓死。主人勸慰之。共往視鶉。審諦之曰：此似英物。諸鶉之死。未必非此之鬪殺之也。君暇亦無所事。請把之。如其良也。賭亦可以謀生。王如其教。既馴。主人令持向街頭。賭酒肉食。鶉健甚。輒贏。主人喜。以金授王。王使復與子弟決賭。三戰三勝。半年許。積二十金。心益



(三九)上元は正月十五日。

(四〇)脱敗云云。若し負けたとしても意氣沮喪して歸るばかりのことだとの意。

(四一)肩摩は肩と肩と摩り合ふほど人多く集まるをいふ。

(四二)略一騰蹕云云。ちよつと一度蹴合ふと、客の鶉は負けてしまつたので、王は御機嫌斜ならず大に笑つたとの意。大に笑ふは御機嫌の態なり。

(四三)健羽は強き鳥。

(四四)鐵喙は喙の黒くして強きを以て此名あり。

(四五)鐵羽は羽を残ふ也。

(四六)頰頰は鳥飛んで上下する也。飛んで上る者を頰と曰ひ、飛んで下る者を頰と曰ふ。

(四七)貨は賣買する也。

(四八)而は爾なり。汝なり。

(四九)中人産とは百金をいふ。漢書文帝紀に「帝嘗て露垂を作らんと欲し、匠を召して之を計らしむ。曰く、百金と。上曰く、百金は中人の産なり。何ぞ産を以て爲さんと。」とあるに本づく。

(五〇)連城之壁。趙、和氏の壁を得たり。泰の昭王、十五城を以て之に易へんと請ふ。故に又、連城の壁と名づく。(五一)予不相虧。吾は汝に損をさせぬとの意。

(五二)戾は罪なり。

(五三)秤は金の重さを量る也。

(五四)斬は吝むなり。賣ることを惜むをいふ。

(五五)盤計は計算する也。

(五六)居然は立派なるさま。

慰視鶉如命。先是有某王者好鶉。每值上元<sup>(三九)</sup>。輒放民間把鶉者。入邸相角。主人謂王曰。今大富宜可立致。所不可知者。在子之命矣。因告以故。導與俱往。囑曰。脱敗<sup>(四〇)</sup>。則喪氣出耳。倘有萬分一。鶉鬪勝。王必欲市之。君勿應。如固強之。惟予首是瞻。待首肯。而後應之。王曰。諾。至邸。則鶉人肩摩<sup>(四一)</sup>於墀下。頃之。王出御殿。左右宣言。有願鬪者上。即有一人把鶉趨而進。王命放鶉。客亦放。略一騰蹕<sup>(四二)</sup>。客鶉已敗。王大笑。俄頃。登而敗者數人。主人曰。可矣。相將俱登。王相之曰。晴有怒脈。此健羽也。不可輕敵。命取鐵喙者當之。一再騰躍。而王鶉<sup>(四三)</sup>鐵羽更選其良。再易再敗。王急命取宮中玉鶉。片時把出。素羽如鷲。神駿不凡。王成意餒。跪而求罷。曰。大王之鶉。神物也。恐傷吾禽。喪吾業矣。王笑曰。縱之。脱鬪而死。當厚爾償。成乃縱之。王鶉直奔之。而玉鶉方來。則伏如怒雞。以待之。玉鶉健喙。則起如翔鶴。以擊之。進退頰頰<sup>(四六)</sup>。相持約一伏時。玉鶉漸懈。而其怒益烈。其鬪益急。未幾。雪毛摧落。垂翅而逃。觀者千人。罔不歎羨。王乃索取。而親把之。自隊至爪。審周一過。問成曰。鶉可貨否。答云。小人無恆產。與相

依爲命。不願售也。王曰。賜而重直<sup>(四九)</sup>。中人產可致。頗願之乎。成俯思良久。曰。本不樂置。顧大王既愛好之。苟使小人得衣食業。又何求。王請直。答以千金。王笑曰。癡男子。此何珍寶。而千金直也。成曰。大王不以爲寶。臣以爲連城之壁<sup>(五〇)</sup>。不過也。王曰。如何。曰。小人把向市廛。日得數金。易升斗粟。一家十餘食指。無凍餒憂。是何寶如之。王言予不相虧<sup>(五一)</sup>。便與二百金。成搖首。又增百數。成目視主人。主人色不動。乃曰。承大王命。請減百價。王曰。休矣。誰肯以九百易一鶉者。成囊鶉欲行。王呼曰。鶉人來。鶉人來。實給六百。肯則售。否則已耳。成又目主人。主人仍自若。成心願盈溢。惟恐失時。曰。以此數售。心實快快。但交而不成。則獲戾滋大。無已。即如王命。王喜。即秤付之。成囊金。拜賜而出。主人歎曰。我言如何。子乃急自鬻也。再少斬之。八百金在掌中矣。成歸。擲金案上。請主人自取之。主人不受。又固讓之。乃盤計飯直而受之。王治裝歸。至家。歷述所爲。出金相慶。媼命治良田三百畝。起屋作器。居然世家。媼早起。使成督耕。婦督織。稍惰輒訶之。夫婦相安。不敢有怨詞。過三年。家益富。媼辭欲去。夫



(五七)挽は引き留むる也。

妻共挽<sup>(五七)</sup>之至泣下。嫗亦遂止。旭日候之已杳矣。

✓陸

判

- (一) 陵陽は縣の名。
- (二) 文社は同學の連中をいふ。
- (三) 醜は醜金なり。錢を出し合はすと。
- (四) 毛皆森豎。身の毛がよだつこと。
- (五) 雖朱。朱爾旦を困らせんと欲するなり。
- (六) 髻宗師は髻先生といふが如し。
- (七) 瑟縮は恐れて身體がすくむこと。
- (八) 狂率不文は、ぞんざいにして、がさつなること。
- (九) 諒不爲怪は、どうぞ御許し下さいとの意。
- (一〇) 荒舎は自分の家をいふ。
- (一一) 幸勿爲眵眊。どうぞ御遠慮下さるなどの意。
- (一二) 興未闌は未だ物足らぬなり。
- (一三) 冒瀆は神聖をけがすこと。
- (一四) 訂は訂交なり。人と交を定むるを訂交と曰ふ。
- (一五) 天道溫和。天氣が溫暖なること。

陵陽朱爾旦。字小明。性豪放。然素鈍。學雖篤。尙未知名。一日文社衆飲。或戲之云。君有豪名。能深夜赴十王殿。負得左廊判官來。衆當醜<sup>(三)</sup>作筵。蓋陵陽有十王殿。神鬼皆以木雕。妝飾如生。東廡有立判。綠面赤鬚貌尤瘳惡。或夜聞兩廊拷訊聲。入者毛皆森豎。故衆以此難朱。朱笑起。徑去。居無何。門外大呼曰。我請髻宗師至矣。衆皆起。俄負判入。置几上。奉觴酬之三。衆睹之。瑟縮不安於坐。仍請負去。朱又把酒灌地。祝曰。門生狂率不文。大宗師諒不爲怪。荒舎<sup>(一〇)</sup>匪遙。合乘興來覓飲。幸勿爲眵眊。乃負之去。次日。衆果招飲。抵暮半醉而歸。興未闌。挑燭獨飲。忽有人褰簾入。視之。則判官也。朱起曰。噫。吾殆將死矣。前日冒瀆。今來加斧鑕耶。判啓濃髻。微笑曰。非也。昨蒙高義相訂。夜偶暇。敬踐達人之約。朱大悅。牽衣促坐。自起滌器。爇火。判曰。天道溫和。可以冷飲。朱如命。置瓶案上。奔告家人。



- (一六) 肴果は酒のさかな。
- (一七) 治具は酒食の用意を爲す也。
- (一八) 易琰交酬は盃のやりとりをするこゝと。
- (一九) 制藝は經義の別稱、即ち進士の試験に經文を以て題と爲し、其義を演繹して作らしむる文章をいふ。
- (二〇) 妍媸は文章の善惡をいふ。
- (二一) 冥司は冥途の官署。
- (二二) 陽世は現世。
- (二三) 玉山傾頽は酔ひ倒れること。世説に、「山濤言はく、番叔夜の人と爲りは、麤麤として、孤松の獨り立つが若く、其の醉ふや、玉山の將に傾れんとするが若し」とあるに本づきたるなり。
- (二四) 黄昏は、ほの暗きこと。
- (二五) 窗稿は窗下にて作りたる草稿の意文章の草稿をいふ。
- (二六) 紅粉は不佳として朱筆を以て横に抹するなり。
- (二七) 危坐は正坐するなり。
- (二八) 裏足布は足をつむむ布。
- (二九) 麻木は、しびれること。
- (三〇) 毛竅は毛穴。毛竅塞には、腰の紉王が比干を殺し、聖人の心には七竅あり云云」と曰へるに本づきたる故事あるべきも、未だ詳ならず。
- (三一) 冥間は冥途。
- (三二) 有縫云云。縫すちの如き赤き痕の残れるのみなるをいふ。
- (三三) 試郷科は郷試なり。各省にて行ふ試験。

治肴果、妻聞大駭、戒勿出。朱不聽。立俟治具以出。易琰交酬。始詢姓氏。曰。我陸姓。無名字。與談古典。應答如響。問知制藝否。曰。妍媸亦頗辨之。冥司誦讀。與陽世畧同。陸豪飲。一舉十觥。朱因竟日飲。遂不覺。玉山傾頽。仗几醺睡。比醒。則殘燭黃昏。鬼客已去。自是兩三日輒一來。情益洽。時抵足眠。朱獻窗稿。陸輒紅粉之。都言不佳。一夜。朱輒醉先寢。陸猶自酌。忽醉夢中。覺臍微痛。醒而視之。則陸危坐牀前。破腔出腸胃。條條整理。愕曰。夙無仇怨。何以見殺。陸笑云。勿懼。我爲君易慧心耳。從容納腸已。復合之。末以裏足布束朱腰。作用畢。視榻上亦無血跡。腹間覺少麻木。見陸置肉塊几上。問之。曰。此君心也。作文不快。知君之毛竅塞耳。適在冥間。於千萬心中。揀得佳者一枚。爲君易之。留此以補闕數。乃起掩扉去。天明解視。則創縫已合。有縫而赤者存焉。自是文思大進。過眼不忘。數日。又出文示陸。陸曰。可矣。但君福薄。不能大顯貴。鄉科而已。問何時。曰。今歲必魁。未幾科試冠軍。秋闈果中。經元。同社友素擲揄之。及見闈墨。相視而驚。細詢始知其異。共求朱先容。願納交。陸諾之。

- (三四) 魁。鄉試優等の及第者たるをいふ。
- (三五) 冠軍は試験に第一位なるをいふ。
- (三六) 秋闈は秋の試験。
- (三七) 經元は解元を謂ふなるべし。解元は郷試の成績第一位なる者をいふ。
- (三八) 擲揄は手を擧げて相弄する也。かちかひ笑ふこと。
- (三九) 闈墨は試験の成績をいふ。
- (四〇) 先容は紹介をいふ。
- (四一) 大設は大に酒席を設くる也。
- (四二) 更初は即ち初更、午後八時頃。
- (四三) 齒欲相擊。大に懼れて、齒の根が合はぬこと。
- (四四) 瀟腸伐胃は前に朱が陸に心臓を易へらしむをいふ。
- (四五) 山荆は己の妻をいふ。結髮人とは少年の時より夫婦たるをいふ。
- (四六) 勿驚禽犬。極靜にしてくれよとの意。
- (四七) 頭は美人の首をいふ。
- (四八) 移枕塞肩際。枕を肩のところに着るること。
- (四九) 甲錯はこはばること。
- (五〇) 搓は手相摩する也。こすること。
- (五一) 驚絶は甚だしく驚くこと。
- (五二) 錯愕は大に愕く也。
- (五三) 吳侍御。吳は姓、侍御は官名。

衆大設以待之。更初陸至。赤髻生動。目炯炯如電。衆茫乎無色。齒欲相擊。漸引去。朱乃攜陸歸飲。既醺。朱曰。瀟腸伐胃。受賜已多。尙有一事欲相煩。不知可否。陸便請命。朱曰。心腸可易。面目想亦可更。山荆予結髮人。下體頗亦不惡。但頭面不甚佳麗。尙欲煩君刀斧如何。陸笑曰。諾。容徐圖之。過數日。半夜來叩關。朱急起延入。燭之。見襟裏一物。詰之。曰。君曩所囑。向艱物色。適得一美人首。敬報君命。朱撥視。頸血猶溼。陸立促急入。勿驚禽犬。朱慮門戶夜扃。陸至。一手推扉。扉自開。引至臥室。見夫人側身眠。陸以頭授朱抱之。自於靴中出白刃如匕首。按夫人項。著力如切瓜狀。迎刃而解。首落枕畔。急於生懷。取美人頭合項上。詳審端正。而後按捺。已而移枕塞肩際。命朱瘞首靜所。乃去。朱妻醒。覺頸間微麻。面頰甲錯。搓之。得血片甚駭。呼婢汲盥。婢見面血狼藉。驚絕。濯之。盆水盡赤。舉首。則面目全非。又駭極。夫人引鏡自照。錯愕不能自解。朱入告之。因反覆細視。則長眉掩鬢。笑靨承顙。畫中人也。解領驗之。有紅綫一周。上下肉色。判然而異。先是吳侍御有女甚美。未嫁而喪二夫。



(五四)醜は嫁入りすること。

(五五)紛騰は、こたく／＼さわぎまはる、こ。

(五六)左道は邪道なり。

(五七)室人は妻をいふ。

(五八)伊女は彼の女。吳侍御の女をいふ。

(五九)蘇溪は地名。

(六〇)械は手かせ足かせの類。

(六一)禮闈。禮部の試。各省の舉人即ち郷試の及第者を京師に集めて舉行する試験なり。其事、禮部に掌らるるを以て斯く云ふ。

(六二)以場規被放。試験場の規則に合はざるを以て試験を受くるを得ざりしなり。

(六三)灰心仕進。仕官せんと欲する心の消滅せしをいふ。

故十九猶未醜也。上元遊十王殿時。遊人甚雜。內有無賴賊。窺而豔之。遂陰訪居里。乘夜梯入。穴寢門。殺一婢於牀下。逼女與淫。女力拒聲喊。賊怒亦殺之。吳夫人微聞鬧聲。呼婢往視。見尸駭絕。舉家盡起。停尸堂上。置首項側。一門啼號。紛騰終夜。詰旦啓衾。則身在而失其首。徧撻侍女。謂所守不恪。致葬犬腹。侍御告郡。郡嚴限捕賊。三月而罪人弗得。漸有以朱家換頭之異。聞吳公者。吳疑之。遣媼探諸其家。入見夫人。駭走以告吳公。公視女尸。故存。驚疑無以自決。猜朱以左道殺女。往詰朱。朱曰。室人夢易其首。實不解其何故。謂僕殺之。則冤也。吳不信。訟之。收家人鞠之。一如朱言。郡守不能決。朱歸。求計於陸。陸曰。不難。當使伊女自言之。吳夜夢女曰。兒爲蘇溪揚大年所殺。無與朱孝廉。彼不豔於其妻。陸判官取兒頭。與之易之。是兒身死而頭生也。願勿相仇。醒告夫人。所夢同。乃言於官。問之。果有楊大年。執而械之。遂伏其罪。吳乃詣朱請見夫人。由此爲公壻。乃以朱妻首合女尸而葬焉。朱三入禮闈。皆以場規被放。於是灰心仕進。積三十年。一夕陸告曰。君壽不永矣。問其期。

(六四)治衣衾棺槨は葬儀の用意を爲すなり。

(六五)盛服は盛裝なり。

(六六)扶柩は柩によりかかること。

(六七)冉冉は行く貌。

(六八)依依は舍つるに忍びざる貌。

(六九)營備は酒肴の用意を爲すをいふ。

(七〇)經紀は處理する也。

(七一)提抱は手を引いたり、抱いたりすること。

(七二)邑庠は邑の學校。

(七三)日月至焉而已。一月に一度とか二度とかいふやうに稀に來ること。

(七四)帝命は上帝の命。

(七五)扶之は朱によりかかるをいふ。

(七六)鸞鳳は夫婦をいふ。

(七七)行人は官名、朝覲尋問の事を掌る。

(七八)西岳は華山なり。

對以五日能相救否。曰。惟天所命。人何能私。且自達人觀之。生死一耳。何必生之爲樂。死之爲悲。朱以爲然。即治衣衾棺槨。既竟盛服而沒。翌日。夫人方扶柩哭。朱忽冉冉自外至。夫人懼。朱曰。我誠鬼。不異生時。慮爾寡母孤兒。殊戀戀耳。夫人大慟。涕垂膺。朱依依慰解之。夫人曰。古有還魂之說。君既有靈。何其不再。朱曰。天數不可違也。問在陰司作何務。曰。陸判薦我督案務。授有官爵。亦無所苦。夫人欲再語。朱曰。陸公與我同來。可設酒饌。趨而出。夫人依言營備。但聞室中笑飲。豪氣高聲。宛若生前。半夜窺之。窅然而逝。自是三數日。輒一來。時而留宿。繼繕家中事。就便經紀。子璋方五歲。來輒提抱。至七八歲。則燈下教讀。子亦慧。九歲能文。十五入邑庠。竟不知無父也。從此來漸疎。日月至焉而已。又一夕來。謂夫人曰。今與卿永訣矣。問何往。曰。承帝命爲太華卿。行將遠赴。事煩途隔。故不能來。母子扶之哭。曰。勿爾。兒已成立。家業尙可存活。豈有百歲不拆之鸞鳳耶。顧子曰。好爲人。勿墮父業。十年後。一相見耳。徑出門去。於是遂絕。後璋二十五。舉進士。官行人。奉命祭西岳。道經。



- (七九)華陰は縣の名。
- (八〇)羽葆は儀仗の中の華蓋。鳥羽を連ね綴りて以て飾と爲したるなり。
- (八一)鹵簿は儀仗をいふ。
- (八二)官聲好我目瞑矣。汝が官と爲りての評判好きを以て、我は満足すとの意。
- (八三)火馳は疾く馳する也。
- (八四)數武は數歩なり。
- (八五)膽欲大而心欲小智欲圓而行欲高。唐書に見ゆ。孫思邈が盧照鄰に對ふる語。
- (八六)總憲は都御史をいふ。

華陰<sup>(七九)</sup>忽有與從羽葆<sup>(八〇)</sup>馳衝鹵簿<sup>(八一)</sup>訝之。審視車中人。其父也。下馬哭伏道左。父停輿曰。官聲好。我目瞑矣。璋伏不起。朱促車行。火馳<sup>(八二)</sup>不顧。去數武。回望解佩刀。遣人持贈。遙語曰。佩之當貴。璋欲追從。見輿從人馬飄忽若風。瞬息不見。痛恨良久。抽刀視之。製極精工。鐫字一行曰。膽欲大而心欲小。智欲圓而行欲方。璋後官至司馬。生五子。曰沉。曰潛。曰沕。曰深。一夕夢父曰。佩刀宜贈渾也。從之。渾任爲總憲<sup>(八六)</sup>。有政聲。

嬰

- (一)宮は縣の名。羅店は地名。
- (二)入泮は學校に入學する也。
- (三)求鳳は妻たるべき人を求むる也。司馬相如の琴歌に「鳳や鳳や故郷に歸り、四海に遨遊して其鳳を求む」とあるに本づく。
- (四)舅氏。母の兄弟を舅と曰ひ、亦、舅氏と稱す。舅氏子は母方の從兄弟。
- (五)如雲は其數多きをいふ。
- (六)顧忌は人が其言行を指摘するを憚るなり。
- (七)兒郎は青年をいふ。
- (八)醮讓。僧道、壇を設けて祈禱するを醮と曰ふ。女巫が變異を祓ひ却くるを讓と曰ふ。祈禱して災厄を讓はんとするなり。
- (九)肌革銳減は瘠せ衰ふること。
- (一〇)發表は病氣を外に出すこと。
- (一一)忽忽は失意の貌。ぼんやりすること。
- (一二)撫問は、やさしく問ふ也。
- (一三)未字は未だ許嫁せざる也。
- (一四)拚は捐棄する也。
- (一五)解頤は口を開きて笑ふ也。

甯

王子服<sup>(一)</sup>。宮之羅店人。早孤。絕慧。十四入泮。母最愛之。尋常不令遊郊野。聘蕭氏。未嫁而夭。故求鳳未就也。會上元。有舅氏子吳生。邀同眺矚。方至村外。舅家有僕來。招吳去。生見游女如雲。乘輿獨遊。有女郎攜婢。撚梅花一枝。容華絕代。笑容可掬。生注目不移。竟忘顧忌。女過去數武。顧婢曰。個兒郎。目灼灼似賊。遺花地上。笑語自去。生拾花悵然。神魂喪失。怏怏遂返。至家。藏花枕底。垂頭而睡。不語亦不食。母憂之。醮讓益劇。肌革銳減。醫師診視。投劑發表。忽忽若迷。母撫問所由。默然不答。適吳生來。囑密詰之。吳至榻前。生見之。淚下。吳就榻慰解。漸致研詰。生具吐其實。且求謀畫。吳笑曰。君意亦復癡。此願有何難遂。當代訪之。徒步於野。必非世家。如其未字。事固諧矣。不然。拚以重賂。計必允遂。但得痊瘳。成事在我。生聞之。不覺解頤。吳出告母。物色女子居里。而探訪既窮。並無蹤跡。母



- (二六) 姑氏女は父の姉妹の女、即ち父方のいとこ。姨妹は母の姉妹の女、即ち母方の従妹。
- (二七) 折柬は紙を裁ちて書を作る也。手紙を送ること。
- (二八) 支託は用事にかこつけること。
- (二九) 悒悒は愁へ悶ゆる也。
- (三〇) 商榷は相談する也。
- (三一) 盼は盼望なり。待つて居ること。
- (三二) 耗は息耗。消息なり。
- (三三) 仰息は他人にたよること。
- (三四) 伶仃は獨り行く貌。
- (三五) 合沓は重疊する也。重なりあふこと。
- (三六) 空翠は山氣をいふ。
- (三七) 鳥道は鳥の通路。
- (三八) 小里落は小村。
- (三九) 格磔は鳥の聲。鷓鴣の如き鳴聲。
- (四〇) 對戸は家の向。

大憂無所爲計。然自吳去後。顏頓開。食亦略進。數日。吳復來。生問所謀。吳給之曰。已得之矣。我以為誰何人。乃我姑氏女。即君姨妹行。今尙待聘。雖內戚有婚姻之嫌。實告之。無不諧者。生喜溢眉宇。問居何里。吳詭曰。西南山中。去此可三十餘里。生又付囑再四。吳銳身自任而去。生由此飲食漸加。日就平復。探視枕底花。雖枯未便彫落。凝思把玩。如見其人。怪吳不至。折柬招之。吳支託不肯赴。召生恚怒。悒悒不歡。母慮其復病。急爲議姻。略與商榷。輒搖首不願。惟日盼吳。吳迄無耗。益怨恨之。轉思三十里非遙。何必仰息他人。懷梅袖中。負氣自往。而家人不知也。伶仃獨步。無可問程。但望南山行去。約三十餘里。亂山合沓。空翠爽肌。寂無人行。止有鳥道。遙望谷底。叢花亂樹中。隱隱有小里落。下山入村。見舍宇無多。皆茅屋。而意甚修雅。北向一家。門前皆絲柳。牆內桃杏猶繁。間以修竹。野鳥格磔其中。意是園亭。不敢遽入。回顧對戸。有巨石滑潔。因據坐憩。俄聞牆內有女子。長呼小榮。其聲嬌細。方佇聽間。一女郎由東而西。執杏花一朵。俯首自簪。舉頭見生。遂不復簪。含笑撚花

- (三一) 階進は進み入るべき手づるなり。
- (三二) 從は從來なり。
- (三三) 盈盈望斷。熱心に何か好き手がかりの出来んことを冀望するをいふ。
- (三四) 盼親は親類を見舞ふ也。
- (三五) 聾慣は聾聵と同じ。耳遠き也。
- (三六) 書癡は讀書癡人。讀書に耽りて世事を忘れたる人。
- (三七) 砌は石だため。石を敷きたる也。
- (三八) 豆棚は豆のたな。花架は花のたな。
- (三九) 蕭客は客を導くなり。
- (四〇) 粉壁は白く塗りたる壁。
- (四一) 探入室内。室の内に花の枝が少しばかり入り込みたるをいふ。
- (四二) 茵籍は、しきもの。籍は藉と通ず。
- (四三) 隱約相窺。ちら／＼とのぞいて見ること。
- (四四) 嗽聲は高く急なる聲。
- (四五) 宗閥は家柄。
- (四六) 尊堂は人の母をいふ。
- (四七) 音問梗塞は音信の絶ゆるをいふ。
- (四八) 並無誕育。終に子を産まざるをいふ。
- (四九) 弱息は年幼き子。

而入。審視之。即上元途中所遇也。心驟喜。但念無以階進。欲呼姨氏。而顧從無還往。懼有訛誤。門內無人可問。坐臥徘徊。自朝至於日昃。盈盈望斷。並忘飢渴。時見女子露半面來窺。似訝其不去者。忽一老嫗扶杖出。顧生曰。何處郎君。聞自辰刻便來。以至於今。意將何爲。得勿飢耶。生急起揖之。答云。將以盼親。媼聾慣不聞。又大言之。乃問貴戚何姓。生不能答。媼笑曰。奇哉。姓名尙自不知。何親可探。我視郎君。亦書癡耳。不如從我來。啖以粗糲。家有短榻可臥。待明朝歸。詢之姓氏。再來探訪。不晚也。生方腹餒思啗。又從此漸近麗人。大喜。從媼入。見門內白石砌路。夾道紅花。片片墮階。曲折而西。又啓一關。豆棚花架滿庭中。蕭客入舍。粉壁光明如鏡。窗外海棠枝朶。探入室內。茵籍几榻。罔不潔澤。甫坐。即有人自窗外隱約相窺。媼喚小榮。可速作黍。外有婢子。嗽聲而應。坐次。具展宗閥。媼曰。郎君外祖。莫姓吳否。曰然。媼驚曰。是吾甥也。尊堂我妹子。年來以家窶貧。又無三尺男。遂至音問梗塞。甥長成如許。尙不相識。生曰。此來即爲姨也。匆遽遂忘姓氏。媼曰。老身秦姓。並無誕育。



- (五〇) 庶産は妾腹の子。
- (五一) 改醮は再嫁する也。
- (五二) 雛尾盈握。禮記内則に「雛尾、握に盈たざれば食はず」とあり。
- (五三) 姨兄は母かたの従兄(イトコ)。
- (五四) 噉噉は笑ふ貌。
- (五五) 咤咤叱叱は叱る聲。

- (五六) 首應は首肯する也。うなづくこと。
- (五七) 無姑家は未だ嫁せざるをいふ。
- (五八) 賊腔は賊心。
- (五九) 碧桃は桃花の重瓣なる者。實を結ばず。
- (六〇) 細碎連歩は小足に歩くこと。
- (六一) 襖被は夜具をいふ。
- (六二) 幽悶は鬱陶しきこと。
- (六三) 消遣は氣ばらしをすること。
- (六四) 糝は米粒なり。米粒を撒きたるやうに散りたるをいふ。

弱息(四九)僅存。亦爲庶産(五〇)。渠母改醮(五一)。遺我鞠養。頗亦不鈍。但少教訓。嬉不知愁。少頃使來拜識。未幾。婢子具飯(五二)。雛尾盈握(五三)。媪勸餐已。婢來斂具。媪曰。喚甯姑來。婢應去。良久聞戶外隱有笑聲。媪曰。嬰甯。汝姨兄在此。戶外嗤嗤笑不已。婢推之以入。猶掩其口。笑不可遏。媪瞋目曰。有客在。咤咤叱叱(五五)。是何景象。女忍笑而立。生揖之。媪曰。此王郎。汝姨子一家尚不相識。可笑人也。生問妹子年幾何矣。媪未能解。生又言之。女復笑不可仰視。媪謂生曰。我言少教誨。此可見也。年已十六。呆癡裁如嬰兒。生曰。小於甥一歲。曰。阿甥已十七矣。得非庚午屬馬者耶。生首應之(五六)。又問甥婦阿誰。答云無之。曰。如甥才貌。何十七歲猶未聘耶。嬰甯亦無姑家。極相匹敵。惜有內親之嫌。生無語。目注嬰甯。不暇他瞬。婢向女小語云。目灼灼。賊腔未改(五八)。女又大笑。顧婢曰。視碧桃開未。遽起。以袖掩口。細碎連歩而出。至門外。笑聲始縱。媪亦起。喚婢襖被(六一)。爲生安置。曰。阿甥來不易。宜留三五日。遲遲送汝歸。如嫌幽悶(六二)。舍後有小園。可供消遣(六三)。有書可讀。次日。至舍後。果有園半畝。細草鋪氈。楊花糝逕(六四)。有草舍三楹。花木

- (六五) 蘇蘇はざわ／＼といふ音。
- (六六) 狂笑はひどく笑ふこと。
- (六七) 接はおさへること。
- (六八) 接は受け取ること。
- (六九) 化爲異物は死ぬること。
- (七〇) 此大細事云云。これは何でも無い事です。近い親類の間柄ですから、何も惜しいとは思ひませぬ。あなたが御立ちになるときに、園中の花を老奴に澤山折らせて背負はせて送らせませうとの意。
- (七一) 葭葦は遠き親類をいふ。
- (七二) 瓜葛之愛は遠き親類としての愛情をいふ。
- (七三) 長言は長き話。
- (七四) 嗚嗚は多言する也。
- (七五) 目瞪口呆は目くばせする也。
- (七六) 絮絮究詰は、くどく／＼として問ひ詰める也。
- (七七) 適は先刻なり。

四合其所。穿花小步。聞樹頭蘇蘇(六五)。有聲仰視。則嬰甯在上。視生狂笑欲墮。生曰。勿爾。墮矣。女且下且笑。不能自止。方將及地。失手而墮。笑乃止。生扶之。陰按其腕。女笑又作。倚樹不能行。良久乃罷。生俟其笑歇。乃出袖中花示之。女接之(六八)。曰。枯矣。何留之。曰。此上元妹子所遺。故存之。問存之何意。曰。以示相愛不忘也。自上元相遇。凝思成疾。自分化爲異物。不圖得見顏色。幸垂憐憫。女曰。此大細事。至戚何所靳惜。待兄行時。園中花當喚老奴來。折一巨綱負送之。生曰。妹子癡耶。女曰。何便是癡。生曰。我非愛花。愛燃花人耳。女曰。葭葦之情。愛何待言。生曰。我所謂愛非瓜葛之愛(七二)。乃夫妻之愛。女曰。有以異乎。曰。夜共枕席耳。女俯思良久。曰。我不慣與生人睡。語未已。婢潛至。生惶恐遁去。少時。會母所。母問何往。女答以園中共話。媪曰。飯熟已久。有何長言。嗚嗚(七四)。乃爾。女曰。大哥欲我共寢。言未已。生大窘。急目瞪之。女微笑而止。幸媪不聞。猶絮絮究詰。生急以他詞掩之。因小語責女。女曰。適此語不應說耶。生曰。此背人語。女曰。背他人。豈得背老母。且寢處亦常事。何諱之。生恨其癡。無術可



(七八)雙衛は二頭の驢。

(七九)我有志匪伊朝夕。自分がさう思うて居たのは久しい間のことなりとの意。

(八〇)裝束は旅行の用意をすること。

(八一)冗人は餘計な人。

(八二)翁は夫の父。姑は夫の母。

(八三)山坳は山の凹み。

(八四)依稀は彷彿として明ならざる貌。ぼんやりと見えること。

(八五)姝麗は美しき人。

(八六)甥は、なひ、又はめひ。

(八七)面龐は面貌。

(八八)姑丈はなばの夫。

(八九)綑臥は、むつきに包みて臥せしむるなり。

以悟之。食方竟。家中人捉雙衛來尋生。先是母待生久不歸。始疑村中搜覓。幾徧。竟無蹤兆。因往尋吳。吳憶曩言。因教於西南山行覓。凡歷數村。始至於此。生出門。適相值。便入告媪。且請偕女同歸。媪喜曰。我有志匪伊朝夕。但賤軀不能遠涉。得甥攜妹子去。識認阿姨。大好。呼嬰甯甯笑至媪曰。有何喜笑輒不輟。若不笑。當爲全人。因怒之以目。乃曰。大哥欲同汝去。可便裝束。又餉家人酒食。始送之。出口。媪家田產充裕。能養冗人。到彼且勿歸。小學詩禮。亦好事翁姑。卽煩阿姨爲汝擇一良匹。二人遂發。至山坳回顧。猶依稀見媪倚門北望也。抵家。母睹姝麗。驚問爲誰。生以姨女對。母曰。前吳郎與兒言者詐也。我未有姊。何以得甥。問女。女曰。我非母出。父爲秦氏。沒時兒在襁中。不能記憶。母曰。我一姊。適秦氏良確。然殂謝已久。那得復存。因細詰面龐痣贅。一一符合。又疑曰。是矣。然亡已多年。何得復存。疑慮間。吳生至。女避入室。吳詢得故。惘然久之。忽曰。此女名嬰甯耶。生然之。吳極稱怪事。問所自知。吳曰。秦家姑去後。姑丈鰥居。崇於狐。病瘖死。狐生女。名嬰甯。綑臥牀上。家人皆

(九〇)天師。後漢の張道陵、自ら天師と稱す。後世因つて道陵の子孫を張天師と爲す。

(九一)疑參は疑ふ也。

(九二)太憨生は甚だ癡愚なるをいふ。

(九三)濃笑は盛に笑ふ也。

(九四)展拜は叩首する也。

(九五)執柯は媒妁すること。

(九六)詫歎は疑ひ怪しみ歎息すること。詫は訝る也。

(九七)憨笑は笑ふべからざるに笑つて已まざる也。

(九八)省問は御機嫌伺ひの挨拶をすること。

(九九)女紅は女工。女の仕事。

(一〇〇)承迎は迎へる也。

(一〇一)吉は吉日。

(一〇二)投見は往きて見ゆる也。

(一〇三)木香は灌木にして、枝長くして他の木に攀附し、刺あり、薔薇の如し。花、四月に開き、香氣清遠なり。

見之。姑丈歿。狐猶時來。後求天師符黏壁間。狐遂攜女去。將勿此耶。彼此疑參。但聞室中吃吃。皆嬰甯笑聲。母曰。此女亦太憨生。吳請面之。母入室。女猶濃笑不顧。母促令出。始極力忍笑。又面壁移時。方出。纔一展拜。翻然遽入。放聲大笑。滿室婦女爲之粲然。吳請往覘其異。就便執柯。尋至村所。廬舍全無。山花零落而已。吳憶姑葬處。彷彿不遠。然墳壠埋沒。莫可辨識。詫歎而返。母疑其爲鬼。入告吳言。女略無駭意。又弔其無家。亦殊無悲意。孜孜憨笑而已。衆莫之測。母令與少女同寢。止。味爽卽來省問。操女紅。精巧絕倫。但善笑。禁之亦不可止。然笑嫣然。狂而不損其媚。人皆樂之。鄰女少婦。爭承迎之。母擇吉。將爲合昏。而終恐爲鬼物。竊於日中窺之。形影殊無少異。至日。使華妝行新婦禮。女笑極不能俯仰。遂罷。生以其憨癡。恐漏洩房中隱事。而女殊密祕。不肯道一語。每值母憂怒。女至一笑卽解。奴婢小過。恐遭鞭楚。輒求詣母共話。罪婢投見。恆得免。而愛花成癖。物色徧戚黨。竊典金釵。購佳種。數月。階砌藩溷。無非花者。庭後有木香一架。故鄰西家女。母攀登其上。摘供簪玩。



(一〇四)水淋竅は朽ちたる穴。

(一〇五)稔知は熟知する也。

(一〇六)爾爾は是の如き也。

(一〇七)神明は賢明なる也。

(一〇八)鵲突は糊塗なり。分明ならざる也。

(一〇九)故返はふるき知人。

(一一〇)直告は有りのままの事實を告ぐる也。

(一一一)合厝は合葬する也。

母時遇見輒訶之。女卒不改。一日西鄰子見之。凝注傾倒。女不避而笑。西鄰子謂女意已屬。心益蕩。女指牆底笑而下。西鄰子謂示約處。大悅。及昏而往。女果在焉。就而淫之。則陰如錐刺。痛徹於心。大號而踣。細視非女。則一枯木臥牆邊。所接乃水淋竅也。鄰父聞聲。急奔研問。呻而不言。妻來始以實告。爇火燭竅。見中有巨蠖。如小蟹然。翁碎木捉殺之。負子至家。半夜尋卒。鄰人訟生。訐發嬰甯妖異。邑宰素仰生才。稔知其篤行士。謂鄰翁訟誣。將杖責之。生爲乞免。遂釋而歸。母謂女曰。憨狂爾爾。早知過喜而伏憂也。邑令神明。幸不牽累。設鵲突官宰。必逮婦女質公堂。我兒何顏見戚里。女正色矢不復笑。母曰。人罔不笑。但須有時。而女由是竟不復笑。雖故返亦終不笑。然竟日未嘗有戚容。一夕對生零涕。異之。女哽咽曰。曩以相從日淺。言之恐致駭怪。今日察姑及郎。皆過愛無有異心。直告或無妨乎。妾本狐產。母臨去。以妾託鬼母。相依十餘年。始有今日。妾又無兄弟。所恃者惟君。老母岑寂山阿。無人憐而合厝之。九泉輒爲悼恨。君倘不惜煩費。使地下人消此怨恫。庶養女者。

(一一二)錯楚は錯綜したる荆楚。いばら生ひ茂りて荒れ果てたるをいふ。

(一一三)寒食。冬至より百五日目に、火を絶ち、冷き物を食ふ、これを寒食といふ。此日、墓參を爲すの風習あり。拜掃は墓參を爲すこと。

不忍溺棄。生諾之。然慮墳塚。迷於荒草。女但言無慮。刻日。夫妻輿輓而往。女於荒煙錯楚中。指視墓處。果得媪尸。膚革猶存。女撫哭哀痛。昇歸。尋秦氏墓合葬焉。是夜。生夢媪來稱謝。寤而述之。女曰。妾夜見之。囑勿驚郎君耳。生恨不邀留。女曰。彼鬼也。生人多。陽氣勝。何能久居。生問小榮曰。是亦狐。最黠。狐母留以視妾。每攝果餌。相哺。故德之。常不去心。昨問母。云已嫁之。由是歲值寒食。夫妻登秦墓。拜掃無缺。女逾年生一子。在懷抱中。不畏生人。見人輒笑。亦大有母風云。



酒

友<sub>2</sub>

- (一) 家中不中賞は家資、額に満たざるを言ふ。家の貧しきこと。
- (二) 浮三白とは大に酒を飲むをいふ。浮は人に罰して酒を飲ますこと。白は罰爵の名。
- (三) 換は手探りする事。
- (四) 茸茸は草又は毛などの密生する貌。
- (五) 犬臥は犬の如く臥する也。
- (六) 鮑叔は齊の管仲の親友。管仲曰く、我を生める者は父母、我を知れる者は鮑子なりと。
- (七) 糟邱は酒のかすを積みたる丘。糟邱の友とは酒飲み友達をいふ。南史の陳暄傳に、暄、酒を嗜む。其兄の子秀、書を暄の友人何胥に致し、以て諷諫せんことを冀ふ。暄之を聞き、秀に書を與へて曰く、速に糟邱を營め、吾將にここに老せんとす。爾、多言する勿れとあり。
- (八) 伺は候なり、待つ也。
- (九) 何置齒頰は言ふに足らずとの意。
- (一〇) 杖頭錢は酒を買ふ錢をいふ。世説に、阮宣子、常に歩行するに百錢を以て杖頭に掛け、酒店に至れば便ち獨り酌適す。當世の貴盛と雖も、肯て詣らざるなりとあるに本づく。
- (一一) 佐は酒のさかなにするをいふ。

車生者。家中不中賞。而耽飲。夜非浮三白。不能寐也。以故牀頭尊常不空。一夜睡醒。轉側間。似有人共臥者。意是覆裳墮耳。摸之。則茸有物。似貓而巨。燭之。狐也。酣醉而犬臥。視其瓶。則空矣。笑曰。此我酒友也。不忍驚。覆衣加臂。與之共寢。留燭以觀其變。半夜狐欠伸。生笑曰。美哉睡乎。啓覆視之。儒冠之俊人也。起拜榻前。謝不殺之恩。生曰。我癖於麴蘖。而人以爲癡。卿我鮑叔也。如不見疑。當作糟邱之良友。曳登榻。復共寢。且言。卿可常相臨。無相猜。狐諾之。生既醒。則狐已去。乃治旨酒一盛。專伺狐。抵夕。果至。促膝歡飲。狐量豪善諧。於是恨相得晚。狐曰。屢叨良醞。何以報德。生曰。斗酒之歡。何置齒頰。狐曰。雖然。君貧士。杖頭錢大不易。當爲君少謀酒資。明夕來告曰。去此東南七里。道側有遺金。可早取之。詰旦而往。果得二金。乃市佳釀。以佐夜飲。狐又告曰。院後有窖藏。宜發之。如其言。

- (一二) 囊中已自有莫漫愁沽。賀知章の詩に「莫漫愁沽酒。囊中自有錢」とあるに本づく。
- (一三) 菽は錦葵なり。食ふ可し。
- (一四) 此奇貨可居。呂不韋が趙に質たる秦の公子子楚を邯鄲に見、此れ奇貨なり、居く可しと曰へるに本づく。居積し以て時に乘じて利を射る可きをいふ。
- (一五) 稔密は親密なり。

果得錢百餘千。喜曰。囊中已自有。莫漫愁沽矣。狐曰。不然。轍中水。胡可以久掬。合更謀之。異日謂生曰。市上收價廉。此奇貨可居。從之。取菽四十餘石。人咸非笑之。未幾大旱。禾豆盡枯。惟收可種。售種。息十倍。由此益富。治沃田二百畝。但問狐多種麥。則麥收。多種黍。則黍收。一切種植之早晚。皆取決於狐。日稔密。呼生妻以嫂。視子猶子焉。後生卒。狐遂不復來。



蓮

香

- (一) 齒震震有聲。大に懼れ、わななき震ひ、齒の根が合はぬをいふ。
- (二) 傾國之姝。絶世の美人をいふ。前漢書李延年傳に、延年、上に侍し、歌つて曰く、北方に佳人有り、絶世にして獨立す。一たび顧みれば人の城を傾け、再び顧みれば人の國を傾く云云とあるに本づく。
- (三) 青樓は妓女の居る所。
- (四) 息燭は燈火を滅す也。
- (五) 綢繆は纏綿の如し。情好の密なるをいふ。
- (六) 鞦韆は垂れ下る也。
- (七) 風流秀曼は風采態度のたをやかなること。
- (八) 垂盼は愛顧。

桑生名曉。字子明。沂州人。少孤。館於紅花埠。桑爲人靜穆自喜。日再出。就食東鄰。餘時墜坐而已。東鄰生偶至。戲曰。君獨居。不畏鬼狐耶。笑答云。丈夫何畏鬼狐。雄來吾有利劍。雌者尙當開門納之。鄰生歸。與友謀。梯妓於垣而過之。彈指叩扉。生窺問其誰。妓自言爲鬼。生大懼。齒震震有聲。妓逡巡自去。鄰生早至。生齋。生述所見。且告將歸。鄰生鼓掌曰。何不開門納之。生頓悟其假。遂安居如初。積半年。一女子夜來扣齋。生意友人復戲也。啓戶延入。則傾國之姝。驚問所來。曰。妾蓮香。西家妓女。埠上青樓故多信之。息燭登牀。綢繆甚至。自此三五日輒一至。一夕獨坐凝思。一女子翩然入。生意其蓮香。逆與語。觀面殊非。年僅十五六。鞦韆袖垂髻。風流秀曼。行步之間。若還若往。大愕。疑爲狐。女曰。妾良家女。姓李氏。慕君高雅。幸賜垂盼。生喜握其手。冷如冰。問何涼也。曰。幼質單寒。夜蒙霜

- (九) 葳蕤は草木初めて生ずる貌。葳蕤の質とは年少くして纖弱なる女の身の意。
- (一〇) 院中の人とは妓女をいふ。
- (一一) 解結錐。結び目を解くに用ふる錐。爪先のそりたるに喩ふ。
- (一二) 越夕は翌日の夕。
- (一三) 蕭索は衰へてものさびしき也。
- (一四) 月殿仙人は月宮殿の仙女。
- (一五) 脈析析如亂絲は脈搏の亂れて調はざるをいふ。
- (一六) 漫應は、よい加減に請け答へすること。
- (一七) 輪夕は翌日の夜。

露。那得不爾。既而羅襦袷解。儼然處。子女曰。妾爲情緣。葳蕤之質。一朝失守。不嫌鄙陋。願常侍枕席。房中得無有人否。生云。無他。止一鄰娼。顧亦不常至。女曰。謹當避之。妾不與院中人等。君祕勿洩。彼來我往。彼往我來可耳。雞鳴欲去。贈繡履一鈎。曰。此妾下體所著。弄之。足寄思慕。然有人。慎無弄也。受而視之。翹翹如解結錐。心甚愛悅。越夕無人。便出審玩。女飄然忽至。遂相款昵。自此每出履。則女必應念而至。異而詰之。笑曰。適當其時耳。一夜。蓮香來。驚云。郎何神氣蕭索。生言不自覺。蓮便告別。相約十日。去後。李來恆無虛夕。問君情人。何久不至。因以所約告。李笑曰。君視妾何如。蓮香美。曰。可稱兩絕。但蓮卿肌膚溫和。李變色曰。君謂雙美。對妾云爾。渠必月殿仙人。妾定不及。因而不懽。乃屈指計十日之期已滿。囑勿漏。將竊窺之。次夜。蓮香果至。笑語甚洽。及寢。大駭曰。殆矣。十日不見。何益憊損。保無他遇否。生詢其故。曰。妾以神氣驗之。脈析析如亂絲。鬼症也。次夜。李來。生問窺蓮香何似。曰。美矣。妾固疑世間無此佳人。果狐也。去吾尾之。南山而穴居。生疑其妒。漫應之。蹶夕。



(一八)瘡尸瘵鬼。瘵瘵の病にて死したる人。

(一九)陰毒は陰氣に中りたる害毒

(二〇)病蒂は病根といふが如し。

(二一)刀圭藥は藥なり。

(二二)僕はよりそふこと。

(二三)結舌は黙する也。

戲蓮香曰。余固不信。或謂卿狐者。蓮亟問。是誰之云。笑曰。我自戲卿。蓮曰。狐何異於人。曰。惑之者。病甚則死。是以可懼。蓮曰。不然。如君之年。房後三日。精氣可復。縱狐何害。設旦旦而伐之。人有甚於狐者矣。天下瘡尸瘵鬼。甯皆狐蠱死耶。雖然。必有議我者。生力白其無。蓮詰益力。生不得已洩之。蓮曰。我固怪君憊也。然何遽至此。得勿非人乎。君勿言。明宵當如渠之窺妾者。是夜李至。裁三數語。聞窗外嗽聲。急亡去。蓮入曰。君殆矣。是真鬼物。暱其美而不速絕冥路近矣。生意其妒。默不語。起曰。固知君不能忘情。然不忍視君死。明日當攜藥餌。爲君一除陰毒。幸病蒂猶淺。十日恙當已。請同榻以俟。痊可。次夜果出刀圭藥。啖生。頃刻洞下兩三行。覺臍腑清虛。精神頓爽。心德之。然終不信爲鬼病。蓮夜夜同衾。僕生。生欲與合。輒拒之。數日後。膚革充盈。欲別。殷殷囑絕。李生謬應之。及閉戶挑燈。輒捉履傾想。李忽至。數日隔絕。頗有怨色。生曰。彼連宵爲我作巫醫。請勿爲懟。情好在我。李稍憚。生枕上私語曰。我愛卿甚。乃有謂卿鬼者。李結舌良久。罵曰。必淫狐之惑君聽也。若不絕之妾

(二四)何以自解。自ら辨解すべき辭無かるべしとの意。

(二五)就養は療養するなり。

(二六)沈綿は病重きなり。

(二七)如望歳は農夫が年穀の熟するを望むが如きを言ふ。

(二八)田舎郎とは桑生をさす。

(二九)病入膏肓は不治の病なるをいふ。左傳成公十年に、晉侯疾み、醫を秦に求む。秦伯、醫緩をして之を爲めしむ。未だ至らず。公夢みらく、疾、二盪子と爲り、曰く、彼は良醫なり。懼らくは我を傷はん。焉にか之を逃れんと。其一曰く、膏の上、膏の下に居らば、之を若何せんや云々とあるに本づく。

(三〇)阿姨は李女を指す。姨は此處にては妾の意に用ふ。

不來矣。遂嗚鳴飲泣。生百詞慰解。乃罷。隔宿。蓮香至。知李復來。怒曰。君必欲死耶。生笑曰。卿何相妒之深。蓮益怒曰。君種死根。妾爲君除之。不妒者。將復如何。生託詞以戲曰。彼云前日之疾。爲狐祟耳。蓮乃嘆曰。誠如君言。君迷不悟。萬一不虞。妾百口何以自解。請從此辭。百日後。當視君於臥榻中。留之不可。拂然逕去。由是李夙夜必偕。約兩月餘。覺大困頓。初猶自寬解。日漸羸瘠。惟飲餽粥一甌。欲歸就養。尙戀戀不忍遽去。因循數日。沈綿不可復起。鄰生見其病憊。日遣館童餽給飲食。生至是。始疑李。因謂李曰。吾悔不聽蓮香之言。一至於此。言訖而瞑。移時復甦。張目四顧。則李已去。自是遂絕。生羸臥空齋。思蓮香如望歲。一日方凝想間。忽有褰簾入者。則蓮香也。臨榻晒曰。田舍郎。我豈妄哉。生哽咽良久。自言知罪。但求拯救。蓮曰。病入膏肓。實無救法。姑來永訣。以明非妒。生大悲曰。枕底一物。煩代碎之。蓮搜得履。持就燈前。反覆展玩。李女歛入。猝見蓮香返身欲遁。蓮以身蔽門。李窘急。不知所出。生責數之。李不能答。蓮笑曰。妾今始得與阿姨面相質。曩謂郎君舊疾。未必非



- (三一)李通判。李は姓、通判は官名。
- (三二)春蠶遺絲未盡。死したれども遺りたる情熱未だ消滅せざるをいふ。李商隱の詩に「春蠶・死に至りて絲方に盡き、蠟炬・灰と成りて涙始めて乾く」とあり。
- (三三)採捕とは人の精氣を採りて自ら其氣を補ふの意ならん。
- (三四)醋娘子要食楊梅は嫉妬深き御身は益・嫉妬すべしとの意、傳家寶に「醋娘子、楊梅を食ふ、酸中の酸」とあるに本づく。
- (三五)醫國手は名醫をいふ。
- (三六)靦然に慙づる貌。
- (三七)症何由得仍以何引。引は導く也、薦達するなり。病氣の原因と爲りたる者を用ひて其藥を服用せしむべきをいふ。病氣の原因は御身なれば、此藥を服用せしむるには御身の物を用ふるを要す、御助力を仰がざるを得ずとの意。
- (三八)櫻口は若き美人の口をいふ。
- (三九)暈生頰頰。李女羞ぢて顔を赤くせしなり。

妾致。今竟何如。李俛首謝過。蓮曰。佳麗如此。乃以愛結仇耶。李投地隕泣。乞垂憐救。蓮扶起。細詰生平。曰。妾李通判女。早夭。瘞於牆外。已死。春蠶遺絲未盡。與郎偕好。妾之願也。致郎於死。良非素心。蓮曰。聞鬼物利人死。以死後可常聚。然否。曰。不然。兩鬼相逢。並無樂趣。如樂也。泉下少年郎。豈少哉。蓮曰。癡哉。夜夜爲之。人且不堪。而況於鬼。李問。狐能死人。何術獨否。蓮曰。是採捕者流。妾非其類。故世有不害人之狐。斷無不害人之鬼。以陰氣盛也。生聞其語。始知狐鬼皆真。幸習常見慣。頗不爲駭。但念殘息如絲。不覺失聲大痛。蓮顧問。何以處郎君者。李赧然遜謝。蓮笑曰。恐郎強健。醋娘子要食楊梅也。李斂衽曰。如有醫國手。使妾得無負郎君。便當埋首地下。敢靦然人世耶。蓮解囊出藥。曰。妾早知有今。別後采藥三山。凡三閱月。物料始備。瘞盡至死。投之無不蘇者。然症何由得。仍以何引。不得不轉求効力。問何需。曰。櫻口中一點香唾耳。我以丸進。煩接口而唾之。李暈生頰頰。俯首轉側。而視其履。蓮曰。妹所得意。惟履耶。李益慚。俯仰若無所容。蓮曰。此平時熟技。今何吝焉。遂以

(四〇)殷然ほころ／＼いふ音。

(四一)調攝は養生すること。

(四二)芻靈。茅を束れて人馬の形と爲し以て死者の從衛と爲す、之を芻靈と謂ふ。

(四三)蹠はかがむる也。

(四四)不汗は處女なるをいふ。

(四五)眷注は眷顧愛憐なり。

丸納生吻。轉促逼之。李不得已睡之。蓮曰。再。又睡之。凡三四睡。丸已下咽。少間腹殷然如雷鳴。復納一丸。乃自接脣而布以氣。生覺丹田火熱。精神煥發。蓮曰。愈矣。李聽鷄鳴。徬徨別去。蓮以新瘡。尙須調攝。就食非計。因將外戶反關。僞示生歸。以絕交往。日夜守護之。李亦每夕必至。給奉殷勤。事蓮猶姊。蓮亦深憐愛之。居三月。生健如初。李遂數夜不至。偶至。一望即去。相對時。亦悒悒不樂。蓮常留與共寢。必不肯。生追出。提抱以歸。身輕如芻靈。女不得遁。遂著衣偃臥。蹠其體。不盈二尺。蓮益憐之。陰使生狎抱之。而撼搖亦不得醒。生睡去。覺而索之。已杳。後十餘日。更不復至。生懷思殊切。恆出履共弄。蓮嘆曰。窈娜如此。妾見猶憐。何況男子。生曰。昔日弄履。則至。心固疑之。然終不料其鬼。今對履思容。實所愴惻。因而泣下。先是富室章姓。有女。字燕兒。年十五。不汗而死。終夜復蘇。起顧欲奔。章扃戶。不聽出。女自言。我通判女魂。感桑郎眷注。遺烏猶存。彼處。我真鬼耳。錮我何益。以其言有因。詰其至此之由。女低徊反顧。茫不自解。或有言桑生病歸者。女執辯其誣。家人大疑。東鄰生聞



(四六)張皇はあわつる也。

- (四七)睡寫は睡眠中に著くる所の履。
- (四八)碩大無朋。朋は比なり。其の大にして比無きを言ふ。餘りに大きくして足に合はぬを言ふ也。
- (四九)肥瘦膈合。大きさがびつたりと合ふをいふ。
- (五〇)眙は直視する也。じつと視詰めること。驚きたる也。
- (五一)初度は誕生日。
- (五二)贅は贅増なり。入増にすること。

之。踰垣往窺。見生方與美人對語。掩入逼之。張皇間已失所在。鄰生駭詰。生笑曰。向固與君言。唯者則納之耳。鄰生述燕兒之言。生乃啓關。將往偵探。苦無由。章母聞生果未歸。益奇之。故使傭媪索履。生遽出以授。燕兒得之喜。試著之。鞋小於足者盈寸。大駭。攬鏡自照。忽恍然悟己之借軀以生也者。因陳所由。母始信之。女面鏡大哭曰。當日形貌。頗堪自信。每見蓮姊。猶增慙怍。今反若此。人也不如其鬼也。把履號咷。勸之不解。蒙衾僵臥。食之亦不食。體膚盡腫。凡七日不食。卒不死。而腫漸消。覺飢不可忍。乃復食。數日。遍體瘙癢。皮盡脫。晨起。睡烏遺墮。索著之。則碩大無朋矣。因試前履。肥瘦膈合。乃喜。復擊鏡。則眉目頤頰。宛肖生平。益喜。盥櫛見母。見者盡眙。蓮香聞其異。勸生以媒通之。而以貧富懸絕。不敢遽進。會媪初度。因從其子墻行往爲壽。媪睹生名。故使燕兒窺簾認客。生最後至。女驟出。捉袂欲從。與俱歸。母訶譙之。始慚而入。生審視宛然。不覺零涕。因拜伏不起。媪扶之。不以爲侮。生出。挽母舅執柯。媪議擇吉贅生。生歸告蓮香。且商所聘。蓮悵然良久。便欲別去。生大駭。

- (五三)花燭は婚禮なり。
- (五四)罽毯は毛氈なり。貼は敷くなり。
- (五五)青廬。酉陽雜俎に、北方の婚禮は青布の幔を用ひて屋を爲る、之を青廬と謂ふ。此に於て交々拜して禮を成すとあり。
- (五六)搭面は花嫁の顔面に挂くるもの。
- (五七)盞飲は合盞の禮。

- (五八)蓮聞之默默若有所思。此句、輕輕に看過す可からず。
- (五九)日就沈綿は日々に病重るをいふ。
- (六〇)彌留は病重くして死に瀕するをいふ。氣如懸絲は息の將に絶えんとするをいふ。
- (六一)異視は異類として取扱ふ也。
- (六二)擧於郷は郷試に及第して擧人と爲るなり。
- (六三)媵は妾なり。

泣下。蓮曰。君行花燭於人家。妾從而往。亦何形顏。生謀先與旋里。而後迎燕。蓮乃從之。生以情白章。章聞其有室。怒加誚讓。燕兒力白之。乃如所請。至日。生往親迎。家中備具。頗甚草草。及歸。則自門達堂。悉以罽毯貼地。百千籠燭。燦列如錦。蓮香扶新婦入青廬。搭面既揭。歡若生平。蓮陪盞飲。細詰還魂之異。燕曰。爾日抑鬱無聊。徒以身爲異物。自覺形穢。別後。憤不歸墓。隨風漾泊。每見生人。則羨之。晝憑草木。夜則信足沈浮。偶至章家。見少女臥牀上。迎附之。未知遂能活也。蓮聞之。默默若有所思。逾兩月。蓮舉一子。產後暴病。日就沈綿。捉燕臂曰。敢以孽種相累。我兒即若兒。燕泣下。姑慰藉之。爲召巫醫。輒卻之。沈痼彌留。氣如懸絲。生及燕兒皆哭。忽張目曰。勿爾。子樂生。我自樂死。如有緣。十年後。可復相見。言訖而卒。啓衾將斂尸。化爲狐。生不忍異視。厚葬之。子名狐兒。燕撫如己出。每清明。必抱兒哭。諸其墓。後數年。生擧於郷。家漸裕。而燕苦不育。狐兒頗慧。然單弱多疾。燕每欲生置媵。一日。婢忽白門外一媪。攜女求售。燕呼入。卒見大驚曰。蓮姊復出耶。生視之。真似亦駭。問年



(六四)老身止此一塊肉。吾は唯だ一人の此子あるのみとの意。一塊肉の語は、宋史に「陸秀夫、帝昚を負うて、同じく溺る。太后楊氏、之を聞きて曰く、我、艱難を忍びて此に至れるは、正に趙氏の一魂肉の爲めなるのみ。今は望無し云云」とあるに本づく。

(六五)神肖は甚だ相似る也。

(六六)嘆は驚き怪しむの聲。

(六七)似曾相識之燕歸來。晏殊の春恨詞に、「無可奈何花落去、似曾相識燕歸來」とあるに本づく。

(六八)味宿因は前生の因縁が分らぬやうになりしとの意。

(六九)娘子とは蓮香の再生なる韋氏の女自ら謂ふ也。

(七〇)木已拱矣。兩手の圍む所を拱と曰ふ。此句は左傳僖公三十二年に、「爾が墓の木拱ならん」とあるに本づく。

(七一)吉服は吉禮即ち祭祀の禮に用ふる服裝。

(七二)中表。父の姉妹の子、母の兄弟姉妹の子、互に稱して中表と曰ふ。いとこ也。

(七三)崖略は大略なり。崖は邊際なり。略は粗略なり。

阿

(一)枝指は手指六本ある也。

(二)積顏徹頭は顔を赤くして頭まで赤くなること。

(三)委禽妝は結納を送る也。納采(即ち結納)には雁を用ふ。

(四)儷は配偶者。ここにては妻をいふ。

(五)自剖は自ら辨明する也。

(六)月旦は品評なり。後漢の許劭、從兄靖と俱に高名あり、共に郷黨の人物を評論し、毎月旦に其品題を更ふ。故に人を品評することを月旦と曰ふ。

幾何。答云。十四。聘金幾何。曰。老身止此一塊肉。但俾得所。妾亦得噉飯處。後日。老骨不委溝壑足矣。生優價而留之。燕握女手。入密室。提其領而笑曰。汝識我否。答言不識。詰其姓氏。曰。妾韋姓。父徐城賣漿者。死三年矣。燕屈指停思。蓮死恰十有四載。又審顧女。儀容態度。無一不神肖者。乃拍其頂而呼之曰。蓮姊。蓮姊。十年相見之約。當不欺吾。女忽如夢醒。豁然曰。嘆。因熟視燕兒。生笑云。此似曾相識之燕歸來也。女泣然曰。是矣。問母言。妾生時便能言。以爲不祥。犬血飲之。遂昧宿因。今日殆如夢寤。娘子其恥於爲鬼之。李妹耶。共話前生。悲喜交集。一日寒食。燕曰。此每歲妾與郎君哭姊日也。遂與親登其墓。荒草離離。木已拱矣。女亦太息。李謂生曰。妾與蓮姊。兩世情好。不忍相離。宜令白骨同穴。生從其言。啓李家得骸。昇歸而合葬之。親朋聞其異。吉服臨穴。不期而會者數百人。余庚戌南游至沂。阻雨休於旅舍。有劉生子敬。其中表親。出同社王子章所撰桑生傳。約萬餘言。得卒讀。此其崖略耳。

寶

粵西孫子楚。名士也。生有枝指。性迂訥。人誑之輒信爲真。或值座有歌妓。則即遙望卻走。或知其然。誘之來。使妓狎逼之。則積顏徹頸。汗珠珠下滴。因共爲笑。遂貌其呆狀。相郵傳作醜語。而名之孫癡。邑大賈某翁。與王侯埒富。姻戚皆貴胄。有女阿寶。絕色也。日擇良匹。大家兒爭委禽妝。皆不當翁意。生時失儷。有戲之者。勸其通媒。生殊不自揣。竟從其教。翁素耳其名。而貧之。媒媪將出。適遇寶問之。以告。女戲曰。渠去其枝指。余當歸之。媪告生。生曰。不難。媒去。生以斧自斷其指。大痛徹心。血溢傾注。濱死。過數日。始能起。往見媪而示之。媪驚奔告女。女亦奇之。戲請再去其癡。生聞而譁辨。自謂不癡。然無由見而自剖。轉念阿寶。未必美如天人。何遂高自位置如此。由是曩念頓冷。會值清明。俗於是日。婦女出遊。輕薄少年。亦結隊隨行。恣其月旦。有同社友人。強邀生去。或嘲之曰。莫欲一



- (七)可人は可なる人、よき人の意。
- (八)擲掄は、からかふこと。
- (九)品頭題足は頭を品評し足を品評する也。
- (一〇)癡立は、ぼんやりして立つ也。

- (一一)招は魂を招く也。たまよばひすること。
- (一二)強拍は、強く打つ也。

- (一三)休休は氣息のかすかなる貌。
- (一四)嬌告は婉曲に告ぐる也。
- (一五)哀は哀願する也。
- (一六)故服は孫生がもと著たる衣服。草薦は草にて織りたるしきもの、こも也。皆、招魂に用ふるもの。
- (一七)香奩は鏡臺なり。

- (一八)忽忽は恍惚たる也。
- (一九)浴佛節は四月八日の灌佛會なり。
- (二〇)降香は佛寺に參詣すること。
- (二一)日涉午は正午頃なり。
- (二二)動は心動く也。

- (二三)麻子は麻の實なり。
- (二四)姐姐はお嬢さんといふが如し。
- (二五)篆中心は深く心に感銘すとの意。
- (二六)得近芳澤於願已足。御側に居ることが出来れば、それで十分なりとの意。
- (二七)心頭未冰は心臓のあたりが未だ冷えきらぬ也。
- (二八)矢は誓ふ也。
- (二九)束雙鬢は髪をつかぬる也。

觀<sup>(七)</sup>可人否。生亦知其戲已。然以受女擲掄<sup>(八)</sup>故。亦思一見其人。忻然隨衆物色之。遙見有女憩樹下。惡少年環如牆堵。衆曰。此必阿寶也。趨之。果寶。審諦之。娟麗無雙。少頃。人益稠。女起遽去。衆情顛倒。品頭題足<sup>(九)</sup>紛紛若狂。生獨默然。及衆他適。回視。猶癡立<sup>(一〇)</sup>故所。呼之不應。羣曳之曰。魂隨阿寶去耶。亦不答。衆以其素訥。故不爲怪。或推之。或挽之。以歸。至家。直上牀臥。終日不起。冥如醉。呼之不醒。家人疑其失魂。招<sup>(一一)</sup>於曠野。莫能效。強拍問之。則朦朧應云。我在阿寶家。及細詰之。又默不語。家人惶惑莫解。初生見女去。意不忍舍。覺身已從之行。漸傍其衿帶間。人無呵者。遂從女歸。坐臥依之。夜輒與狎。意甚得。然覺腹中奇餒。思欲一返家門。而迷不知路。女每夢與人交。問其名。曰。我孫子楚也。心異之。而不可以告人。生臥三日。氣休休<sup>(一三)</sup>。若將漸滅。家人大恐。託人婉告翁。欲一招魂其家。翁笑曰。平昔不省往還。何由遺魂吾家。家人固哀之。翁始允。巫執<sup>(一五)</sup>故服草薦<sup>(一六)</sup>以往。女詰得其故。駭極不聽。他往直導入室。任招呼而去。巫歸至門。生榻上已呻。既醒。女室之香奩<sup>(一七)</sup>什具。何色何名。歷言不爽。女

聞之。益駭。陰感其情之深。生既離牀。坐立凝思。忽忽若忘。每伺察阿寶。希幸一再遶之。浴佛節<sup>(一九)</sup>。聞將降香水月寺。遂早旦往候道左。目眩睛勞。日涉午<sup>(二一)</sup>。女始至。自車中窺見生。以纖手舉簾。凝睇不轉。生益動。尾從之。女忽命青衣來詰姓字。生殷勤自展。魂益搖。車去。生始歸。歸復病。冥然絕食。夢中輒呼寶名。每自恨魂不復靈。家舊養一鸚鵡。忽斃。小兒持弄於牀。生自念。倘得身爲鸚鵡。振翼可達女室。心方注想。身已翩然。鸚鵡遽飛而去。直達寶所。女喜而撲之。鎖其肘。飼以麻子<sup>(二三)</sup>。大呼曰。姐姐<sup>(二四)</sup>勿鎖我孫子楚也。女大駭。解其縛。亦不去。女祝曰。深情已篆<sup>(二五)</sup>中心。今已人禽異類。姻好何可復圓。鳥云。得近芳澤<sup>(二六)</sup>於願已足。他人飼之不食。女自飼之。則食。女坐則集其膝。臥則依其牀。如是三日。女甚憐之。陰使人瞰生。生則僵臥氣絕。已三日。但心頭未冰<sup>(二七)</sup>耳。女又祝曰。君能復爲人。當誓死相從。鳥云。誑我。女乃自矢<sup>(二八)</sup>。鳥側目。若有所思。少間。女束雙鬢<sup>(二九)</sup>。解履牀上。鸚鵡驟下。啣履飛去。女急呼之。飛已遠矣。女使嫗往探。則生已寤。家人見鸚鵡啣繡履來墮地死。方共異之。生旋蘇。卽索履。衆莫知故。



- (三〇) 借口相覆。あなたの口からさう言つて下さいとの意。
- (三一) 金諾。史記の季布傳に「黄金百金を得るは、季布の一諾を得るに若かず」とあるより、容易に得難き一諾を金諾といふ。
- (三二) 反命は復命する也。
- (三三) 相如之貧。司馬相如が卓王孫の女卓文君に通ぜしが甚だ貧しかりしこと史記及び漢書の司馬相如傳に詳なり。
- (三四) 贅は贅壻なり。
- (三五) 岳家は岳父即ち妻の父の家。
- (三六) 蓬菲は草ぶき屋根のあばらや。
- (三七) 奩妝は妻の持參金をいふ。
- (三八) 小阜は少しく豊なり。
- (三九) 物産は財産なり。
- (四〇) 居積は貯蓄する也。
- (四一) 消渴は今の糖尿病なり。
- (四二) 冥王は冥途の王。
- (四三) 部曹は冥途の官名。
- (四四) 稽鬼録は死者の名簿を取調ぶるなり。
- (四五) 大比は大試験。官吏登用試験なり。
- (四六) 闈は試験場。會試を春闈と曰ひ、鄉試を秋闈と曰ふ。
- (四七) 關節は權門に請謁して賄賂を贈るをいふ。
- (四八) 揣摩は推し量る也。色色と工夫すること。
- (四九) 熟題は習熟したる題。蹈襲は前人を摸倣する也。

適嫗至。入視生。問履所在。生曰是阿寶信誓物。借口相覆。小生不<sup>(三〇)</sup>忘<sup>(三一)</sup>金諾也。嫗反命。女益奇之。故使婢泄其情於母。母審之確。乃曰。此子才名亦不惡。但有相如之貧。擇數年得<sup>(三二)</sup>婿如此。恐遂爲顯者。笑。女以履故。矢不他。翁媪乃從之。馳報生。生喜。疾頓瘳。翁議<sup>(三四)</sup>贅<sup>(三五)</sup>諸家。女曰。婿不可久處<sup>(三六)</sup>岳家。況郎又貧。久益爲人賤。兒既諾之。蓬菲而甘。藜藿不怨。生乃親迎成禮。相逢如隔世。自是生家得<sup>(三七)</sup>奩妝<sup>(三八)</sup>。小阜頗增<sup>(三九)</sup>物產。而生癡於書。不知理家人生業。女善居積。亦不以他事累生。居三年。家益富。生忽病消渴卒。女哭之痛。至絕眠食。勸之<sup>(四〇)</sup>不納。乘夜自經。婢覺之。急救而甦。終亦不食。三日。集親黨。將以斂<sup>(四一)</sup>生。聞棺中呻以息。啓之。已復活。自言見<sup>(四二)</sup>冥王。以生平樸誠。命作<sup>(四三)</sup>部曹。忽有人白。孫部曹之妻將至。王稽<sup>(四四)</sup>鬼錄。言此未應便死。又白。不食三日矣。王願謂。感汝妻節義。始賜再生。因使馭卒控馬送汝還。由此體漸平。值歲大比。入闈<sup>(四五)</sup>之前。諸少年玩弄之。共擬隱僻之題。七引生僻處。與語。言此某家關節。敬祕相授。生信之。晝夜揣摩<sup>(四六)</sup>。紙制<sup>(四七)</sup>成七藝。衆隱笑<sup>(四八)</sup>之。時典試者。慮熟題有蹈襲弊。力反常徑。題紙

- (五〇) 符は符合する也。
- (五一) 掄は選擇する也。
- (五二) 詞林は翰林の通稱。

下。七首皆符<sup>(五〇)</sup>。生以是掄魁<sup>(五一)</sup>。明年。舉進士。授詞林<sup>(五二)</sup>。上聞其異。召問之。生啓奏。上大嘉悅。卽召見阿寶。賞賚有加焉。



(一)納贄は幣を以て招聘するをいふ。  
(二)淹洽は博學なり。

(三)假は休暇を請ふ也。  
(四)黑衛は黒色の驢。  
(五)自達は自己の身の上用事などを述べ  
をいふ。  
(六)作氷は媒妁を爲す也。  
(七)莫逆は親密なるをいふ。  
(八)許字は許嫁なり。  
(九)令愛は人の女子をいふ。待聘は未だ  
許嫁せざるをいふ。  
(一〇)直告は有りのままに告ぐる也。  
(一一)抓は搔く也。  
(一二)批耳は長く高き耳。  
(一三)嚶嚶は蟲の鳴く聲。詩經に「嚶嚶  
草蟲」の句あり。草蟲は、螽斯(いな  
い)の屬。

直隸有巨家。欲延師。忽一秀才踵門自薦。主人延入。詞語開爽。遂  
相知悅。秀才自言胡氏。遂納贄館之。胡課業良勤。淹洽非下士等。  
然時出游。輒昏夜始歸。扃閉儼然。不款叩而已在室中矣。遂相驚  
以狐。然察胡意固不惡。優重之。不以怪異廢禮。胡知主人有女。求  
爲姻好。屢示意。主人僞不解。一日。胡假而去。次日有客來謁。繫黑  
衛於門。主人迎而入。年五十餘。衣履鮮潔。意甚恬雅。既坐。自達始  
知爲胡氏。作冰。主人默然良久。曰。僕與胡先生交已莫逆。何必婚  
姻。且息女已許字矣。煩代謝先生。客曰。確知令愛待聘。何拒之深。  
再三言之。而主人不可。客有慙色。曰。胡亦世族。何遽不如先生。主  
人直告曰。實無他意。但惡其類耳。客聞之。怒。主人亦怒。相侵益亟。  
客起。抓主人。主人命家人杖逐之。客乃遁。遺其驢視之。毛黑色。批  
耳修尾。大物也。牽之不動。驅之則隨手而蹶。嚶嚶然草蟲耳。主人

(一四)冲擊は攻撃する也。

(一五)門扇は門のとびら。

(一六)蒿梗は艾の刺。

(一七)輿戎は兵を起す也。

(一八)生摘は瓜又は果の未だ熟せざる者  
を摘み取る事。  
(一九)在門牆之幼子は己の家の子の幼子の  
意。

以其言忿。知必相讎。戒備之。次日。果有狐兵大至。或騎或步。或戈  
或弩。馬嘶人沸。聲勢洶洶。主人不敢出。狐聲言火屋。主人益懼。有  
健者。率家人謀出。飛石施箭。兩相冲擊。互相夷傷。狐漸靡。紛紛引  
去。遺刀地上。亮如霜雪。近拾之。則高粱葉也。衆笑曰。技止此耳。然  
恐其復至。益備之。明日。衆方聚語。忽一巨人。自天而降。高丈餘。身  
橫數尺。揮大刀如門扇。逐人而殺。羣操矢石亂擊之。顛踣而斃。則  
芻靈耳。衆益易之。狐三日不復來。衆亦少懈。主人適登廁。俄見狐  
兵。張弓挾矢而至。亂射之。矢集於臀。大懼。急喊衆奔鬪。狐方去。拔  
矢視之。皆蒿梗。如此月餘。去來不常。雖不甚害。而日戒嚴。主人患  
苦之。一日。胡生率師至。主人自出。胡望見避於衆中。主人呼之。不  
得已乃出。主人曰。僕自謂無失禮於先生。何故與戎羣狐欲射。胡  
止之。主人近握其手。邀入故齋。置酒相款。從容曰。先生達人。當相  
見諒。以我情好。甯不樂附婚姻。但先生車馬宮室。多不與人同。弱  
女相從。卽先生當知其不可。且諺云。瓜果之生摘者。不適於口。先  
生何取焉。胡大慙。主人曰。無傷。舊好故在。如不以塵濁見棄。在門



(二〇)坦腹牀下は女壻と爲るをいふ。世説に「郝鑿、門生をして壻を王導に求めしむ。導、東廂に就きて徧く子弟を觀しむ。門生歸り、鑿に謂つて曰く、王氏の諸少竝に佳なり。然れども信至るを聞き、咸自ら矜持せり。惟だ一人、東牀に在り、坦腹して臥し、獨り聞かざるが若くなりきと。鑿曰く、此れ眞に佳壻なりと。之を訪へば乃ち義之なり。女を以て之に妻はす」とあるに本づく。

(二一)奉箕帚は妻と爲るをいふ。

(二二)酬酢は盃のやりとりすること。

(二三)前卻。卻は隙と通ず。以前の仲違ひ。

(二四)奠雁は結納を贈ること。

(二五)訂期は期日を約束すること。

(二六)奩妝は嫁入り道具。

(二七)設は陳列する也。

(二八)時來望女。時時女に遇ひに来るをいふ。

牆之幼子。年十五矣。願得坦腹牀下。不知有相若者否。胡喜曰。僕有弱妹。少公子一歲。頗不陋劣。以奉箕帚如何。主人起拜。胡答拜。於是酬酢甚歡。前卻俱忘。命羅酒漿。徧犒從者。上下歡慰。乃詳問里居。將以奠雁。胡辭之。日暮繼燭。醺醉乃去。由是遂安。年餘。胡不至。或疑其約妄。而主人堅待之。又半年。胡忽至。既道温涼已。乃曰。妹子長成矣。請卜良辰。遣事翁姑。主人喜。即同訂期而去。至夜。果有輿馬送新婦。至奩妝豐盛。設室中幾滿。新婦見姑嫜。温麗異常。主人大喜。胡生與一弟來送女。談吐俱風雅。又善飲。天明乃去。新婦且能預知年歲豐凶。故謀生之計。皆取則焉。胡生兄弟。以及胡媪。時來望女。人人皆見之。

織

成

(一)艘。荆人は渡津の船を艘と曰ふ。

(二)洞庭得遇龍女而仙。柳毅が落第して歸るとき、洞庭湖濱に於て、一婦人が羊を牧するを見しが、此婦人は洞庭龍君の少女にして、毅、之が爲めに書を洞庭龍君に致し、遂に仙と爲るを得たること、唐の李朝威の龍女傳に見ゆ。

(三)筆札。札は木簡の薄き者なり。

洞庭湖中。往往有水神借舟。遇有空船。纔忽自解。飄然遊行。但聞空中音樂。並作舟人蹲伏一隅。瞑目聽之。莫敢仰視。任所往。遊畢。仍泊舊處。有柳生落第歸。醉臥舟上。笙樂忽作。舟人搖生。不得醒。急匿艘下。俄有人摔生。生醉甚。隨手墮地。眠如故。即以置之。少間。鼓吹鳴聒。生微醒。聞蘭麝充盈。睨之。見滿船皆佳麗。心知其異。目若瞑。少間。傳呼織成。即有侍兒來。立近。頰際翠襪紫綃。履細瘦如指。心好之。隱以齒齧其襪。少間。女子移動。牽曳傾踏。座上問之。因白其故。座上者怒。命即行誅。遂有武士入。捉縛而起。見南面一人。冠服類王者。因行且語曰。聞洞庭君爲柳氏。臣亦柳氏。昔洞庭落第。今臣亦落第。洞庭得遇龍女而仙。今臣醉戲一姬而死。何幸不幸之懸殊也。王者聞之。喚回。問汝秀才。下第者乎。生諾。便授筆札。令賦風鬢霧鬢。生固襄陽名士。而構思頗遲。捉筆良久。上謂讓曰。



- (四) 三都賦云。晉の左思、三都の賦を作る、構思すること十年なりきと云ふ。十稔は十年なり。稔は熟するなり。穀一たび熟するを一年と爲す。
- (五) 異饌紛綸。珍異なる食物が數多く陳列せられたるをいふ。
- (六) 溺籍は溺死したる者の名簿。
- (七) 簽差は差遣する也。
- (八) 界方は界尺なり。直線を引くに用ふる物。定規にして文鎮にも用ふる。
- (九) 劫數は厄運なり。災厄の運命。

(一〇) 築築は動搖する貌。

(一一) 雙鉤は二本の足をいふ。

(一二) 承接は應接面會する也。

(一三) 年十五六已來は年十五六位の意。

名士何得爾。生釋筆自白。昔三都賦十稔而成。以是知文貴工不貴速也。王者笑聽之。自辰至午。稿始脫。王者覽之。大悅曰。真名士也。遂賜以酒。頃刻。異饌紛綸。方問對問。一使捧簿進曰。溺籍告成矣。問人數幾何。曰。一百二十八人。問簽差何人。答云。毛南二尉。生起拜辭。王者贈黃金十斤。又水晶界方一握。曰。湖中小有劫數。持此可免。忽見羽葆人馬。紛立水面。王者下舟登輿。遂不復見。久之寂然。舟人始自艫下出。蕩舟北渡。風逆不得前。忽見水中有鐵猫浮出。舟人駭曰。毛將軍出現矣。各舟商客俱伏。又無何。湖中有一木直立。築築動搖。益懼曰。南將軍又出矣。少時。波浪大作。上翳天日。四顧湖舟。一時盡覆。生舉界方危坐舟中。萬丈洪濤。近舟頓滅。以是得全。生歸。每向人語其異。言舟中侍兒。雖未悉其容貌。而裙下雙鉤。亦人世所無。後以故至武昌。有崔媪賣女。千金不售。蓄一水晶界方。言有能配此者。嫁之。生異之。懷界方而往。媪忻然承接。呼女出見。年十五六已來。娟曼風流。更無倫比。略一展拜。反身入韓。生一見。魂魄動搖。曰。小生亦蓄一物。不知與老姥家藏。頗相稱

- (一四) 略騙者は他人の財物をかたり取る者。
- (一五) 措辦は事を處理する也。
- (一六) 眈眈は目を垂れて下視する貌。
- (一七) 直言は有りのままの事實を語る也。
- (一八) 凝盼はじつと見詰めること。

否。因各出相較。長短不爽。毫釐。媪喜。便問寓所。請生即歸命。與界方留作信。生不肯留。媪笑曰。官人亦太小心。老身豈以一界方。抽身竄去耶。生不得已。留之。出即賃輿急返。而媪室已空。大駭。徧問居人。迄無知者。日已向西。蹀躞若喪。邑邑而返。中途值一輿過。忽舉簾曰。柳郎何遲也。視之。則崔媪。喜問何之。媪笑曰。必將疑老身略騙者矣。別後。適有便輿。頓念官人亦僑寓。措辦亦艱。故遂送女歸舟耳。生邀回車。媪必不可。生倉皇不能確信。急奔入舟。女果及一婢在焉。見生入。談笑承迎。見翠襪朱履。與舟中侍兒妝飾。更無少別。心異之。徘徊凝注。女笑曰。眈眈注目。生平所未見耶。生益俯窺之。則襪後齒痕宛然。驚曰。卿織成耶。女掩口微哂。生長揖曰。卿果神人。早請直言。以祛煩惑。女曰。實告君。前舟中所遇。即洞庭君也。仰慕鴻才。便欲以妾相贈。因妾過爲王妃所愛。故歸謀之。妾之來從。妃命也。生喜。沐手焚香。望湖朝拜。乃歸。後詣武昌。女求同去。將便歸甯。既至洞庭。女拔釵擲水。急見一小舟。自湖中出。女躍登。如鳥飛集。轉瞬已杳。生坐船頭。於沒處凝盼之。遙遙一樓船至。既



(一九)世家は世祿の家。

近窗開。忽如一彩禽翔過。則織成至矣。一人自窗中遽擲金帛珍物甚多。皆妃賜也。由是歲一兩觀以爲常。放生家富有珠寶。每出一物。世家所不識焉。

竹

青

- (一) 葉は極めて也。
- (二) 資斧は旅行の費用。
- (三) 吳王廟。楚江の富池鎮に吳王廟有り、三國の吳の將軍甘寧を祀る。宋の時、神風、漕運を助くるを以て封じて王と爲す。靈顯異常なり。舟、廟前を過ぐれば必ず報祀す。鴉數百有り、飛んで廟傍の林木に集まり、往來して舟を迎ふること數里、舞うて帆檣の上に噪ぐ。舟人、肉を空中に投じて之を餒ふ。群鴉之を接け、百に一つをも墜さず。舟人、之を吳王の神鴉と云ふ。
- (四) 可は許可する也。
- (五) 尤効は尤(トガ)めて之に效ふ也。
- (六) 果腹は滿腹なり。
- (七) 無機は用心せざるなり。
- (八) 未氷は未だ冷却せざるなり。
- (九) 邏察は巡行視察する也。
- (一〇) 斂貲は財貨を集むる也。魚生の爲めに寄附金を募りしをいふ。
- (一一) 領薦は推薦せられて仕官する也。

魚容湖南人。談者忘其郡邑。家甚貧。下第歸。資斧斷絕。羞於行乞。餓甚。暫憩吳王廟中。因以憤懣之詞。拜禱神坐。出臥廊下。忽一人引去。見吳王。跪曰。黑衣隊尙缺一卒。可使補缺。吳王可。即授黑衣。既着身。化爲鳥。振翼而出。見鳥友羣集。相將俱去。分集帆檣。舟上客旅。爭以肉餌拋擲。羣於空中接食之。因亦尤効。須臾果腹。翔棲樹杪。意亦甚得。踰二三日。吳王憐其無偶。配以雌。呼之竹青。雅相愛樂。魚每取食。輒馴無機。竹青恆勸諫之。卒不能聽。一日有兵過。彈之中胸。幸竹青銜去之。得不被擒。羣鳥怒。鼓翼搨波。波湧起。舟盡覆。竹青乃攝餌哺魚。魚傷甚。終日而斃。忽如夢醒。則身臥廟中。先是人見魚死。不知誰何。撫之未冰。故不時以人邏察之。至是。訊知其由。斂貲送歸。後三年。復過故所。參謁吳王。設食。喚鳥下集。啗乃祝曰。竹青如在。當止食已。並飛去。後領薦歸。復謁吳王廟。薦以



(一一)少牢。祭祀燕享に羊を少牢と謂ふ。  
(一二)飄然はにつこりと笑ふ貌。

(一四)懽戀は歡喜と戀慕と。

(一五)駭絶は甚だ駭く也。

(一六)琴瑟は夫婦をいふ。

(一七)家門は己の家をいふ。

(一八)別院は別荘といふが如し。

(一九)祖餞は送別の宴を開く也。

少牢已乃大設。以饗鳥友。又祝之。是夜宿於湖村。秉燭方坐。忽几前如飛鳥飄落。視之。則二十許麗人。飄然曰。別來無恙乎。魚驚問之。曰。君不識竹青耶。魚喜。詰所來。曰。妾今爲漢江神女。返故鄉時常少。前烏使兩道君情。故來一相聚也。魚益欣感。宛如夫妻之久別。不勝懽戀。生將偕與俱南。女欲與俱西。兩謀不決。寢初醒。則女已起。開目。見高堂中巨燭熒煌。竟非舟中。驚起。問此何所。女笑曰。此漢陽也。妾家即君家。何必南。天漸曉。婢媪紛集。酒炙已設。就廣牀上。陳矮几。夫婦對酌。魚問僕之所在。答在舟上。生慮舟人不能久待。女言不妨。妾當助君報之。於是日夜談讌。樂而忘歸。舟人夢醒。忽見漢陽。駭絶。僕訪主人。杳無信兆。舟人欲他適。而纜結不解。遂共守之。積兩月餘。生忽憶歸。謂女曰。僕在此。親戚斷絕。且卿與僕。名爲琴瑟。而不一認家門。奈何。女曰。無論妾不能往。縱能之。君家自有婦。將何以處妾也。不如置妾於此。爲君別院可耳。生恨道遠。不能時至。女出黑衣曰。君舊衣尙在。如念妾時。衣此可至。至時爲君解之。乃大設肴珍。爲生祖餞。既醉而寢。醒則身在舟中。視之。

(二〇)臨孳は將に産孳に就かんとするをいふ。

(二一)末後は最後なり。藕白は蓮の如き白き衣。

(二二)漢臯解佩。列仙傳に、鄭交甫、漢臯臺下に至り、二女の兩珠大さ荊雞の卵の如くなるを佩ぶるを見、交甫與に言ふ、願はくは子の佩を得んと。二女解きて之を與ふ。既に行きて反顧すれば、二女見えず、佩珠も亦失へり」とあり。

(二三)治任は旅行の支度を爲す也。  
(二四)己出は自分の産みたる子。

洞庭舊泊處也。舟人及僕俱在。相視大駭。詰其所往。生故悵然自驚。枕邊一襖。檢視。則女贈新衣襪履。黑衣亦摺置其中。又有繡囊。維繫腰際。探之。則金貨充牣焉。於是南發。達岸。厚酬舟人而去。歸家數月。苦憶漢水。因潛出。黑著之。兩脇生翼。翕然凌空。經兩時許。已達漢水。回翔下視。見孤嶼中。有樓舍一簇。遂飛墮。有婢子已望見之。呼曰。官人至矣。無何竹青出。命衆手爲之緩結。覺羽毛劃然盡脫。握手入舍。曰。郎來恰好。妾旦夕臨孳矣。生戲問曰。胎生乎。卵生乎。女曰。妾今爲神。則皮骨已更。應與曩異。至數日。果產。胎衣厚裹。如巨卵。然破之。男也。生喜。名之漢產。三日後。漢水神女。皆登堂。以服飾珍物相賀。並皆佳妙。無三十以上人。俱入室。就榻。以拇指按兒鼻。名曰增壽。既去。生問皆誰何。女曰。此皆妾輩。其末後著藕白者。所謂漢臯解佩。即其人也。居數月。女以舟送之。不用帆楫。飄然自行。抵陸。已有人繫馬道左。遂歸。由此往來不絕。積數年。漢產益秀美。生珍愛之。妻和氏。苦不育。每想一見漢產。生以情告女。女乃治任。送兒從父歸。約以三月。既歸。和愛之。過於己出。逾十餘



(二五)再育は再び子を産む也。

(二六)郡庠は郡の學校。

(二七)美質は美人。

(二八)躡踊は胸を拊ち踊りて哀しむ也。喪の禮なり。

月不忍令返。一日暴病而殤。和氏悼痛欲死。生乃詣漢告女。入門。則漢產赤足臥牀上。喜以問女。女曰。君久負約。妾思兒。故招之也。生因述和氏愛兒之故。女曰。待妾再育。放漢產歸。又年餘。女雙生。男女各一。男名漢生。女名玉佩。生遂攜漢產歸。然歲恆三四往。不以爲便。因移家漢陽。漢產十二歲。入郡庠。女以人間無美質。招去。爲之娶婦。始遣歸。婦名扈娘。亦神女產也。後和氏卒。漢生及妹皆來躡踊。葬畢。漢產遂留。生攜漢生玉佩去。自此不返。

阿

織

(一)高密は縣の名。

(二)蒙沂は蒙陰縣沂水縣。並に山東省に屬す。

(三)二扇。扇は屏なり。

(四)蹇は驢なり。繫は繋ぐ也。

(五)無多手指。家族多からざるをいふ。

(六)老荆は己の妻。弱女は少女。

(七)宿着は前日よりの着。

(八)拔來報往。拔報は皆疾き也。急いで往つたり來たりすること。此句は禮記少儀に「母拔來母報往」とあるに本づく。

(九)蹠蹠は往來頻數なる貌。

(一〇)清貫は他人の郷籍をいふ。

(一一)字は女子の許嫁するをいふ。女子は許嫁し、笄して字す、故に然云ふ。

(一二)萍水之人は、他郷より來りたる旅人。王勃の滕王閣序に「萍水相逢ふ、盡く是れ他郷の客」とあり。

(一三)沒齒は死する也。

奚山者。高密人。質販爲業。往往客蒙沂之間。一日途中阻雨。及至所常宿處。而夜已深。徧叩肆門。無有應者。徘徊廡下。忽二扇豁開。一叟出。便納客入。山喜從之。繫蹇登堂。堂上迄無几榻。叟曰。我憐客無歸。故相容納。我實非賣食沽飲者。家中無多手指。惟有老荆弱女。眠熟矣。雖有宿着。苦少烹鬻。勿嫌冷啜也。言已。便入。少頃。以短足牀來。置地上。促客坐。又入。攜一短足几至。拔來報往。蹠蹠甚勞。山起坐不自安。叟令暫息。少間。一女郎出行。酒。叟顧曰。我家阿織興矣。視之。年十六七。窈窕秀弱。風致嫣然。山有少弟未婚。竊屬意焉。因詢叟。清貫尊閥。答云。士虛。姓古。子孫皆夭折。剩有此女。適不忍攪其酣睡。想老荆喚起矣。問婿家阿誰。答云。未字。山竊喜。既而品味雜陳。似所宿具。食已。致恭而言曰。萍水之人。遂蒙寵惠。沒齒所不敢忘。緣翁盛德。乃敢遽陳。樸魯僕有幼弟三郎。十七歲矣。



(二四)肄は習ふ也。

(二五)援繫は縁組すること。國語晉語に「董叔、妻を范氏に娶りて曰く、將に援繫を求めんとするなりと云云」とあるに本づく。

(二六)飯金は飲食の代金。

(二七)敗堵は敗れたるかきね。

(二八)處人情大不善。此地の人氣は大層善からずとの意。

(二九)過度は、くらして行くこと。

(三〇)尊乗は御身の乗り物、即ち驢をいふ。

(三一)蹄蹴は馬をいふ。中記宣殖傳に「馬蹄蹴干」とあるに本づく。

讀書肄業<sup>(二四)</sup>。頗不頑冥<sup>(二五)</sup>。欲求援繫<sup>(二五)</sup>。不嫌寒賤否。叟喜曰。老夫在此。亦是僑寓。倘得相託。便假一廬。移家而往。庶免懸念。山都應之。遂起展謝。叟殷勤安置而去。鷄既唱。叟已出。呼客盥沐。束裝已。酬以飯<sup>(二六)</sup>。金固辭。曰。客留一飯。萬無受金之理。矧附為婚姻乎。既別。客月餘乃返。去村里餘。遇老媪率一女郎。冠服盡素。既近。疑似阿織。女郎亦頻轉顧。因把媪袂附耳。不知何辭。媪便停步。向山曰。君奚姓耶。山唯唯。媪慘然曰。不幸老翁壓於敗堵<sup>(二七)</sup>。今將上墓。家虛無人。請少待路側。行即還也。遂入林去。移時始來。途已昏冥。遂與偕行。道其孤弱。不覺哀啼。山亦酸惻。媪曰。此處人情大不善。孤孀難以過<sup>(二八)</sup>。度。阿織既為君家婦。過此恐遲時日。不如早夜同歸。山可之。既至家。媪挑燈供客。已謂山曰。意君將至。儲粟都已糶去。尚存廿餘石。遠莫致之。北去四五里。村中第一門。有談二泉者。是吾售主。君勿憚勞。先以尊乘<sup>(三〇)</sup>連一囊去。叩門而告之。但道南村古姥。有數石粟。糶作路用。煩驅蹄蹴<sup>(三一)</sup>一致之也。即以囊粟付山。山策蹇去。叩戶。一碩腹男子出。告以故。傾囊先歸。俄有兩夫以五騾至。媪引山至粟

(二二)量は斗斛なり。概は斗かき。

(二三)奩粧は嫁入り支度。

(二四)無停晷は休息する時無きをいふ。

(二五)大伯は兄様。奚山をさす。

(二六)阿伯は兄なり。主人、自ら兄を謂ふ。

(二七)今置之不以人齒。近頃は人並に待遇せられずとの意。  
(二八)良耦は良き配偶。

所。乃在窖中。山下為操量執概<sup>(二二)</sup>。母放女收頃刻盈裝。付之以去。凡四反而粟始盡。既而以金授媪。媪留其一人二畜。治任遂東。行二十里。天始曙。至一市。市頭賃騎。談僕乃返。既歸。山以情告父母。相見甚喜。即以別第館媪。卜吉為三郎完婚。媪治奩粧甚備。阿織寡言少怒。或與語。但有微笑。晝夜績織無停晷<sup>(二四)</sup>。以是上下悉憐悅之。囑三郎曰。寄語大伯<sup>(二五)</sup>。再過西道。勿言吾母子也。居三四年。奚家益富。三郎入泮矣。一日。山宿古之舊鄰。偶及曩年無歸。投宿翁媪之事。主人曰。客誤矣。東鄰為阿伯別第<sup>(二六)</sup>。三年前。居者輒睹怪異。故空廢甚久。有何翁媪相留。山甚訝之。而未深言。主人又曰。此宅向空<sup>(二六)</sup>十年。無敢入者。一日。第後牆傾。伯往視之。則石壓巨鼠如貓。尾在牆內。猶搖。急歸呼衆。共往則已渺矣。羣疑是物為妖。後十餘日。復入試驗。寂無形聲。又年餘。始有人居。山益奇之。歸家私語。竊疑新婦非人。陰為三郎慮。而三郎篤愛如常。久之。家中人紛相猜議。女微察之。夜中語三郎曰。妾從君數載。未嘗少失德。今置之不以人齒<sup>(二七)</sup>。請賜離婚書。聽君自擇良耦<sup>(二八)</sup>。因泣下。三郎曰。區區寸心。宜所夙知。



(二九)成以福澤歸卿。人、皆、福運は御身の爲めなりと思へりとの意。  
(三〇)秋扇之捐。婦人が男子に棄てらるるをいふ。班婕妤の怨歌行に、「新製齊執素、鮮潔如霜雪、裁成合歡扇、團圓似明月、出入君懷袖、動搖微風發、常恐秋節至、涼颯奪炎熱、棄捐篋箱中、恩深中路絕」とあるに本づく。

(三一)營營は思ひ亂るる貌。  
(三二)藉藉は雜亂にして衆多なり。かはるがばる色々様々と慰むるをいふ。

(三三)膠は州の名。  
(三四)表戚は母方の親類。

(三五)叔家は、おとうと。遂は嵐の名。  
(三六)乖迕は仲違ひすること。

(三七)加白眼とは人がいやな顔をすること。晉書阮籍傳に「籍善く青白眼を爲す。禮俗の士を見るときは、白眼を以て之に對す。母終りしとき、籍喜來り叩す。籍、白眼を作す。喜懼はすして退く。喜の弟康、之を聞き、酒を藏し琴を挾みてこれに造る。乃ち青眼を見る」とあるに本づく。  
(三八)分炊は分家する也。  
(三九)乳藥求死。乳藥は毒藥を服する也。此語は後漢書王允傳に「王允、聲を厲まして曰く、吾、人臣となり、罪を君に獲ば、當に大辟に伏して以て天下に謝すべし。豈に乳藥して死を求むる有らんや」とあるに本づく。  
(四〇)其値は屋賃をいふ。  
(四一)風は諷と通ず。  
(四二)通計房租云云。初よりの屋賃を殘らず計算して之を引き留め困らせんとせしなり。  
(四三)惡障は惡しき罪障。  
(四四)其情とは謝氏が女を妾にせんと欲せし事情をいふ。  
(四五)析居は別居する也。  
(四六)儻石。儻は小龜、石は二十斤。又齊人、小龜を儻石と爲す。儻石無しとは、僅ばかりの儲蓄も無しとの意。  
(四七)周は賙と通ず。  
(四八)不念舊惡。此語は論語に「孔子の言に「伯夷叔齊、舊惡を念はず、怨是を用て希なり」とあるに本づく。

自卿入門。家日以豊。咸以福澤歸卿。烏得有異言。女曰。君無二心。妾豈不知。但衆口紛紜。恐不免秋扇之捐。三郎再四慰解。乃已。山終不釋。日求善撲之貓。以觀其意。女雖不懼。然蹙蹙不快。一夕。謂媼小恙。辭三郎省侍之。天明。三郎往訊。則室內已空。駭極。使人於四途踪跡之。竝無消息。中心營營。寢食都廢。而父兄皆以爲幸。交慰藉。將爲續婚。而三郎殊不憚。俟之年餘。音問以絕。父兄輒相誚責。不得已。以重金買妾。然思阿織不衰。又數年。奚家日漸貧。由是咸憶阿織。有叔弟嵐。以故至膠。迂道宿表戚陸生家。夜聞鄰哭甚哀。未遑詰也。既返。復聞之。因問主人。答云。數年前有寡母孤女。憊居於是。月前姥死。女獨處。無一綫之親。是以哀耳。問何姓。曰。姓古。嘗閉戶。不與里社通。故未悉其家世。嵐驚曰。是我嫂也。因往款扉。有人揮涕出。隔扉應曰。客何人。我家故無男子。嵐隙窺而遙審之。果嫂。便曰。嫂啓關。我是叔家阿遂。女聞之。拔關納入。訴其孤苦。意悽慘悲懷。嵐曰。三兄憶念頗苦。夫妻卽有乖迕。何遂遠遁至此。卽欲賃輿同歸。女慘然曰。我以人不齒數故。遂與母偕隱。今又返

而依人。誰不加白眼。如欲復還。當與大兄分炊。不然。行乳藥求死耳。嵐既歸。以告三郎。三郎星夜馳去。夫婦相見。各有涕淚。次日。告其屋主。屋主謝監生。窺女美。陰欲圖致爲妾。數年不取其值。頻風示媼媼絕之。媼死。竊幸可謀。而三郎忽至。通計房租。以留難之。三郎家故不豐。聞多金。頗有憂色。女言不妨。引三郎視倉儲。約粟三十餘石。償租有餘。三郎喜。以告謝。謝不受粟。故索金。女歎曰。此皆妾身之惡障也。遂以其情告三郎。三郎怒。將訴於邑陸氏止之。爲散粟於里黨。斂貲償謝。以車送兩人歸。三郎實告父母。與兄析居。阿織出私金。日建倉廩。而家中尙無儻石。共奇之。年餘驗視。則倉中盈矣。不數年。家大富。而山苦貧。女移翁姑自養之。輒以金粟周兄。狃以爲常。三郎喜曰。卿可云不念舊惡矣。女曰。彼自愛弟耳。且非渠。妾何緣識君哉。後亦無甚怪異。



- (一)安は姓、大成は名。
- (二)重慶は府の名、四川省に屬す。
- (三)悍繆は意地悪く心ねぢれたるなり。
- (四)靚妝は粉白黛黑なり。お化粧すること。朝は朝の挨拶をすること。
- (五)誨淫、易經繫辭傳に、「容を治かにするは淫を誨ふるなり」とあるに本づく。
- (六)投類は叩頭する也。自ら額を地に打ち付けて謝罪する也。
- (七)觸物類而罵之。何事か有る度毎に罵るなり。
- (八)姑璋は舅姑なり。夫の父母を璋と曰ふ。
- (九)俗に叔母を呼んで嬖と曰ふ。
- (一〇)憤は事情なり。
- (一一)脈脈は情を含んで吐かんと欲する貌。言はんと欲すれども言ひかゝれる様。
- (一二)嗚泣はすすりなく也。

安生大成、重慶人。父孝廉。早卒。弟二成。幼生娶陳氏。小字珊瑚。而生母沈。悍繆不仁。遇之虐。珊瑚無怨色。每旦靚妝往朝。值生疾。母謂其誨淫。詬責之。珊瑚退。毀妝以進。母益怒。投類自擣。生素孝。鞭婦。母始少解。自此益憎婦。婦雖奉事惟勤。終不與交。一語生知。母怒。亦寄宿他所。示與婦絕。久之。母終不快。觸物類而罵之。意皆在珊瑚。生曰。娶妻以奉姑璋。今若此。何以妻爲。遂出珊瑚。使老媪送諸其家。方出里門。珊瑚泣曰。爲女子不能作婦。歸何以見雙親。不如死。袖中出剪刀刺喉。急救之。血溢沾襟。扶歸生族。嬖家。嬖王氏。寡居無耦。遂止焉。媪婦。生囑隱其情。而心竊恐。母知。過數日。探知珊瑚。創漸平。登王氏門。使勿留珊瑚。王召之入。不入。但盛氣逐珊瑚。無何。珊瑚出。見生。便問珊瑚何罪。生責其不能事母。珊瑚脈脈不作一言。惟俯首嗚泣。泪皆赤。素衫盡染。生慘惻。不能盡詞而退。又數日。母已聞之。怒詣王。惡言誚讓。王傲不相下。反數其惡。且言婦已出。尙屬安家何人。我自留陳氏女。非留安氏婦也。何煩強與他家事。母怒甚。而窮於詞。又見其意氣。訕訕。漸沮大哭而返。珊瑚意不自安。思他適。先是生有母姨于媪。卽沈姊也。年六十餘。子死。止一幼孫及寡媳。又嘗善視珊瑚。遂辭王。往投媪。媪詰得故。極道妹子昏暴。卽欲送之還。珊瑚力言其不可。兼囑勿言。於是與于媪居。類姑婦焉。珊瑚有兩兄。聞而憐之。欲移之歸而嫁之。珊瑚執不肯。惟從于媪紡績以自度。生自出婦。母多方爲子謀婚。而悍聲流播。遠近無與爲耦。積三四年。二成漸長。遂先爲畢姻。二成妻臧姑。驕悍戾沓。尤倍於母。母或怒以色。則臧姑怒以聲。二成又懦。不敢爲左右袒。於是母威頓減。莫敢擾。反望色笑而承迎之。猶不能得臧姑歡。臧姑役母若婢。生不敢言。惟身代母操作。滌器。汜掃之事。皆與焉。母子恆於無人處。相對飲泣。無何。母以鬱積病。委頓在牀。便溺轉側皆須生。生晝夜不得寐。兩目盡赤。呼弟代役。甫入門。臧姑輒喚去之。生於是奔告于媪。媪臨存。入門。泣且訴。訴未畢。

- (一三)訕訕は意氣の盛んなるをいふ。
- (一四)母姨は母の姉妹。
- (一五)寡媳は死したる子の妻。
- (一六)姑婦は、しうとめ、よめ。
- (一七)自度は自分の生計を立つること。
- (一八)悍聲流播は、頑凶なりとの評判が世間に傳はること。
- 一九)戾沓は邪曲にして我が儘勝手なること。
- (二〇)不敢爲左右袒は、どちらにも味方せぬこと。前漢書高后紀に、「周勃、北軍門に入り、令して曰く、呂氏の爲めにする者は左袒せよ、劉氏の爲めにする者は右袒せよと。軍中皆左袒す」とあるに本づく。
- (二一)莫敢擾は母が臧姑に逆はざるをいふ。
- (二二)色笑は和悦の容なり。
- (二三)汜掃は掃除すること。汜は廣き也。
- (二四)鬱積は心鬱鬱として樂しまざるなり。
- (二五)轉側は寢がへりすること。
- (二六)臨存は見舞ふこと。

退。又數日。母已聞之。怒詣王。惡言誚讓。王傲不相下。反數其惡。且言婦已出。尙屬安家何人。我自留陳氏女。非留安氏婦也。何煩強與他家事。母怒甚。而窮於詞。又見其意氣。訕訕。漸沮大哭而返。珊瑚意不自安。思他適。先是生有母姨于媪。卽沈姊也。年六十餘。子死。止一幼孫及寡媳。又嘗善視珊瑚。遂辭王。往投媪。媪詰得故。極道妹子昏暴。卽欲送之還。珊瑚力言其不可。兼囑勿言。於是與于媪居。類姑婦焉。珊瑚有兩兄。聞而憐之。欲移之歸而嫁之。珊瑚執不肯。惟從于媪紡績以自度。生自出婦。母多方爲子謀婚。而悍聲流播。遠近無與爲耦。積三四年。二成漸長。遂先爲畢姻。二成妻臧姑。驕悍戾沓。尤倍於母。母或怒以色。則臧姑怒以聲。二成又懦。不敢爲左右袒。於是母威頓減。莫敢擾。反望色笑而承迎之。猶不能得臧姑歡。臧姑役母若婢。生不敢言。惟身代母操作。滌器。汜掃之事。皆與焉。母子恆於無人處。相對飲泣。無何。母以鬱積病。委頓在牀。便溺轉側皆須生。生晝夜不得寐。兩目盡赤。呼弟代役。甫入門。臧姑輒喚去之。生於是奔告于媪。媪臨存。入門。泣且訴。訴未畢。



- (二七) 禁聲は黙する也。
- (二八) 以兩手又扉は、兩手をひろげて扉に立ちふさがる也。
- (二九) 沖出はくぐり抜けて出づること。
- (三〇) 寄語は、ことづけすること。
- (三一) 何修者。如何なる德行を修めたれば此の如き善果報あるかとの意。
- (三二) 妹已去婦。おまへが前に離縁したる嫁、即ち珊瑚をさす。
- (三三) 夫已氏は某甲と言ふが如し。臧姑をさす。

(三四) 析居は分家する也。

(三五) 析產書は財産を分配する書付。

(三六) 反躬は己の一身上の事を反省する也。

珊瑚自韓中出生大慚。禁聲欲出。珊瑚以兩手又扉。生窘急自肘下沖出而歸。亦不敢以告母。無何于媪至。母喜止之。由此媪家無日不以人來。來輒以甘旨餉媪。媪寄語寡媳。此處不餓。後勿復爾。而家中餽遺卒無少閒。媪不肯少嘗。輒留以進病者。母病亦漸瘳。媪幼孫又以母命將佳餌來問疾。沈歎曰。賢哉婦乎。姊何修者。媪曰。妹已去婦。何如。沈曰。噫。誠不至。夫已氏之甚也。然烏如甥婦賢。媪曰。婦在。汝不知勞。汝怒。婦不知怨。惡乎弗如。沈乃泣下。且告之。悔曰。珊瑚嫁也未。媪答云。不知。俟訪之。又數日。病良已。媪欲別。沈泣曰。恐姊去。我仍死耳。媪乃與生謀析二成居。二成告臧姑。臧姑不樂。語侵兄。兼及媪。生願以良田悉歸二成。臧姑乃喜。立析產書。已。媪始去。明日以車乘迎沈。沈至其家。先求見甥婦。極道甥婦德。媪曰。小女子百善。何遂無一疵。余固能容之。子即有婦如吾婦。恐亦不能享也。沈曰。嗚呼。冤哉。謂我木石鹿豕耶。具有口鼻。豈有觸香臭而不知者。媪曰。被出如珊瑚。不知念子作何語。曰。罵之耳。媪曰。誠反躬無可罵。亦惡乎而罵之。曰。瑕疵人所時有。惟其不能賢。

- (三七) 鍼褥は針仕事。裁縫を以て転釋に代ふるをいふ。
- (三八) 置不齒は相手にせざる也。
- (三九) 院は庭なり。
- (四〇) 實理は裁判を受くる也。
- (四一) 受扑責は鞭うたる也。
- (四二) 營脱は罪を免されんが爲めに種種運動すること。
- (四三) 索望良奢は巨額の賄賂を要求する也。
- (四四) 内入は納入する也。内は納に通ず。
- (四五) 責負は借金を返済せんことを催促する也。
- (四六) 署券は署名したる書付。
- (四七) 業は財産なり。
- (四八) 血産は大切なる財産の意。
- (四九) 僅自存活。やつと生計を立つるを得るに過ぎずとの意。

是以知其罵也。媪曰。當怨者不怨。則德焉者可知。當去者不去。則撫焉者可知。向之所餽遺而奉事者。固非子婦也。子婦也。沈驚曰。如何。曰。珊瑚寄此久矣。向之所供。皆渠夜績之所貽也。沈聞之。泣數行下。曰。我何以見吾婦矣。媪乃呼珊瑚。珊瑚含涕而出。伏地下。母慚痛自搗。媪力勸始止。遂爲姑媳如初。十餘日。偕歸。家中薄田數畝。不足自給。惟恃生以筆耕。婦以鍼褥。二成稱饒足。然兄不之求。弟亦不之顧也。臧姑以嫂之出也。鄙之。嫂亦惡其悍。置不齒。兄弟隔院居。臧姑時有凌虐。一家盡掩其耳。臧姑無所用虐。虐夫及婢。婢一日自經死。婢父訟臧姑。二成代婦質理。大受扑責。仍坐拘臧姑。生上下爲之營脫。卒不允。臧姑械十指。肉盡脫。官貪暴。索望良奢。二成質田貸資。如數內入。始釋歸。而債家責負日亟。不得已。悉以良田鬻於村中任翁。翁以田半屬大成所讓。要生署券。生往。翁忽自言。我安孝廉也。任某何人。敢市吾業。又顧生曰。冥間感汝夫妻孝。故使我暫歸一面。生出涕曰。父有靈。急救吾弟。曰。逆子悍婦。不足惜也。歸家速辦金。贖吾血產。生曰。母子僅自存活。安得多。



(五〇)並無は少しも無しの意。

(五一)白銀は錢さしにさしたる銀貨。

(五二)數適は其數相當る也。

(五三)並は悉くの意。

(五四)瓜分は瓜を切るが如く分つ也。

(五五)首は訴ふる也。

(五六)券は契なり。契約書、證書なり。

金曰。紫薇樹下有藏金。可以取用。欲再問之。翁已不語。少時而醒。茫不自知。生歸告母。亦未深信。臧姑已率數人發窖。坎地四五尺。止見磚石。並無所謂金者。失意而去。生聞其掘藏。戒母與妻勿往視。後知其無所獲。母竊往窺之。見磚石雜土中。遂返。珊瑚繼至。則見土內悉白銀。呼生往驗之。果然。生以先人所遺。不忍私。召二成均分之。數適得。揭取之。二各囊之而歸。二成與臧姑共驗之。啓囊則瓦礫滿中。大駭。疑二成爲兄所愚。使二成往窺兄。兄方陳金几上。與母相慶。因實告兄。生亦駭而心甚憐之。舉金而並賜之。二成乃喜。往酬債訖。甚德兄。臧姑曰。卽此益知兄詐。若非自愧於心。誰肯以瓜分者復讓人乎。二成疑信半之。次日。債主遣僕來。言所償皆僞金。將執以首官。夫妻皆失色。臧姑曰。如何哉。我固謂兄賢不。至於此。是將以殺汝也。二成懼。往哀債主。主怒不釋。二成乃券田於主。聽其自售。始得原金而歸。細視之。見斷金二錠。僅裏真金一。非葉許。中盡銅矣。臧姑因與二成謀。留其斷者。餘仍返諸兄。以觀之。且教之。言曰。屢承讓德。實所不忍。薄留二錠。以見推施之義。所

(五七)物産は財産なり。

(五八)奩は鏡匣。鏡臺なり。

(五九)付は渡すこと。

(六〇)紋は模様なり。

(六一)冥限は死期なり。

(六二)占頼は己の所有とする也。

(六三)退券は證券を返す也。

(六四)定省は朝夕、親の機嫌を伺ふこと。

(六五)孝友。友は善く兄弟を親愛するをいふ。

存物産。尙與兄等。余無庸多田也。業已棄之。贖否在兄。生不知其意。固讓之。二成辭甚決。生乃受。秤之。少五兩餘。命珊瑚質奩以滿其數。攜付債主。主疑似舊金。以剪刀斷驗之。紋色俱足。無少差謬。遂收金。與生易券。二成還金後。意其必有參差。既聞舊業已贖。大奇之。臧姑疑掘時。兄先隱其真金。忿詣兄所。責數詬厲。生乃悟反金之故。珊瑚迎而笑曰。產固在耳。何怒焉。使生出券付之。二成一夜夢父責之曰。汝不孝不弟。冥限已迫。寸土皆非。已有占頼將以奚爲。醒告臧姑。欲以田歸兄。臧嗤其愚。是時二成有兩男。長七歲。次三歲。無何。長男病痘死。臧姑懼。使二成退券於兄。言之再三。生不受。未幾。次男又死。臧姑益懼。自以券置嫂所。春將盡。田蕪穢不耕。生不得已種治之。臧姑自此改行。定省如孝子。敬嫂亦至。未半。年而母病卒。臧姑哭之慟。至。食飲不入口。向人曰。姑早死。使我不得事。是天不許我自贖也。產十胎皆不育。遂以兄子爲子。生夫妻皆壽終。生三子。舉兩進士。人以爲孝友之報云。



- (一) 五通は淫神の名。
- (二) 莫敢喘息とは、之を默視して、爲す所無きをいふ。
- (三) 典商は質屋。
- (四) 風格は容姿の美なるをいふ。
- (五) 岸然は雄傑なる貌。

- (六) 質明は天明なり。翌日朝。
- (七) 播は世間に言ひ觸らすこと。
- (八) 羞縮ははづかしがる也。
- (九) 勸酬は獻酬する也。
- (一〇) 醪酒は互に金を出し合はせて酒を買ふ也。
- (一一) 哀免は免されんことを哀訴するなり。
- (一二) 昏不知人。人事不省に陥りたるをいふ。

南有五通。猶北之有狐也。然北方狐祟。尙百計驅遣之。至於江浙五通。民家有美婦。輒被淫占。父母兄弟皆莫敢喘息。爲害尤烈。有邵弧者。吳之典商也。妻閻氏。頗風格。一夜有丈夫岸然自外入。按劍四顧。婢媼盡奔。閻欲出。丈夫橫阻之。曰。勿相畏。我五通神四郎也。我愛汝。不爲汝禍。因抱腰。如舉嬰兒置牀上。既而下牀。曰。我五日當復來。乃去。弧於門外設典肆。是夜婢奔告之。弧知其五通。不敢問。質明視妻。憊不起。心甚羞之。戒家人勿播。婦三四日始就平復。而懼其復至。婢媼不敢宿內室。悉避外舍。惟婦對燭。含愁以俟之。無何四郎偕兩人入。皆少年蘊藉。有僮列肴酒。與婦共飲。婦羞縮低頭。強之飲。亦不飲。心惕惕然。三人互相勸酬。或呼大兄。或呼三弟。飲至中夜。上座二客並起。曰。今日四郎以美人見招。會當邀二郎。五郎。醪酒爲賀。遂辭而去。四郎挽婦入幃。婦哀免昏不知人。

- (一三) 投纒は繩の如きものを以て纒を爲りて之に投するを謂ふ。
- (一四) 表弟は母かたのいとこ。

- (一五) 中は心の中なり。
- (一六) 顛は腦蓋なり。頭蓋骨。

- (一七) 剝は研る也。刀を以て之を撃つ也。きりつけること。

四郎始去。婦奄臥牀榻。不勝羞憤。思欲自盡。而投纒則帶自絕。屢試皆然。苦不得死。幸四郎不常至。約婦痊可始一來。積兩三月。一家俱不聊生。有會稽萬生者。邵之表弟。剛猛善射。一日過邵。時已暮。邵以客舍爲家人所積。遂導客宿內院。萬久不寐。聞庭中有人行聲。伏窗窺之。見一男子入婦室。疑之。捉刀而潛視之。見男子與閻氏並肩坐。肴陳几上矣。忿火中騰。奔而入。男子驚起。急覓劍。刀已中顛。顛裂而踏視之。則一小馬。大如驢。愕問婦。具道之。且曰。諸神將至。爲之奈何。萬搖手。禁勿聲。滅燭取弓矢。伏暗中。未幾有四五人。自空飛墮。萬急發一矢。首者殪。三人吼怒。拔劍搜射者。萬握刀倚扉後。寂不少動。一人入。剝頸亦殪。仍倚扉後。久之無聲。乃出叩關告邵。邵大驚。共燭之。一馬兩豕死室中。舉家相慶。猶恐二物復讎。留萬於家。烹豕烹馬而供之。味美。異於常饈。萬生之名。由是大譟。居月餘。其怪竟絕。乃辭欲去。有木商某苦要之。先是某有女未嫁。忽五通晝降。是二十餘美丈夫。言將聘作婦。委金百兩。約吉期而去。計期已迫。闔家惶懼。聞萬生名。堅請過諸其家。恐萬有難



- (二八) 僂僕は腰をかかめて禮する也。
- (二九) 捺坐は、おさへて席に就かしむる也。捺は手重く按ずる也。
- (三〇) 綵は五色の絹なり。綵を門に懸くるは、支那の婚姻の裝飾なり。

(二一) 耦は配偶者。妻をいふ。

詞隱其情不以告。盛筵既罷。妝女出拜客。年十六七。是好女子。萬錯愕不解其故。離坐僂僕某捺坐而實告之。萬初聞而驚。而生平意氣自豪。故亦不辭。至日某仍懸綵於門。使萬坐室中。日昃不至。竊喜新郎已在。誅數未幾。見簷間忽如鳥墮。則一少年盛服入。見萬反身而奔。萬追出。但見黑氣欲飛。以刀躍揮之。斷其一足。大嗥而去。俯視則巨爪大如手。不知何物。尋其血跡。入於江中。某大喜。聞萬無耦。是夕即以所備牀寢。使與女合。於是素患五通者。皆拜請一宿其家。居年餘。始攜妻而去。自是吳中止存一通。不敢公然爲害矣。

又 4

- (一) 設帳とは學者が弟子に教授するをいふ。
- (二) 孤影徬徨。ただ一人にてぶらぶらすること。
- (三) 二漏。二更なり。およそ夜の十時頃なり。
- (四) 枯寂はさびしき也。
- (五) 不畏多露。路に夜露多きことを畏れ懼らざる也。

- (六) 奔女は淫奔の女。
- (七) 喪行檢は品行の方正を失ふ也。
- (八) 横波は流し目に視る也。
- (九) 甚得雲耶霞耶。雲だの霞だのと餘計な事を言ふには及ばぬではないかとの意。
- (一〇) 小字は幼名。
- (一一) 保不败君行止。君の行動を傷み敗るが如き事は決して無きことを保證すとの意。
- (一二) 火齊は珠の名。南史に「天竺國に、火齊珠を出す。狀、雲母の如く、色、紫金の如し」とあり。

金生。字王孫。蘇州人。設帳於淮館。縉紳園中。屋宇無多。花木叢雜。夜既深。僮僕散盡。孤影徬徨。意緒良苦。一夜二漏將殘。忽有人以指彈扉。急問之。對以乞火。音類館僮。啓戶內之。則二八麗者。一婢從。諸其後。生意妖魅。窮詰甚悉。女曰。妾以君風雅之士。枯寂可憐。不畏多露。相與遣此良宵。恐言其故。妾不敢來。君亦不敢納也。生又疑爲鄰之奔女。懼喪行檢。敬謝之。女橫波一顧。生覺魂魄都迷。忽顛倒不能自主。婢已知之。便云。霞姑我且去。女頷之。既而呵之曰。去則去耳。甚得雲耶霞耶。婢既去。女笑曰。適室中無人。遂偕婢從來。無知如此。遂以小字令君聞矣。生曰。卿深細如此。故僕懼有禍機。女曰。久當自知。保不败君行止。勿憂也。上榻緩其裝束。見臂上腕釧。以條金貫。火齊。脚雙明珠。燭既滅。光照一室。生益駭。終莫測其所自至。事甫畢。婢來叩窗。女起。以釧照徑。入叢樹而去。自此



(一三)昏不見掌。暗黒にして、自分の掌をも見る能はざるなり。  
(一四)笠帯は笠のひも。

(一五)圓轉は、ころがりまはる也。圓は圓と同じ。

(一六)細述は事細かに述ぶる也。

(一七)岑寂は寂寞なり。

(一八)此癡情人とは女自ら謂ふ。

(一九)甥女は姉妹の子。めひ也。

(二〇)肺膏無不傾吐。心の中に思ふ事、語り盡さざる無しとの意。

(二一)家君は己の父をいふ。

(二二)若輩は此の如き輩。

(二三)一指は彼の一指をいふ。肌膚己の肌膚をいふ。

(二四)内入は納入なり。室の中に入る也。

(二五)宮は去勢する也。

(二六)娘子は夫人をいふ。即ち生の姪なり。

(二七)斂魂覆甌中。娘子の魂をふせたる甌の中に斂め置く也。

(二八)生人は未だ見ず知らざる人。

(二九)闇は去勢する也。

(三〇)解館は私塾を閉鎖する也。

(三一)分手は離別に臨んで也。

(三二)屬缺事は物足らず思ふこと。

(三三)捲帳は私塾を閉鎖するをいふ。

(三四)情不忍味。情として御身を欺きて隠しておくに忍びずとの意。

(三五)金龍大王。金龍山聖蹟記に「謝公緒は會稽の諸生なり、錢唐の安溪に居る。宋の謝太后の姪なり。三宮北行するや、公、苕溪に投じて死す。門人、其郷の金龍山に葬る。明の太祖、呂梁の捷に、神、靈助を顯す。遂に敕して金龍四大王に封じ、廟を黄河の上に立つ。神父、四子紀綱統緒を生む。神は季に居る、故に四大王と號す」とあり。

(三六)宿分は前生よりの因縁。

(三七)不合は、然すべからざるに然せしをいふ。

(三八)一跬歩は一足歩くにもとの意。一たび足を擧ぐるを跬と曰ふ。跬は三尺なり。再び足を擧ぐるを歩と曰ふ。歩は六尺なり。

(三九)皤然は頭髮白き也。

(四〇)白叟は白髮の老人。

(四一)駐顔は若き顔を駐めておくこと。

(四二)殷は赤黒き色。

(四三)河伯は黄河の神。

無夕不至。生於去時遙尾之。女似已覺。遽蔽其光。樹濃茂。昏不見掌而返。一日生詣河北。笠帶斷絕。風吹欲落。輒於馬上以手自按。至河。坐扁舟上。飄風墮笠。隨波竟去。意頗自失。既渡。見大風飄笠。圓轉空際。漸落。以手承之。則帶已續矣。異之。歸齋向女。細述。女不言。但微哂之。生疑女所爲。曰。卿果神人。當明相告。以祛煩惑。女曰。岑寂之中。得此癡情人。爲君破悶。妾自謂不惡。縱令妾能爲此。亦相愛耳。苦致詰難。欲見絕耶。生不敢復言。先是生養甥女。既嫁。爲五通所惑。心憂之。而未以告人。緣與女狎暱既久。肺膏無不傾吐。女曰。此等物事。家君能驅除之。顧何敢以情人之私。告諸嚴君。生苦哀求計。女沈思曰。此亦易除。但須親往。若輩皆我家奴隸。若令一指得著肌膚。則此恥西江不能濯也。生哀求無已。女曰。當即圖之。次夕至。告曰。妾爲君遣婢南下矣。婢子弱。恐不能便誅却耳。次夜方寢。婢來叩戶。女急起。內入。女問如何。答云。力不能擒。已宮之矣。笑問其狀。曰。初以爲郎家也。既到。始知其非。比至塔家。燈火已張。入見娘子坐燈下。隱几若寐。我斂魂覆甌中。少時物至。入室急

退曰。何得寓生人。審視無他。乃復入。我陽若迷。彼啓衾入。又驚曰。何得有兵氣。本不欲以穢物汚指。奈恐緩而生變。遂急捉而闔之。物驚嗥遁去。乃起啓甌。娘子若醒。而婢子行矣。生喜謝之。女與俱去。後半月餘。絕不復至。亦已絕望。歲暮。解館欲歸。女忽至。生喜逆之。曰。卿久見棄。念必何處獲罪。幸不終絕耶。女曰。終歲之好。分手未有一言。終屬缺事。聞君捲帳。故竊來一告別耳。生請偕歸。女歎曰。難言之矣。今將別。情不忍味。妾屬金龍大王之女。緣與君有宿分。故來相就。不合遣婢江南。致江湖流傳。言妾爲君闔割五通。家君聞之。以爲大恥。忿欲賜死。幸婢以身自任。怒乃稍解。杖婢以百數。妾一跬步。皆以保姆從之。投隙一至。不能盡其衷曲。奈何。言已欲別。生挽之而泣。女曰。君勿爾。後三十年。可復相聚。生曰。僕三十年矣。又三十年。皤然一老。何顏復見。女曰。不然。龍宮無白叟也。且人生壽夭。不在容貌。如求駐顏。固亦大易。乃書一方於卷頭。而去。生旋里。甥女始言其異。云。當晚若夢。覺一人捉塞盎中。既醒。則血殷牀褥。而怪絕矣。生曰。我曩禱河伯耳。羣疑始解。後生六十餘



貌猶類三十許人。一日渡河。遙見上流浮蓮葉。大如席。一麗人坐其上。近視則神女也。躍從之。人隨荷葉俱小。漸至如錢而滅。此事與邵弧一則俱明季事。不知孰前孰後。若在萬生用武之後。則吳下僅遺半通。宜其不足為害也。

黃

英

- (一) 順天は府の名。
- (二) 金陵は地名、今の江蘇省江寧縣。
- (三) 欣動は大に悦ぶ也。
- (四) 多方は色々様様としての意。營求は求めんと謀る也。
- (五) 油碧車は幕を垂れたる車。
- (六) 騷雅は風流なり。
- (七) 藝菊之法は菊を培養する法。
- (八) 河朔は河北なり。
- (九) 推簾は簾を巻き上げる也。
- (一〇) 小室三四椽。椽が僅に三四本なる小き家なをいふ。
- (一一) 不舉火は炊爨を爲さざる也。

馬子才。順天人。世好菊。至才尤甚。聞有佳種。必購之。千里不憚。一日有金陵客寓其家。自言其中表親。有一二種。為北方所無。馬欣動。即刻治裝。從容至金陵。客多方為之營求。得兩芽。裹藏如寶。歸至中途。遇一少年。跨蹇。從油碧車。丰姿灑落。漸近與語。少年自言陶姓。談言騷雅。因問馬所自來。實告之。少年曰。種無不佳。培溉在人。因與論藝菊之法。馬大悅。問將何往。答云。姊厭金陵。欲卜居於河朔耳。馬欣然曰。僕雖固貧。茅廬可以寄榻。不嫌荒陋。無煩他適。陶趨車前。向姊咨稟。車中人推簾語。乃二十許絕世美人也。顧弟言屋不厭卑。而院宜得廣。馬代諾之。遂與俱歸。第南有荒圃。僅小室三四椽。陶喜居之。日過北院。為馬治菊。菊已枯。拔根再植之。無不活。然家清貧。陶日與馬共食飲。而察其家。似不舉火。馬妻呂亦愛陶姊。不時以升斗餽郵之。陶姊小字黃英。雅善談。輒過呂所。與



- (二二) 初績は縫物を爲し又絲をつむぐなり。
- (二三) 知交は知友。
- (二四) 介は狷介なり。
- (二五) 東籬は菊ばたけをいふ。陶淵明の詩に「採菊東籬下、悠然看南山」とあるに本づく。
- (二六) 黄花は菊をいふ。
- (二七) 劣種は劣等の種類。

- (二八) 佳本は善き種類の菊をいふ。
- (二九) 數椽は上に記したる小家をさす。曠土は空地なり。
- (三〇) 舊雷は始めて開きたる花。

(三一) 詰何説は四十三月とは何の意なるかと問ふなり。

共初績<sup>(二二)</sup>。陶一日謂馬曰。君家固不豊。僕日以口腹累<sup>(二三)</sup>。知交<sup>(二四)</sup>。胡可爲常。爲今計。賣菊亦足謀生。馬素介<sup>(二五)</sup>。聞陶言。甚鄙之。曰。僕以君風流高士。當能安貧。今作是論。則以東籬<sup>(二六)</sup>爲市井。有辱黄花矣。陶笑曰。自食其力。不爲貧。販花爲業。不爲俗。人固不可苟求富。然亦不必務求貧也。馬不語。陶起而出。自是馬所棄殘枝劣種<sup>(二七)</sup>。陶悉撥拾而去。由此不復就馬寢食。招之始一至。未幾菊開。聞其門囂喧如市。怪之。過而窺焉。見市人買花者。車載肩負。道相屬也。其花皆異種。目所未睹。心厭其貪。欲與絕。而又恨其私祕<sup>(二八)</sup>。佳本<sup>(二九)</sup>。遂款其扉。將就誚讓。陶出。握手曳入。見荒庭半畝。皆菊畦<sup>(三〇)</sup>。數椽之外。無曠土。劓去者。則折別枝插補之。其蓓蕾在畦者。罔不佳妙。而細認之。皆向所拔棄也。陶入屋。出酒饌。設席畦側。曰。僕貧不能守清戒。連朝幸得微貨。頗足供醉。少間。房中呼三郎。陶諾而去。俄獻佳肴。烹飪良精。因問貴姊胡以不字。答云。時未至。問何時。曰。四十三月。又詰何説。但笑不言。盡歡始散。過宿又詣之。新插者已盈尺矣。大奇之。苦求其術。陶曰。此固非可以言傳。且君不以謀生焉。用此。又數日。門庭

(二二) 南中は南の地方。

- (二三) 厦屋は廣大なる家をいふ。
- (二四) 興作從心。思ふままに家屋を建造するを得るをいふ。
- (二五) 膏田は肥沃なる田。
- (二六) 函信は封書なり。
- (二七) 歸は嫁する也。
- (二八) 采は結納ない。
- (二九) 贅は贅増。入りむこ也。
- (三〇) 親迎禮は夫たるべき者親ら行きて妻たるべき者を迎ふる禮なり。
- (三一) 南北籍は南第と北第との帳簿也。
- (三二) 觸類は目に觸れ手に觸るる器物をいふ。
- (三三) 陳仲子は齊國の廉潔の士と稱せられし人。孟子滕文公下篇に見ゆ。
- (三四) 稽は取調ぶる也。
- (三五) 鳩工庀料は工匠を集め材料を備ふる也。

略寂。陶乃以蒲席包菊。捆載數車而去。踰歲春將半。始載南中異卉而歸。於都中設花肆。十日盡售。復歸藝菊。問之。去年買花者。留其根。次年盡變而劣。乃復購於陶。陶由此日富。一年增舍。二年起厦屋<sup>(二二)</sup>。興作從心<sup>(二四)</sup>。更不謀諸主人。漸而舊日花畦。盡爲廊舍。更買田一區。築墉四周。悉種菊。至秋載花去。春盡不歸。而馬妻病卒。意屬黃英。微使人風示之。黃英微笑。意似允許。惟專候陶歸而已。年餘陶竟不至。黃英課僕種菊。一如陶得金益合商賈。村外治膏田<sup>(二五)</sup>二十頃。甲第益壯。忽有客自東粵來。寄陶函信<sup>(二六)</sup>。發之。則囑姊歸馬。考其寄書之日。卽妻死之日。回憶園中之飲。適四十三月也。大奇之。以書示英。請問致聘何所。英辭不受采<sup>(二八)</sup>。又以故居陋。欲使就南第居。若贅焉<sup>(二九)</sup>。馬不可。擇日行親迎禮<sup>(三〇)</sup>。黃英既適馬。於壁間開扉。通南第。日過課其僕。馬恥以妻富。恆囑黃英作南北籍<sup>(三一)</sup>。以防淆亂。而家所須。黃英輒取諸南第。不半歲。家中觸類皆陶家物。馬立遣人一賈還之。戒勿復取。未浹旬。又雜之。凡數更。馬不勝煩。黃英笑曰。陳仲子母乃勞乎。馬慙不復稽<sup>(三四)</sup>。一切聽諸黃英。鳩工庀料<sup>(三五)</sup>。土木大



- (三六)業は商業をいふ。
- (三七)享用は、くらしむき。
- (三八)視息は生息する也。
- (三九)裙帯は婦人をいふ。宋の時、親王南班の婿は、號して西官と曰ひ、又之を裙帶官と謂ふ。
- (四〇)祝は禱る也。
- (四一)彭澤。陶淵明、菊を愛し、彭澤の令たり。馬子才が菊を愛するを以て陶淵明に喩ふるなり。
- (四二)揮去は、ふりまくこと。
- (四三)茅茨は、かやぶき屋根の家。
- (四四)隔宿は一日おき也。
- (四五)東食西宿。戰國策齊策に、「齊に一女有り、二家之を求む。其母、女に謂つて曰く、東せんと欲せば左祖せよ、西せんと欲せば右祖せよと。女兩祖して曰く、東家に食して西家に宿せんと欲すと。東家は富めども醜く、西家は貧しけれども美なるを以てなり」とあり。
- (四六)早は早朝なり。
- (四七)款柔佳勝は枝振りおもしろく美しき花開きたるをいふ。
- (四八)契潤は疎闊なり。
- (四九)故土は故郷なり。
- (五〇)歲杪は歲末なり。
- (五一)坐享は坐つてくらして行くこと。
- (五二)囊裝は旅行の支度。

作。馬不能禁。經數月。樓舍連互。兩第竟合爲一。不分疆界矣。然遵馬教。閉門不復業。菊而享用過於世家。馬不自安。曰。僕三十年清德。爲卿所累。今視息人間。徒依裙帶而食。真無一毫丈夫氣矣。人皆祝富。我但祝窮耳。黃英曰。妾非貪鄙。但不少致豐盈。遂令千載下人。謂淵明貧賤骨。百世不能發迹。故聊爲我家彭澤解嘲耳。然貧者願富爲難。富者求貧。固亦甚易。牀頭金。任君揮去之。妾不靳也。馬曰。捐他人之金。抑亦良醜。黃英曰。君不願富。妾亦不能貧也。無已。析君居。清者自清。濁者自濁。何害。乃於園中築茅茨。擇美婢往侍馬。馬安之。然過數日。苦念黃英。招之。不肯至。不得已。反就之。隔宿輒至。以爲常。黃英笑曰。東食西宿。廉者當不如是。馬亦自笑。無以對。遂復合居如初。會馬以事客金陵。適逢菊秋。早過花肆。見肆中盈列甚煩。款柔佳勝。心動。疑類陶製。少問主人。出果陶也。喜極。具道契闊。遂止宿。馬要之歸。陶曰。金陵吾故土。將昏於是。積有薄貲。煩寄吾姊。我歲杪當暫去。馬不聽。請之益苦。且曰。家幸充盈。但可坐享。無須復買。坐肆中。使僕代論價。廉其直。數日盡售。逼促

- (五三)從は從來なり。
- (五四)較飲は飲みくらへること。
- (五五)四漏は四更なり。夜の二時頃
- (五六)玉山傾倒は酔ひ倒れること。
- (五七)莫逆は親友と爲るをいふ。莊子大宗師篇に「子祀・子輿・子犁・子來四人相視て笑ひ、心に逆ふ莫し、遂に相與に友と爲る」とあるに本づく。
- (五八)花朝。提要録に、「唐、二月十五日を以て花朝と爲す」とあり。
- (五九)痛絶は悲痛する也。

囊裝。賃舟遂北。入門則姊已除舍。牀榻衾褥皆設。若預知弟也歸者。陶自歸。解裝課役。大修亭園。惟日與馬共棋酒。更不復結一客。爲之擇昏。辭不願。姊遣兩婢侍其寢處。居三四年。生一女。陶飲素豪。從不見其沈醉。有友人曾生。量亦無對。適過馬。馬使與陶相較飲。二人縱飲甚歡。恨相得晚。自辰以訖四漏。計各盡百壺。會爛醉如泥。沈睡座間。陶起歸寢。出門踐菊畦。玉山傾倒。委衣於側。卽地化爲菊。高如人。花十餘朵。皆大於拳。馬駭絕。告黃英。英急往。拔置地上。曰。胡醉至此。覆以衣。要馬俱去。戒勿視。既明而往。則陶臥畦邊。馬乃悟姊弟菊精也。益愛敬之。而陶自露迹。飲益放。恆自折東招會。因與莫逆。值花朝。曾來造訪。以兩僕昇藥。浸白酒一罈。約與共盡。罈將竭。二人猶未甚醉。馬潛以瓶續入之。二人又盡之。曾醉已憊。諸僕負之以去。陶臥地。又化爲菊。馬見慣不驚。如法拔之。守其旁以觀其變。久之。葉益憔悴。大懼。始告黃英。英聞駭曰。殺吾弟矣。奔視之。根株已枯。痛絶。搯其梗。埋盆中。攜入閨中。日灌溉之。馬悔恨欲絶。甚惡曾。越數日。聞曾已醉死矣。盆中花漸萌。九月既開。



六〇粉朶は白色の花の枝。

短幹粉朶<sup>六〇</sup>。嗅之有酒香。名之醉陶。澆以酒則茂。後女長成。嫁於世家。黃英終老。亦無他異。

青 蛙

神 4

(一)江は揚子江。漢は漢水、揚子江の支流。

(二)委禽は結納の取換せをすること。

(三)何得近禁鬱。晉書謝琨傳に「孝武帝、晉陵公主の爲めに壻を求め、王珣に謂つて曰く、謝琨の如くならば便ち足れりと。未だ幾ばくならざるに、袁崑、女を以て琨に妻はせんと欲す。珣曰く、卿、禁鬱に近づく勿れと。初め元帝始めて建業に鎮するや、公私管轄す。一純を得る毎に、以て美と爲し、項上の一鬱の尤、佳なるを輒ち以て帝に獻す。是に於て呼んで禁鬱(天子の御用の鬱肉の意)と爲す。故に珣以て戲と爲す」とあるに本づく。

(四)反其儀は其結納を返すをいふ。

江漢之間。俗事蛙神最虔。祠中蛙。不知幾百千萬。有大如籠者。或犯神怒。家中輒有異兆。蛙游几榻。甚或攀緣滑壁。不得墮。其狀不一。此家當凶。人則大恐。斬牲禳禱之。神喜則已。楚有薛崑生者。幼慧。美容。六七歲時。有青衣媪。至其家。自稱神使。坐致神意。願以女下嫁崑生。薛翁性朴拙。雅不欲。辭以兒幼。雖故却之。而亦未敢議昏他姓。遲數年。崑生漸長。委禽於姜氏。神告姜曰。薛崑生。吾壻也。何得近禁鬱。姜懼。反其儀。薛翁憂之。潔牲往禱。自言不敢與神相匹偶。祝已。見肴酒中。皆有巨蛆浮出。蠢然擾動。傾棄謝罪而歸。心益懼。亦姑聽之。一日崑生在途。有使者迎宣神命。苦邀移趾。不得已。從與俱往。入一朱門。樓閣華好。有叟坐堂上。類七八十歲人。崑生伏謁。叟命曳起之。賜坐案旁。少間。婢媪集視。紛紜滿側。叟顧曰。入言薛郎至矣。數婢奔去。移時一媪率女郎出。年十六七。麗絕。



- (五)倉遣は倉卒急遽なり。
- (六)授之詞は、崑生に行きて断わるべき口上を教ふる也。
- (七)朝拜は、薛翁と姑とに挨拶するをいふ。

(八)謙馴は謙遜柔順。

- (九)入門は嫁し来るをいふ。
- (一〇)鴉鳥云。鴉は悪鳥の名、梟と同じ。梟、巢に在るときは、母之に哺す。羽翼成るときは、母の眼睛を啄みて翔り去ると傳ふ。

(一一)負荊は往きて罪を謝するをいふ。史記廉頗傳に、廉頗肉袒して荊を負ひ、賓客に因りて藺相如の門に至り罪を謝すとあるに本づく。

(一二)女紅は女工なり。女の爲すべき仕事。

(一三)負氣は怒る也。

(一四)承歡は父母に事へて父母の氣に入るやうにすること。

(一五)庭訓は父の教訓。孔子嘗て獨り立つ、子伯魚趨りて庭を過ぐ、孔子教ふるに詩を學び禮を學ぶべきことを以てせしこと、論語季氏篇に見ゆ。後因つて父の教を庭訓と謂ふ。

(一六)曲護其短。理を曲げて其短所缺點を庇護する也。

(一七)盍孟相敵は夫婦相争うて離別せしをいふ。

(一八)哀は哀願する也。

(一九)修除は造作掃除なり。

(二〇)展笑は、につこりと笑ふ也。

(二一)無間言は爭論非毀の語無き也。

無儔。叟指曰。此小女十娘。自謂與君可稱佳偶。君家尊乃以異類見拒。此自百年事。父母止主其半。是在君耳。崑生目注十娘。心愛好之。默然不言。媪曰。我固知郎意良佳。請先歸。當即送十娘往也。崑生曰。諾。趨告翁。翁倉遣無所爲計。乃授之詞。使反謝之。崑生不肯行。方請讓間。輿已在門。青衣成羣。而十娘入矣。上堂朝拜。翁姑見之皆喜。即夕合卺。琴瑟甚諧。由此神翁神媪。時降其家。視其衣亦爲喜。白爲財。必驗。以故家日興。自昏於神。門堂藩溷皆蛙。人無敢詬蹴之。惟崑生少年任性。喜則忘怒。怒則踐斃。不甚愛惜。十娘雖謙馴。但善怒。頗不善崑生所爲。而崑生不以十娘故。斂抑之。十娘語侵崑生。崑生怒曰。豈以汝家翁媪能禍人耶。丈夫何畏蛙也。十娘甚諱言蛙。聞之甚甚。曰。自妾入門。爲汝家田增粟。賈益價。亦復不少。今老幼皆已溫飽。遂如鴉鳥生翼。欲啄母睛耶。崑生益憤曰。吾正嫌所增污穢。不堪貽子孫。請不如早別。遂逐十娘。翁媪既聞之。十娘已去。呵崑生。使急往追復之。崑生盛氣不屈。至夜母子俱病。鬱悶不食。翁懼。負荊於祠。詞義殷切。過三日。病尋愈。十娘亦自

至。夫妻懽好如初。十娘日輒凝妝坐。不操女紅。崑生衣履一委諸母。母一日忿曰。兒既娶。仍累媪。人家婦事姑。吾家姑事婦。十娘適聞之。負氣登堂曰。兒婦朝侍食。暮問寢。事姑者。其道如何。所短者不能。客傭錢。自作苦耳。母無言。漸沮自哭。崑生入。見母涕痕。詰得故。怒責十娘。十娘執辯。不相屈。崑生曰。娶妻不能承歡。不如勿有。便觸老蛙。怒。不過橫災死耳。復出十娘。十娘出門。逕去。次日。居舍災。延燒數屋。几案牀榻。悉爲煨燼。崑生怒。詣祠責數曰。養女不能奉翁姑。略無庭訓。而曲護其短。神者至公。有教人畏婦者耶。且盍孟相敵。皆臣所爲。無所涉於父母。刀鋸斧鉞。即加臣身。如其不然。我亦焚汝居室。聊以相報。言已。負薪殿下。爇火欲舉。居人集而哀之。始憤而歸。父母聞之。大懼失色。至夜。神示夢於近村。使爲壻家營宅。及明。齋材鳩工。共爲崑生建造。辭之不止。日數百人相屬於道。不數日。第舍一新。牀幕器具悉備焉。修除甫竟。十娘已至。登堂謝過。言詞溫婉。轉身向崑生展笑。舉家變怨爲喜。自此十娘性益和。居二年。無間言。十娘最惡蛇。崑生戲函小蛇。給使啓之。十娘色



(二二)惡相抵は惡口を言ひ合ふこと。  
(二三)今番は此度なり。

(二四)歴相はつきりに徧く視ること。  
相は視る也。

(二五)魚軒は魚皮を以て飾りたる車。諸侯の夫人の乗る車なり。魚軒を候つとは、十娘が嫁し來るを待つをいふ。

(二六)昏憤中は昏睡中なり。

(二七)斷絶は離縁するをいふ。

(二八)另離は別の家に嫁する也。

(二九)采幣は結納なり。

(三〇)卜吉は婚禮すべき日をいふ。

(三一)反璧は贈物を返すこと。ここにては結納を返すをいふ。左傳僖公二十三年に「乃ち盤飧を饋り璧を置く。公子、飧を受け璧を反す」とあるに本づく。

(三二)凝婢とは十娘をさす。

(三三)儂薄は輕薄なり。

(三四)臨辱は産辱に就く也。

變。詬崑生。崑生亦轉笑。生噴。<sup>(二二)</sup>惡相抵。十娘曰。<sup>(二三)</sup>今番不待相迫。遂請從此絕。遂出門去。薛翁大恐。杖崑生。請罪於神。幸不禍之。亦寂無音。積有年餘。崑生念十娘。頗自悔。竊詣神所。哀十娘。迄無聲應。未幾聞神以十娘字袁氏。中心失望。因亦求昏他族。而歷相數家。並無如十娘者。於是益思十娘。往探袁氏。則已墜壁滌庭。候魚軒矣。<sup>(二五)</sup>心愧憤不能自已。廢食成疾。父母憂皇。不知所處。忽昏憤中。有人撫之曰。大丈夫頻欲斷絶。又作此態。開目則十娘也。喜極躍起曰。卿何來。十娘曰。以輕薄人相待之禮。止宜從父母。另醮而去。固久受袁家采幣。妾千思萬思而不忍也。卜吉已在今夕。父又無顏。反璧。妾親攜而置之矣。適出門。父走送曰。癡婢。不聽吾言。後受薛家凌虐。縱死亦勿歸也。崑生感其義。爲之流涕。家人皆喜。奔告翁媪。媪聞之。不待往朝。奔入子舍。執手鳴泣。由此崑生亦老成。不作惡謔。於是情好益篤。十娘曰。妾向以君儂薄。未必遂能相白首。故不敢留孽根於人世。今已靡他。妾將生子。居無何。神翁神媪。著朱袍。降臨其家。次日十娘臨辱。一舉兩男。由此往來無間。居民或犯神怒。輒先求崑生。乃使婦女輩。盛妝入閨。朝拜十娘。十娘笑則解。薛氏苗裔甚繁。人名之薛蛙子家。近人不敢呼。遠人呼之。



- (一) 捷南宮。會試即禮部之試驗に及第するをいふ。唐の開元中、禮部を南宮と謂ふ。
- (二) 新貴とは新に會試に及第して官に任命せられたる者をいふ。
- (三) 星者は人の生年月日を以て天の星を按じ其運數を推す者なり。
- (四) 簪は扇なり。
- (五) 有麟玉分否。麟衣玉帶を服する大臣宰相と爲るべき運命なりや否や。
- (六) 僂蹇は傲慢なる貌。
- (七) 無年丈は張翁と言ふが如し。年丈は長老の稱。南撫は南方の巡撫をいふるべし。
- (八) 參游は參軍をいふなるべし。
- (九) 老蒼頭は、老奴なり。小千把は千戶(衛所の官)をいふなるべし。
- (一〇) 中使は天子の私使。
- (一一) 得意は意氣揚揚たる也。
- (一二) 三品以下云云。三品以下の官は會が意のままに任免する事を許す也。
- (一三) 海物は山海の珍らしき産物の意。
- (一四) 足恭は謙恭に過ぐる也。むやみに敬禮すること。

福建曾孝廉高捷南宮時與二三新貴遨遊郊郭偶聞毘盧禪院寓一星者因並騎往詰問卜入室而坐星者見其意氣佞諛之會搖箠微笑便問有麟玉分否星者正容許二十年太平宰相曾大悅氣益高值小雨乃與遊侶避雨僧舍舍中一老僧深目高鼻坐蒲團上僂蹇不爲禮衆一舉手登榻自話羣以宰相相賀曾心氣殊高指同遊曰某爲宰相時推張年丈作南撫家中表爲參游我家老蒼頭亦得小千把於願足矣一坐大笑俄聞門外雨益傾注曾倦伏榻間忽見有二中使費天子手詔召曾太師決國計曾得意疾趨入朝天子前席溫語良久命三品而下聽其黜陟賜麟玉名馬曾被服稽首以出入家則非舊所居第繪棟雕椽窮極壯麗自亦不解何以遽至如此然髻微呼則應諾雷動俄而公卿贈海物僂僂足恭者疊出其門六卿來倒屣而迎侍郎輩揖與語下

- (一五) 領は其頭を指す也。うなづくこと。
- (一六) 晉撫は古の晉國印ち今の山西省舊太原府の巡撫なるべし。
- (一七) 科頭は冠せざる也。休沐は休暇なり。
- (一八) 周濟は救濟なり。
- (一九) 置身青雲は我が身の榮達したるをいふ。
- (二〇) 蹉跎仕路は官途の昇進甚だ意の如くならざるをいふ。
- (二一) 兪旨は諭旨と同じ。天子、臣下に施すの文なり。
- (二二) 太僕は官名。
- (二三) 睡眊は目を擧げて相忤ふ也。にらみつけること。
- (二四) 給諫は官名、給事中なり。
- (二五) 彈章は彈劾の上書。
- (二六) 京尹は京兆尹。
- (二七) 接第連阡者は近隣の者をいふ。
- (二八) 沃産は肥沃の地より生じたる産物。上等の産物をいふ。
- (二九) 殂謝は死する也。
- (三〇) 媵御は妾なり。
- (三一) 綿薄は材力の弱きを言ふ。漢書嚴助傳に「越人は綿力薄材陸戰する能はず」とあるに本づく。
- (三二) 幹僕は事を幹する僕。執事の如き者。
- (三三) 腹非は口には言はざれども腹の中に非議する也。

此者領之而已晉撫餽女樂十人皆是好女子其尤者爲媚媚爲仙仙二人尤蒙寵顧科頭休沐日事聲歌一日念微時嘗得邑紳王子良周濟我今置身青雲渠尙蹉跎仕路何不一引手早旦一疏薦爲諫議即奉兪旨立行擢用又念郭太僕會睡眊我即傳呂給諫及侍御陳昌等授以意旨越日彈章交至奉旨削職以去恩怨了了頗快心意偶出郊衢醉人適觸鹵簿即遣人縛付京尹立斃杖下接第連阡者皆畏勢獻沃産自此富可埒國無何而媚媚仙仙以次殂謝朝夕遐想忽憶曩年見東家女絕美每思購充媵御輒以綿薄違宿願今日幸可適志乃使幹僕數輩強納貲於其家俄頃籐輿昇至則較昔之望見時尤豔絕也自顧生平於願斯足又逾年朝士竊竊似有腹非之者然各爲立仗馬曾亦高情盛氣不以置懷有龍圖學士包上疏其略曰竊以曾某原一飲賭無賴市井小人一言之合榮膺聖眷父紫兒朱恩寵爲極不思捐軀糜頂以報萬一反忤胸臆擅作威福可死之罪擢髮難數朝廷名器居爲奇貨量缺肥瘠爲價重輕因而公卿將士盡奔走於門下



(三四)立仗馬。人が事を畏れて敢て言はざるに喩ふるなり。唐書に李林甫、相位に居ること十九年、諫官、皆、祿養の資を持し、敢て正言する者無し。杜璩上書して政事を言ふ。斥けて下邳の令と爲す。因つて語を以て其餘を動かして曰く、君等獨り仗馬を立つるを見ずや。終日、聲無くして、三品の芻品に飲く。一たび鳴けば則ち之を黜くとあるに本づく。唐の制、殿下の兵衛を仗と曰ふ。

(三五)龍圖學士包。宋の包拯、龍圖閣學士に除せられ、擢んでられて開封府に知たり。朝に立ちて剛毅なり。貴戚宦官、之が爲めに手を斂む。

(三六)父紫兒朱。父は紫衣、兒は朱衣を服す。父子共に顯貴なるをいふ。

(三七)威福は賞罰なり。

(三八)擢髮難數は頭髮の數よりも多しとの意。史記范雎傳に「雎、須臾に謂つて曰く、汝の罪幾くか有ると。曰く買の髮を擢きて以て買の罪を數ふるとも、尙ほ未だ足らず」とあるに本づく。

(三九)居爲奇貨。酒友の註參照。

(四〇)缺は官職の空位なり。缺員ある官職の收入の多少によりて、之を任用する價即ち賄賂を輕重する也。

(四一)估計は其價值或は需用の數を量る也。黃緣は他人に攀附して以て進まんとを求むる也。

(四二)負販は肩に貨物を負うて販賣する商人。

估計黃緣。儼如負販。仰息望塵。不可算數。或有傑士賢臣。不肯阿附。輕則置之間散。重則褫以編氓。甚且一臂不袒。輒逐鹿馬之奸。遠竄豺狼之地。朝士爲之寒心。朝廷因而孤立。又且平民膏腴。任肆貪食。良家女子。強委禽妝。疹氣冤氛。暗無天日。奴僕一到。則守令承顏。書函一投。則司院枉法。或有厮養之兒。瓜葛之親。出則乘傳。風行雷動。地方之供給稍遲。馬上之鞭撻立至。荼毒人民。奴隸官府。扈從所臨。野無青草。而某方炎炎赫赫。怙寵無悔。召對方承於闕下。萋菲輒進於君前。委蛇才退於自公。笙歌已起於後苑。聲色狗馬。晝夜荒淫。國計民生。罔存念慮。世上甯有此宰相乎。內外駭訛。人情洶洶。若不急加斧鑕之誅。勢必釀成操莽之禍。臣夙夜祇懼。不敢甯處。冒死列款。仰達宸聽。伏祈斷奸佞之頭。籍貪冒之產。上回天怒。下快輿情。如果臣言虛謬。刀鋸鼎鑊。即加臣身。云云。疏上。會聞之。氣魄悚駭。如飲冰水。幸而皇上優容。留中不發。繼而科道九卿。交章劾奏。即昔之拜門牆稱假父者。亦反顏相向。奉旨籍家。充雲南軍。子任平陽太守。已差員前往提問。會方聞旨驚惶。

(四三)仰息は嬰寧の註參照。望塵は顯貴を迎候し車塵を望みて拜する也。石崇、潘岳と與に、買讎に諂事し、廣成君、出づる毎に、崇、車を降り、路左に塵を望みて拜すること、晉書に見ゆ。

(四四)間散は重要ならざる閑職。

(四五)褫以編氓は官職を奪ひて庶民と爲す也。

(四六)一臂不袒。其の言ふ所に賛同せざるをいふ。珊瑚の註參照。

(四七)鹿馬。史記秦始皇紀に「趙高、亂を作さんと欲し、群臣の聽かざらんことを恐れ、乃ち先づ驗を設け、鹿を持ちて二世に獻じて曰く、馬なりと。二世笑つて曰く、丞相誤れるや」と。左右に問ふ、或は默し或は馬と言ひ、以て趙高に阿順す。或は鹿と言ふ者あり。高因つて陰に鹿と言ふ者に中つるに法を以てす。後、群臣、皆、高を畏るゝとあり。

(四八)強委禽妝は強ひて結納を與へて之を娶る也。禽は雁なり。納采即ち結納には雁を用ふ。妝は化粧料即ち支度金をいふ。

(四九)疹氣は惡氣なり。

(五〇)守令は郡守縣令。

(五一)司院は刑法を掌る官署。

(五二)瓜葛之親は疏遠なる親類。傳は驛傳の車馬。

(五三)炎炎赫赫は威勢の盛んなる貌。

旋有武士數十人。帶劍操戈。直抵內寢。褫其衣冠。與妻並繫。俄見數夫運貨於庭。金銀錢鈔。以數百萬。珠翠瑠玉。數百斛。幄幕簾榻之屬。又數千事。以至兒穉女媠。遺墜庭階。會一一視之。酸心刺目。又俄而一人。掠美妾出。披髮嬌啼。玉容無主。悲火燒心。含憤不敢言。俄而樓閣倉庫。並已封誌。立叱會出。監者牽挽羅曳而出。夫妻吞聲就道。求一下駟劣車。少作代步。亦不可得。十里外。妻足弱。欲傾跌。會時以一手相扳引。又十餘里。已亦困憊。歛見高山。直插霄漢。自憂不能登越。時挽妻相對泣。而監者矚目來窺。不容稍停駐。又顧斜日已墜。無可投止。不得已。參差蹙蹙而行。比至山腰。妻力已盡。泣坐路隅。會亦憊止。任監者叱罵。忽聞百聲齊譟。有羣盜各操利刃。跳梁而前。監者大駭。逸去。會長跪言。孤身遠謫。囊中無長物。哀求宥免。羣盜裂眦宣言。我輩皆被害冤民。祇乞得佞賊頭。他無索取。會怒叱曰。我雖待罪。乃朝廷命官。賊子何敢爾。賊亦怒以巨斧揮會項。覺頭墜地作聲。會方駭疑。即有二鬼。來反接其手。驅之。行踰數刻。入一都會。頃之。觀宮殿。殿上一醜形王者。憑几決



- (五四) 妻非。非は當に妻に作るべし。妻は文章相錯はる也。人を讒して罪に陥るるをいふ。試經小雅に「妻分妻分、成是貝錦」とあるに本づく。讒人、過を集めて以て罪を成すこと、猶ほ文を集めて以て錦を成すが如きを言ふ。
- (五五) 委蛇。詩經召南に「退食自公、委蛇委蛇」とあるに本づく。委蛇は自得の貌。
- (五六) 操莽は魏の曹操、漢の王莽。
- (五七) 列款は個條書きにして陳述する也。
- (五八) 籍貪冒之産は貪欲非道にして聚めたる財産を没收する也。
- (五九) 輿情は衆情なり。
- (六〇) 留中は宮中に留め置く也。
- (六一) 科道。舊制に、都察院衙門に吏戸禮兵刑工六科の給事中及び京畿遼瀋等各道の監察御史を置き、統べて科道と稱す。九卿は時代によりて異なり。明には六部尚書、都察院都御史、通政司使、大理寺卿を以て九卿と爲す。此一段、夢中の事なるを以て時代錯雜して明かならず。
- (六二) 交章は交々上書する也。
- (六三) 籍家は家を没收する也。
- (六四) 提問は取調べ吟味する也。
- (六五) 鈔は紙幣。
- (六六) 酸心刺目は心を傷ましめ目を痛ましむる也。
- (六七) 封誌は封印せらるる也。
- (六八) 羅曳は薄き絹織物の裾。

罪福。曾前匍伏請命。王者閱卷。纔數行。即震怒曰。此欺君誤國之罪。宜置油鼎。萬鬼羣和。聲如雷霆。即有巨鬼。摔至墀下。見鼎高七尺已來。四圍熾炭。鼎足盡紅。曾殼骸哀啼。竄跡無路。鬼以左手抓髮。右手握踝。拋置鼎中。覺塊然一身。隨油波而上下。皮肉焦灼。痛徹於心。沸油入口。煎烹肺腑。念欲速死。而萬計不能得。約食時。鬼方以巨叉取曾出。復置堂下。王又檢冊籍。怒曰。倚勢凌人。合受刀山獄。鬼又摔去。見一山。不甚廣闊。而峻削壁立。利刃縱橫。亂如密筍。先有數人。胃腸刺腹於其上。呼號之聲。慘絕心目。鬼促曾上。曾大哭退縮。鬼以毒錐刺腦。曾負痛乞憐。鬼怒。捉曾起。望空力擲。覺身在雲霄之上。暈然一落。刃交於胸。痛苦不可言狀。又移時。身軀重贅。刀孔漸闊。忽焉脫落。四支螻屈。鬼又逐以見王。王命會計生平賣爵鬻名。枉法霸産。所得金錢幾何。即有髯鬚人。持籌握算。曰。三百二十一萬。王曰。彼既積來。還令飲去。少間。取金錢堆階上。如邱陵。漸入鐵釜。鎔以烈火。鬼使數輩。更以杓灌其口。流頤則皮膚臭裂。入喉則臟腑騰沸。生時患此物之少。是時患此物之多也。

- 六九) 代步は車馬に乗りて以て歩行に代ふる也。
- (七〇) 扳引。扳は攀と同じ、挽く也。
- (七一) 直指霄漢は高く空中に聳ゆる也。
- (七二) 投止は足を託する也。後漢書張儉傳に「儉、亡命するを得、困迫遁走し、門を望みて投止す」とあり。
- (七三) 蹙蹙は歩行に艱む貌。蹙をひきながら歩くこと。
- (七四) 長物は餘物なり。
- (七五) 反接は兩手を背後に縛る也。
- (七六) 墮下は階下なり。
- (七七) 殼骸は恐懼する貌。
- (七八) 密筍は密生したる筍。
- (七九) 暈然は目眩む也。
- (八〇) 重贅は重き贅物の意。
- (八一) 螻屈は尺取蟲の如く屈む也。
- (八二) 會計は計算する也。
- (八三) 霸産は權勢を以て人の財産を強奪する也。
- (八四) 押は押送する也。
- (八五) 由旬は天竺の里程、或は四十里と言ひ、或は六里と言ふ。
- (八六) 耿は明なり。
- (八七) 懸鶉は敗れたる衣服。敗絮は敗れたる綿。
- (八八) 拓鉢は托鉢なり。乞食するをいふ。
- (八九) 輓轆然は空腹にして腹の鳴る貌。
- (九〇) 家室は正夫人。下文の嫡婦と同じ。顧秀才の妻をいふ。
- (九一) 囊括は囊に入れて括る也。
- (九二) 匍伏被底。夜具の中に圓く屈まりて隠るる也。

半日方盡。王者令押去甘州爲女。行數步。見架上鐵梁圍可數尺。縮一大輪。其大不知幾百由旬。餓生五綵光耿。雲霄。鬼撻使登輪。方合眼躍登。則輪隨足轉。似覺傾墜。遍體生涼。開眸自顧。身已嬰兒。而又女也。視其父母。則懸鶉敗絮。土室之中。瓢杖猶存。心知爲乞人子。日隨乞兒拓鉢。腹輓輓然。常不得一飽。著敗衣。風常刺骨。十四歲。嘗與顧秀才。備媵妾。衣食粗足自給。而家室悍甚。日以鞭箠從事。輒以赤鐵烙胸乳。幸而良人頗憐愛。稍自寬慰。東鄰惡少年。忽踰垣來逼與私。乃自念前身惡孽。已被鬼責。今那得復爾。於是大聲疾呼。良人與嫡婦盡起。惡少年始竄去。居無何。秀才宿諸其室。枕上喋喋。方自訴冤苦。忽震厲一聲。室門大闢。有兩賊持刀入。竟決秀才首。囊括衣物。團伏被底。不敢復作聲。既而賊去。乃喊奔嫡室。嫡大驚。相與泣驗。遂疑妾以奸夫殺良人。因以狀白刺史。嚴鞫。竟以酷刑定罪。案依律凌遲處死。繫赴刑所。胸中冤氣扼塞。距踊聲屈。覺九幽十八獄無此黑黯也。正悲號間。聞遊者呼曰。兄夢魘耶。豁然而悟。見老僧猶跏趺座上。同侶競相謂曰。日暮腹枵。



- (九三) 嚴鞠は嚴しく訊問する也。  
 (九四) 凌遲は極刑なり。先づ其支體を斷絶し、次に其吭を絶つなり。  
 (九五) 聲屈は無實の罪なることを聲言する也。  
 (九六) 九幽十八獄は西遊記中に載する所の地獄なり。  
 (九七) 腹枵は空腹なり。  
 (九八) 慘淡は、しなれたる貌。  
 (九九) 青蓮は青蓮花。印度に産す、梵語に優鉢羅と曰ふ。

何久酣睡、曾乃慘淡而起。僧微笑曰。宰相之占驗否。曾益驚異。拜而請教。僧曰。修德行仁。火炕中有青蓮也。山僧何知焉。曾勝氣而來。不覺喪氣而返。臺閣之想。由此淡焉。入山不知所終。

連

城

- (一) 晉寧は縣の名。  
 (二) 家口淹滯。邑宰の家族、他郷に滯留して、郷に歸る能はざるなり。  
 (三) 嬌愛は愛憐する也。女兒を寵愛するに用ふ。  
 (四) 慵鬟は髪を梳るにものうき也。ほつれ毛ある也。綠婆娑は髪の色を美しくなむ。  
 (五) 早は早朝。蘭窗は美人の居室の窓なり。  
 (六) 刺鴛鴦。江湖紀事に、宋の時、潮州の一富人、江上に行き、二人の美貌を見る。曰く、一は兄、一は妹、雙生なりと。因つて携へて以て歸る。兄は能く魚を捕へ、妹は専ら鴛鴦を刺す。富人、之を犯さんと欲す。從はず。詩を壁に題して曰く、終日刺鴛鴦。懶把蛾眉掃。且歸水雲鄉。百年可借老と。雙鴛鴦に化して飛び去る一とあり。  
 (七) 雙蛾は美人の眉なり。蹙はしむる也。  
 (八) 挑繡は刺繡なり。工は巧なり。  
 (九) 織錦。晉女列女傳に、竇滔の妻蘇氏は始平の人なり、名は蕙、字は若蘭、滔、苻堅の時、秦州の刺史と爲り、

喬生。晉甯人。少負才名。年二十餘。有肝膽。與顧生善。顧卒時。卹其妻子。邑宰以文相契重。宰終於任。家口淹滯。不能歸。生破產扶柩。往返二千餘里。以故士林益重之。而家由此日替。史孝廉有女。字連城。工刺繡。知書。父嬌愛之。出所刺倦繡圖。徵少年題詠。意在擇婿。生獻詩云。慵鬟高髻綠婆娑。早向蘭窗繡碧荷。刺到鴛鴦魂欲斷。暗停針線蹙雙蛾。又贊挑繡之工云。繡線挑來似寫生。幅中花鳥自天成。當年織錦非長技。倖把廻文感聖明。女得詩喜。對父稱賞。父貧之。女逢人輒稱道。又遣媪嬌父命。贈金以助燈火。生歎曰。連城我知己也。傾懷結想。如渴思啗。無何。女許字於磁賈之子王化成。生始絕望。然夢魂中猶佩戴之也。未幾女病瘵。沈痼不起。有西域頭陀。自謂能療。但須男子膺肉一錢。搗合藥屑。史使人詣王家告。婿笑曰。癡老翁。欲剗我心頭肉耶。使返史怒。言於人曰。有



流沙に徒さる。蘇氏、之を思ひ、錦  
か織り、文を廻らし、旋圖詩を爲り  
以て滔に贈る。宛轉循環して之を讀  
む、詞甚だ凄惋なり、凡そ八百四十  
字とあり。廻文は廻轉循環して讀  
むべき詩なり。

- (一〇) 許字は許嫁なり。
- (一一) 鹽賈は鹽商。
- (一二) 頭陀は行脚僧。
- (一三) 膾肉は胸の肉。
- (一四) 泉下物は死者をいふ。
- (一五) 士爲知己者死。前漢書司馬遷傳に「士は己を知る者の爲めに死し、女は己を悦ぶ者の爲めに容づくる」とあり。
- (一六) 矢は誓ふ也。

(一七) 吉期は婚禮の期日をいふ。

(一八) 解署は官署なり。

(一九) 典牘は書記の官たるをいふ。

能割肉者。妻之。生聞而往。自出白刃。刳膺授僧。血濡袍袴。僧敷藥  
始止。合藥三丸。三日服盡。疾若失。史將踐其言。先告王。王怒。忿欲  
訟。官吏乃設筵招生。以千金列几上。曰。重負大德。請以相報。因具  
白背盟之由。生佛然曰。僕所以不愛膺肉者。聊以報知己耳。豈貨  
肉哉。拂袖而歸。女聞之。意良不忍。託媪慰諭之。且云。以彼才華。當  
不久落。天下何患無佳人。我夢不祥。三年必死。不必與人爭此。泉  
下物也。生告媪曰。士爲知己者死。不以色也。誠恐連城未必真知  
我。但得真知我。不諧何害。媪代女郎矢誠自剖。生曰。果爾。相逢時。  
當爲我一笑。死無憾。媪既去。踰數日。生偶出。遇女自叔氏歸。睨之。  
女秋波轉顧。啓齒嫣然。生大喜曰。連城真知我者。會王氏來議。吉  
期。女前症又作。數月尋卒。生往臨弔。一痛而絕。史昇送其家。生自  
知已死。亦無所戚。出村去。猶冀一見連城。遙望西北一道。行人連  
緒如蟻。因亦混身雜迹其中。俄頃。入一麻署。值顧生。驚問君何得  
來。即把手將送令歸。生太息。言心事殊未了。顧曰。僕在此典牘。頗  
得委任。倘可効力。不惜也。生問連城。顧即導生。歷多所。見連城與

一白衣女郎。泪睫慘黛。藉坐廊隅。見生至。驟起似喜。略問所來。生  
曰。卿死。僕何敢生。連城泣曰。如此負義之人。尙不吐棄之。身殉何  
爲。然已不能許君今生。願矢來世耳。生告顧曰。有事君自去。僕樂  
死不願生矣。但煩稽連城。託生何里。行與俱去耳。顧諾而去。白衣  
女郎問生何人。連城爲緬述之。女郎聞之。若不勝悲。連城告生曰。  
此妾同姓。小字賓娘。長沙史太守女。一路同來。遂相憐愛。生睨之。  
意態憐人。方欲研問。而顧已返。向生曰。我爲君平章已確。即令娘  
子從君返魂。好否。兩人皆喜。方將拜別。賓娘大哭曰。姊去。我安歸。  
乞垂憐救。我爲姊捧悅耳。連城悽然。無所爲計。轉謀生。生又哀顧。  
顧難之。峻辭以爲不可。生固強之。乃曰。試妄爲之。去食頃而返。搖  
手曰。何如。誠萬分不能爲力矣。賓娘聞之。宛轉嬌啼。惟依連城肘  
下。恐其即去。慘怛無術。相對默默。而賭其愁顏戚容。使人肺腑酸  
柔。顧生憤然曰。請攜賓娘去。脫有愆尤。小生拚身受之。賓娘乃喜。  
從生出。生憂其道遠無侶。賓娘曰。妾從君去。不願歸也。生曰。卿太  
癡矣。不歸何以得活。他日至湖南。勿復走避。爲幸多矣。適有兩媪。

- (二〇) 但煩稽連城云。ただ御手敷を懸  
けたきは、連城が此後何里に生るべ  
きかを調べ下され、そして自分も行  
く行く一處に行くやうにしてもらひ  
たしとの意。
- (二一) 平章は籌畫處理する也。
- (二二) 悅は佩巾即ち今の手帕なり。捧悅  
は侍婢と爲るをいふ。
- (二三) 哀は哀願する也。



(二四)牒は官文書、即ち冥官の文書をいふ。

攝牒赴長沙。生囑之。賓娘泣別而去。途中。連城行蹇緩。里餘輒一息。凡十餘息。始見里門。連城曰。重生後。懼有翻覆。請索妾骸骨來。妾以君家生。當無悔也。生然之。偕歸生家。女惕惕若不能步。生佇待之。女曰。妾至此。四肢搖搖。似無所主。志恐不遂。尚宜審謀。不然。生後何能自由。相將入側廂中。嘿定少時。連城笑曰。君憎妾耶。生驚問其故。赧然曰。恐事不諧。重負君矣。請先以魂報也。生喜。極盡歡戀。因徘徊不敢遽出。客廂中者三日。連城曰。諺有之。醜婦總須見姑嫜。戚戚於此。終非久計。乃促生入。纔至靈寢。豁然頓蘇。家人驚異。進以湯水。生乃使人要史來。請得連城之尸。自言能活之。史喜從其言。方昇入室。視之。已甦。告父曰。兒已委身喬郎。更無歸理。如有變動。但仍一死。史歸。遣婢往役給奉。王聞。具詞申理。官受賂判歸王。生憤懣欲死。亦無奈之。連城至王家。忿不飲食。惟乞速死。室無人。則帶懸梁上。越日。益憊。殆將奄逝。王懼。送歸史。史復昇歸生。王知之。亦無如何。遂安焉。連城起。每念賓娘。欲遣信探之。以道遠。而艱於往。一日。家人入白門。有車馬。夫婦出視。則賓娘已至。

(二五)醜婦云。どんな御嫁でも皆舅姑さんには非とも御目に懸らねばならぬとの意。

(二六)具詞申理。官に訴へて裁判を仰ぐ也。

(二七)信は使なり。

庭中矣。相見悲喜。太守親詣送女。生延入。太守曰。小女子賴君復生。誓不他適。今從其志。生叩謝如禮。孝廉亦至。敍宗好焉。生名年字大年。



汪士秀

- (一)望月は十五夜の月。
- (二)澄江如練。謝朓の詩に「澄江淨如練」とあり。
- (三)紛陳は數多く陳列する也。
- (四)峨峨然は盛壯なる貌。
- (五)廣利王は南海の神。唐の天寶十年正月、東海を封じて廣德公と爲し、南海を廣利公と爲し、西海を廣潤公と爲し、北海を廣澤公と爲す。宋の眞宗康定元年、詔して東海を淵聖廣德王と爲し、南海を洪聖廣利王と爲し、西海を通聖廣潤王と爲し、北海を沖聖廣澤王と爲す。梨花島に宴するとは未だ詳ならず。
- (六)浮白は人を罰して酒を飲ます也。罰杯なり。

汪士秀。廬州人。剛勇有力。能舉石春。父子善蹴鞠。父四十餘。過錢塘。溺焉。積八九年。汪以故詣湖南。夜泊洞庭。時望月東升。澄江如練。方眺矚間。忽有五人自湖中出。攜大席。平鋪水面。略可半畝。紛陳酒饌。饌器磨觸作響。然聲溫厚。不類陶瓦。已而三人踐席坐。二人侍飲。坐者一衣黃。二衣白。頭上巾皆皂色。峨峨然下連肩背。制絕奇古。而月色微茫。不甚可晰。侍者俱黑褐衣。其一似童。其一似叟也。但聞黃衣人曰。今夜月色大佳。足供快飲。白衣者曰。此夕風景。大似廣利王宴梨花島時。三人互勸。引酌浮白。但語略小。即不可聞。舟人隱伏。不敢動息。汪細審侍者。叟酷類父。而聽其言。非父聲。二漏將殘。忽一人曰。趁此月明。宜一擊毬爲樂。即見童沒水中。取一圓出。大可盈抱。中如水銀滿貯。表裏通明。坐者盡起。黃衣人呼叟共蹴之。蹴起丈餘。光搖搖射人眼。俄而確然遠起。飛墮舟中。

- (七)技癢は技有りて自ら忍ぶ能はざるなり。自分の技倆をふるひたくてたまらぬこと。
- (八)生人は見ず知らずの人。
- (九)流星拐は未だ詳ならず。蓋し蹴鞠の法の名にして、鞠の飛ぶこと流星の如きをいふなるべし。
- (一〇)小烏衣は上に見えたる黒褐色の衣を服したる僮をいふ。
- (一一)椎喫は椎を以て撃つ也。
- (一二)悽斷は甚だ悲哀する也。
- (一三)碎碎は水の奔注する聲。
- (一四)浪接星斗は浪の高大なるをいふ。
- (一五)簸盪は大に動搖する也。
- (一六)踴圓は圓毬を蹴るなり。
- (一七)物は妖物をいふ。錢塘君は錢塘の龍神。
- (一八)擊棹は舟を進むること。
- (一九)魚翅は魚のひれ。

汪技癢。極力踏去。覺異常輕軟。踏猛似破。騰尋丈。中有漏光。下射如虹。蚩然疾落。又如經天之慧。直投水中。滾滾作沸泡聲。而滅。席中共怒曰。何物生人。敗我清興。叟笑曰。不惡不惡。此吾家流星拐也。白衣人嗔其語戲。怒曰。都方厭惱。老奴何得作歡。便同小烏皮。捉得狂子來。不然。脛股當有椎喫也。汪計無所逃。即亦不畏。捉刀立舟中。倏見僮叟操兵來。汪注視。真其父也。疾呼阿翁。兒在此。叟大駭。相顧悽斷。僮即反身去。叟曰。兒急作匿。不然。都死矣。言未已。三人忽已登舟。面睛皆漆黑。大於榴。攫叟出。汪力與奪。搖舟斷纜。汪以刀截其臂。臂落。黃衣者乃逃。一白衣人奔汪。汪剗其顛。墮水有聲。閔然俱沒。方謀夜渡。旋見巨喙出水面。深闊若井。四面湖水奔注。碎碎作響。俄一噴湧。則浪接星斗。萬舟簸盪。湖人大恐。舟上有石鼓二。皆重百斤。汪舉一以投。激水雷鳴。浪漸消。又投其一。風波悉平。汪疑父爲鬼。叟曰。我固未嘗死也。溺江中者十九人。皆爲妖物所食。我以踴圓得全。物得罪於錢塘君。故移避洞庭耳。三人魚精所蹴。魚胞也。父子聚喜。中夜擊棹而去。天明。見舟中有魚翅。



徑四五尺許。乃悟是夜間所斷臂也。

庚

娘

(一) 速好は夫婦の情誼。

(二) 離邊は離散する也。

(三) 中叵測也。其の心中、測る可からざる也。

(四) 装は旅行の荷物。

(五) 戚好は親密なり。

(六) 四顧幽險。金があたりを見廻す様子の陰險なるをいふ。

(七) 一豁は外部の廣き景色を見渡して辭を散すること。

(八) 勸はなだむる也。

金大用。中州舊家子也。聘允太守女。字庚娘。麗而賢。速好甚敦。以流寇之亂。家人離邊。金攜家南竄。途遇少年。亦偕妻以逃者。自言廣陵王十八。願爲前驅。金喜。行止與俱。至河上。女隱告金曰。勿與少年同舟。彼屢顧我。目動而色變。中叵測也。全諾之。王殷勤覓巨舟。代金運裝。劬勞臻至。金不忍却。又念其攜有少婦。應亦無他。婦與庚娘同居。意度亦頗溫婉。王坐船頭上。與櫓人傾語。似其熟識。戚好未幾。日落。水程迢遞。漫漫不辨南北。金四顧幽險。頗涉疑怪。頃之。皎月初升。見彌望皆蘆葦。既泊。王邀金父子出戶一豁。乃乘間擠金入水。金父見之。欲號。舟人以篙築之。亦溺。生母聞聲出窺。又築溺之。王始喊救。母出時。庚娘在後。已微窺之。既聞一家盡溺。卽亦不驚。但哭曰。翁姑俱沒。我安適歸。王入。勸娘子無憂。請從我。至金陵。家中田廬。頗足贍給。保無虞也。女收涕曰。得如此。願亦足



- (九) 婢は月經なり。
- (一〇) 喧競は諍譁し争ふ也。
- (一一) 若は此の如き也。

(一二) 骨董は水に落つる音なり。

(一三) 市兒は市中の小商人。

(一四) 沃饒は富裕なり。

(一五) 強媚は強ひて媚態を爲す也。

(一六) 裸脱は衣を脱して裸となる也。

(一七) 呢聲は狎れ呢しむ聲。

(一八) 瘞藏は埋葬なり。

矣。王大悅。給奉良殷。既暮。曳女求歡。女託體婢。王乃就婦宿。初更既盡。夫婦喧競。不知何由。但聞婦曰。若所爲。雷霆恐碎汝顛矣。王乃搥婦。婦呼云。便死休。誠不願爲殺人賊婦。王吼怒。摔婦出。便聞骨董一聲。遂譁言婦溺矣。未幾。抵金陵。導庚娘至家。登堂見媪。媪訝非故婦。王言婦墮水死。新娶此耳。歸房。又欲犯之。庚娘笑曰。三十許男子。尙未經人道也。市兒初合。盃亦須一杯薄漿酒。汝沃饒。當亦不難。清醒相對。是何體段。王喜。具酒對酌。庚娘執爵。勸酬殷勤。王漸醉。辭不飲。庚娘引巨椀。強媚勸之。王不忍拒。又飲之。於是酣醉。裸脱促寢。庚娘撤器滅燭。託言洩溺。出房。以刀入。暗中以手索王項。王猶捉臂作呢聲。庚娘力切之。不死。號而起。又揮之。始殮。媪髮髯有聞。趨問之。女亦殺之。王弟十九覺焉。庚娘知不免。急自刎。刀鈍不可入。啓戶而奔。十九逐之。已投池中矣。呼告居人救之。已死。麗如生。共驗王尸。見窗上一函。開視。則女備述其冤狀。羣以爲烈。謀斂貲作殯。天明集視者數千人。見其容。皆朝拜之。終日間得百金。於是葬諸南郊。好事者爲之珠冠袍服。瘞藏豐備焉。初金

- (一九) 親耗は父母の消息。
- (二〇) 撈は水中に没(モゲ)りて物を取る也。又水中の物を探るにも用ふ。

(二一) 方寸は心の中をいふ。

(二二) 謀人は人の爲めに謀る也。

(二三) 縗経は喪服なり。

(二四) 豺子は王十八をさす。

(二五) 洋溢河渠。黄河溝渠の地方に評判基だ高きをいふ。

- (二六) 記室は上表・章報・書紀を主る官。
- (二七) 犯順は亂を作すをいふ。
- (二八) 敘勞は功を賞せらるる也。

生之溺也。浮片板上。得不死。將晚。至淮上。爲小舟所救。舟蓋富民尹翁。專設以拯溺者。金既蘇。詣翁申謝。翁優厚之。留教其子。金以不知親耗。將往探訪。故不決。俄白撈得死叟及媪。金疑是父母。奔驗。果然。翁代營棺木。生方哀痛。又白拯一溺婦。自言金生其夫。生揮涕驚出。女子已至。殊非庚娘。乃王十八婦也。向金大哭。請勿相棄。金曰。我方寸已亂。何暇謀人。婦益悲。尹審得其故。喜爲天報。勸金納婦。金以居喪爲辭。且將復讎。懼細弱作累。婦曰。如君言。脫庚娘猶在。將以報讐。居喪去之耶。翁以其言善。請暫代收養。金乃許之。卜葬翁媪。婦縗経哭泣。如喪翁姑。既葬。金懷刃托鉢。將赴廣陵。婦止之曰。妾唐氏。祖居金陵。與豺子同鄉。前言廣陵者詐也。且江湖水寇。半伊同黨。仇不能復。祇取禍耳。金徘徊不知所謀。忽傳女子誅讐事。洋溢河渠。姓名甚悉。金聞之一快。然益悲。辭婦曰。幸不汚辱。家有烈婦如此。何忍負心再娶。婦以業有成說。不肯中離。願自居於媵妾。會有副將軍袁公。與尹有舊。適將西發。過尹。見生。大相知愛。請爲記室。無何。流寇犯順。袁有大勳。金以參機務。敘勞授



- (二九) 游擊は游擊將軍の略稱。
- (三〇) 鎮江は府の名、江蘇省に屬す。
- (三一) 金山は鎮江府城の西北に在り。絶景と稱せらる。

- (三二) 饑は食り食ふ也。獨は犬の一種。饑獨兒は食食者を罵る語なり。
- (三三) 青衣は婢なり。
- (三四) 行旅は旅客をいふ。
- (三五) 唐氏云云、唐氏、庚娘を正夫人として見ゆる也。
- (三六) 吳越は敵味方をいふ。
- (三七) 齒は年齢。

- (三八) 重圓は再び會して夫婦と爲るをいふ。
- (三九) 搜括は搜索する也。
- (四〇) 哀は哀願する也。
- (四一) 直は價なり。

游擊<sup>(二九)</sup>以歸。夫婦始成合卺之禮。居數日。攜婦詣金陵。將以展庚娘之墓。暫過鎮江<sup>(三〇)</sup>。欲登金山<sup>(三一)</sup>。漾舟中流。歛一艇過。中有一嫗及少婦。怪少婦頗類庚娘。舟疾過。婦自窗中窺金。神情益肖。驚疑不敢追問。急呼曰。看羣鴨兒飛上天也。少婦聞之。亦呼曰。饑獨兒欲喫貓子腥耶。蓋當年閨中之隱諶也。金大驚。返棹近之。真庚娘也。青衣扶過舟。相抱哀哭。傷感行旅<sup>(三四)</sup>。唐氏以嫡禮見庚娘。庚娘驚問。金始備述其由。庚娘執手曰。同舟一話。心常不忘。不圖吳越一家矣。蒙代葬翁姑。所當首謝。何以此禮相向。乃以齒序<sup>(三七)</sup>。唐少庚娘一歲。妹之。先自庚娘既葬。自不知幾歷春秋。忽一人呼曰。庚娘。汝夫不死。尙當重圓<sup>(三八)</sup>。遂如夢醒。捫之。四面皆壁。始悟身死已葬。祇覺悶悶。亦無所苦。有惡少年。窺其葬具豐美。發塚破棺。方將搜括<sup>(三九)</sup>。見庚娘猶活。相共駭懼。庚娘恐其害己。哀之曰。幸汝輩來。使我得賭天日。頭上簪珥。悉將去。願贖我爲尼。更可少得直<sup>(四一)</sup>。我亦不洩也。盜稽首曰。娘子貞烈。神人共欽。小人輩不過貧乏無計。作此不仁。但無漏言幸矣。何敢贖作尼。庚娘曰。此我自樂之。又一盜曰。鎮江耿夫人。寡

而無子。若見娘子。必大喜。庚娘謝之。自拔珠飾。悉付盜。盜不敢受。固與之。乃共拜受。遂載去。至耿夫人家。託言船風所迷。耿夫人巨家。寡媪自度。見庚娘大喜。以爲己出。適母子自金山歸也。庚娘緬述其故。金乃登舟拜母。母款之若婿。邀至其家。留數日始歸。後往來不絕焉。

- (四二) 母子とは耿夫人と庚娘をいふ。
- (四三) 款は待遇する也。



- (一) 荒落は荒蕪廢壞なり。荒落之墟といひて地名の如く取扱ひたる也。
- (二) 外兄は母方の従兄。
- (三) 狼子野心は左傳宣公四年に見ゆる古諺。豺狼の子は馴服す可からざるを謂ふ。凶暴の人に喩ふる也。
- (四) 畜我不卒。詩經邶風に「父兮母兮、畜我不卒」とあるを用ひしなり。畜は養ふ也。卒は終ふる也。
- (五) 伶仃は孤獨なる貌。
- (六) 間壁は鄰家。
- (七) 凝眸停睇は、じつと見詰めること。
- (八) 盈盈は女の貌の輕盈なるを謂ふ。
- (九) 游詞は、じようだんを言ふ也。
- (一〇) 繼今は今より後。
- (一一) 以夜卜は夜來らんとの意。左傳莊公二十八年に「臣、其晝を卜したれども、未だ其夜を卜せず」とあるに本づく。
- (一二) 早は早朝。
- (一三) 苟合は馴れ合ひの関係。

文登景星者。少有重名。與陳生比鄰而居。齋隔一短垣。一日。陳暮過荒落之墟。聞女子啼松柏間。近臨。則樹橫枝有懸帶。若將自經。陳詰之。揮涕而對曰。母遠去。託妾於外兄。不圖狼子野心。畜我不卒。伶仃如此。不如死。言已復泣。陳解帶。勸令適人。女慮無可託者。陳請暫寄其家。女從之。既歸。挑燈審視。丰韻殊絕。大悅。欲亂之。女厲聲抗拒。紛紜之聲。達於間壁。景生踰牆來窺。陳乃釋女。女見景凝眸停睇。久乃奔去。二人共逐之。不知去向。景歸。闔戶欲寢。則女子盈盈自房中出。驚問之。答曰。彼德薄福淺。不可終託。景大喜。詰其姓氏。曰。妾祖居於齊。爲齊姓。小字阿霞。入以游詞。笑不甚拒。遂與寢處。齋中多友人來往。女恆隱閉深房。過數日。曰。妾姑去。此處繁雜。困人甚。繼今請以夜卜。問家何所。曰。正不遠耳。遂早去。夜果復來。懽愛甚篤。又數日。謂景曰。我兩人情好雖佳。終屬苟合。家君

- (一四) 容即云云。好き時機を見計らひて父母に申して許可を受け一生御側に居るやうにすべしとの意。
- (一五) 決絶は離縁する也。
- (一六) 信杳青鸞。消息の少しも無きに喩ふ也。青鸞は即ち西王母の使ふ所の青鳥なり。
- (一七) 如石沈海。西廂記に「石の大海に沈むに似たり」とあるに本づく。是れ亦消息の少しも無きに喩ふる也。
- (一八) 大歸は離縁せられて實家に歸る也。
- (一九) 並無蹤緒。行くへが少しも知れぬ也。
- (二〇) 海神壽は海神の祭。
- (二一) 蒼頭は奴僕なり。
- (二二) 靸は馬勒なり。黒衛は黒色の驢なり。
- (二三) 欲奮老拳。打たんとする也。晉書石勒載記に「初め勅、李陽と居を鄰し、常に麻地を争ひ、迭に相毆撃す。是に至りて陽を召す。至る。臂を引きて笑つて曰く、孤、往日、卿の老拳を厭ひ、卿も亦孤が毒手に飽けりと」とあり。
- (二四) 結髮者は少年の時より夫婦たる者なふ。

宦遊西疆。明日將從母去。容即乘間稟命。而相從以終焉。問幾日別。約以旬終。既去。景思齋居不可常移。諸內又慮妻妒。計不如出。妻志遂決。妻至。輒詬厲。妻不堪其辱。涕欲死。景曰。死恐見累。請蚤歸。遂促妻行。妻啼曰。從子十年。未嘗有失德。何決絶如此。景不聽。遂愈急。妻乃出門去。自是聖壁清塵。引領翹待。不意信杳青鸞。如石沈海。妻大歸後。數浼知交。請復於景。景不納。遂適夏侯氏。夏侯里居。與景接壤。以田畔之故。世有卻。景聞。益大恚恨。然猶冀阿霞復來。差足自慰。越年餘。並無蹤緒。會海神壽。祠内外士女雲集。景亦在。遙見一女。甚似阿霞。景近之。入於人中。從之。出於門外。又從之。飄然竟去。景追之不及。恨悵而返。後半載。適行於途。見一女郎。著朱衣。從蒼頭靸。黑衛來。望之霞也。因問從人。娘子爲誰。答言。南村鄭公子繼室。又問娶幾時矣。曰。半月耳。景思得母誤耶。女郎聞語。回眸一睇。景視。真霞。見其已適他姓。憤填胸臆。大呼霞娘。何忘舊約。從人聞呼。主婦欲奮老拳。女急止之。啓障紗。謂景曰。負心人何顏相見。景曰。卿自負僕。僕何嘗負卿。女曰。負夫人甚於負我。結



(二五)桂籍は及第者の名簿。  
(二六)今科は今回の試験、亞魁は經魁五人に亞ぎたる成績の者。

(二七)蹇は驢なり。

(二八)捷は及第する也。

(二九)薄倖は輕薄なり。

(三〇)款は款待する也。

(三一)慶雲は景星の字。

(三二)綿袍之義。舊き知人を忘れざるをいふ。史記の范雎傳に「綿袍戀戀として故人の意有り」とあるに本づく。

(三三)夜分は夜半。

(三四)喪檢は節制を失ふ也。道義に背きたる行を爲すこと。

(三五)登兩榜は郷試及び禮部試に及第するをいふ。

(三六)舍其舊而新是謀。左傳僖公二十八年に「原田毎たり、其舊を捨てて新を是れ謀る」とあるに本づく。

髮者如是。而況其他。向以祖德厚。名列桂籍。故委身相從。今以棄妻。故冥中削爾祿秩。今科亞魁王昌。替汝名者也。我已歸鄭君。無勞復念。景俛首帖耳。口不能道詞。視女子策蹇去如飛。悵悵而已。是科景落第。亞魁果王氏昌名。鄭亦捷。景以是得薄倖名。四十無偶。家益替。恆趨食於親友家。偶詣鄭。鄭款之。留宿焉。女窺客。見而憐之。問鄭曰。堂上客。非景慶雲耶。問所自識。曰。未適君時。曾避難其家。亦深得其家養。彼行雖賤。而祖德未斬。且與君爲故人。亦宜有綿袍之義。鄭然之。易其敗絮。留以數日。夜分欲寢。有婢持廿餘金贈景。女在窗外言曰。此私貯。聊酬夙好。可將去。覓一良匹。幸祖德厚。尚足及子孫。無復喪檢。以保餘齡。景感謝之。既歸。以十餘金買縉紳家婢。甚醜悍。舉一子。後登兩榜。鄭官至吏部郎。既沒。女送葬歸。啓輿。則虛無人矣。始知其非人也。噫。人之無良。舍其舊而新是謀。卒之巢覆而鳥亦飛。天之所報亦慘矣。

田七郎

(一)馬箠は馬の鞭。  
(二)狸は獸の名、大さ狗の如く、文、狸の如しといふ。蜂腰は腰細き也。  
(三)膩はあぶらざりたる也。恰は帽なり。  
(四)阜犢鼻。犢鼻は前垂の如きもの。阜は黒色なり。白補綴とは黒き犢鼻の破損したる所を白き布を以て補綴せる也。  
(五)木歧支壁。倒壊せんとする壁を木のまたを以て支へたる也。  
(六)狼幌は狼の皮をいふ。  
(七)懸布は或は懸け或は敷きてある也。  
(八)杙は坐貝、即ち腰掛なり。  
(九)皐皮は虎皮なり。  
(一〇)龍鍾は身體衰弱して歩行に難む貌。よぼ／＼としたる也。  
(一一)輾轉は事の定まる無きを言ふ。色色様様と考ふる也。  
(一二)晦紋は暗き筋。禍にかかるべき人相をいふ。

武承休。遼陽人。喜交遊。所與皆知名士。夜夢一人告曰。子交游徧海內。皆濫交耳。惟一人可共患難。何反不識。問之何人。曰。田七郎。非與。醒而異之。詰朝。見所與游。輒問七郎。客或識爲東村業獵者。武敬謁諸家。以馬箠搗門。未幾。一人來。年二十餘。獮目蜂腰。著膩恰衣。阜犢鼻。多白補綴。拱手於額。而問所自。武展姓字。且託途中不快。借廬憩息。問七郎。答曰。卽我是也。遂延客入。見破屋數椽。木歧支壁。入一小室。虎皮狼幌。懸布楹間。更無杙榻可坐。七郎就地設皐。比焉。武與語。言詞樸質。大悅之。遽貽金作生計。七郎不受。固予之。七郎受以白母。俄頃將還。固辭不受。武強之再四。母龍鍾而至。厲色曰。老身止此兒。不欲令事貴客。武慚而退。歸途輾轉。不解其意。適從人於舍後。聞母言。因以告武。先是七郎持金白母。母曰。我適賭公子。有晦紋。必罹奇禍。聞之。受人知者。分人憂。受人恩者。



(一三)重賂は重き贈物。  
(一四)死報は己の身を殺して其恩に報ゆる也。

(一五)鹿脯は鹿の肉の乾したるもの。

(一六)款洽は情意浹洽なるを謂ふ。意氣投合すること。

(一七)守視湯藥は病氣を看護するをいふ

(一八)唁は弔ふ也。

(一九)臨存は訪問する也。

(二〇)懊喪は悔恨沮喪する也。

(二一)鞞は毛を去りたる革。

(二二)周旋は酬應する也。色色として取持すること。

急人難。富人報人以財。貧人報人以義。無故而得重賂不祥。恐將取死報於子矣。武聞之。深歎母賢。然益傾慕七郎。翼日設筵招之。辭不至。武登其堂。坐而索飲。七郎自行酒。陳鹿脯。殊盡情禮。越日。武邀酬之。乃至。款洽甚。饋以金。卻不受。武託購虎皮。乃受之。歸視所蓄。計不足償。思再獵而後獻之。入山三日。無所獵獲。會妻病。守視湯藥。不遑操業。浹旬。妻奄忽以死。為營齋葬。所受金稍耗去。武親臨。唁送。禮儀優渥。既葬。負弩山林。益思所以報武。而迄無所得。武探得其故。輒勸勿急。切望七郎姑一臨存。而七郎終以負債為憾。不肯至。武因先索舊藏。以速其來。七郎檢視故革。則蠹蝕殃敗。毛盡脫。懊喪益甚。武知之。馳行其庭。極意慰解之。入視敗革曰。此亦復佳。僕所欲得。原不以毛。遂抽鞞出。兼邀同往。七郎不可。乃自歸。七郎終念不足以報武。裹糧入山。數夜。得一虎。全而餽之。武喜治具。請三日留。七郎辭之堅。武鍵庭戶。使不得出。賓客見七郎樸陋。竊謂公子妄交。而武周旋七郎。殊異諸客。為易新服。卻不受。承其寐而潛易之。不得已而受之。既去。其子奉媪命。返新

(二三)敝履は敝れて補綴したるもの。

(二四)履襪は履の裏。

(二五)蹄門は門によりかかる也。蹄は倚と通ず。

(二六)毆死人命は毆打して人を殺す也。

(二七)械收在獄は手かせ足かせの類をばめられて獄に入れらるる也。

(二八)祝は禱る也。

(二九)初度は誕生日。

(三〇)斗室は小なる室なり。

(三一)刺刺は多言する也。

(三二)匣は刀の鞘をいふ。

(三三)濡縷は絲すちを濡すほど少し出血するをいふ。史記刺客傳に「太子預め天下の利七首を求め、趙の徐夫人の七首を得、之を百金に取り、工をして藥を以て之を淬せしめ、以て人を試みるに、血、縷を濡せば、人立ちどころに死せざる者無し」とあるに本づく。

衣。索其敝履。武笑曰。歸語老姥。故衣已拆作履襪。自是七郎日以兔鹿相貽。招之即不復至。武一日詣七郎。值出獵未返。媪出。蹄門語曰。再勿引致吾兒。大不懷好意。武敬禮之。慚而退。半年許。家人忽曰。七郎為爭獵豹。毆死人命。捉將官裏去。武大驚。馳視之。已械收在獄。見武無言。但云。此後煩惱。老母武慘然出。急以重金賂邑宰。又以百金賂警主。月餘無事。釋七郎歸。母慨然曰。子髮膚受之武公子。非老身所得而愛惜者矣。但祝公子終百年無災患。即兒福。七郎欲詣謝。武母曰。往則往耳。見公子勿謝也。小恩可謝。大恩不可謝。七郎見武。武温言慰藉。七郎唯唯。家人咸怪其疎。武喜其誠篤。益厚遇之。由是恆數日留公子家。醜遺輒受。不復辭。亦不言報。會武初度。賓從繁多。夜舍騰滿。武偕七郎臥斗室中。三僕即牀下藉芻藁。二更向盡。諸僕皆睡去。兩人猶刺刺語。七郎佩刀挂壁間。忽自騰出。匣數寸許。錚錚作響。光炯燦如電。武驚之。七郎亦起。問牀下臥者何人。武答皆廝僕。七郎曰。此中必有惡人。武問故。七郎曰。此刀購諸異國。殺人未嘗濡縷。迄今佩三世矣。決首至千計。



(三四)如新發於硯。硯は砥石なり。新に  
きたるが如し。

(三五)輾轉は眠る能はずして顔に寢がへ  
りすること。

(三六)數は命數なり。

(三七)彌子は男子に寵愛せらるる男子を  
いふ。衛の彌子瑕、靈公に寵ありし  
に本づく。

(三八)拗掘は、ねぢられて柔順ならざる也。

(三九)勾戲は戯るる也。

(四〇)同袍は同輩なり。

(四一)質詞は告訴する也。

(四二)勾牒は拘引すべしとの文書。

(四三)顔色慘變するは、七郎の心中、老  
母を思へばなり。

(四四)巡察は巡行視察する也。

(四五)掠楚は管撃する也。

尙如<sup>(三四)</sup>新發於硯見惡人則鳴躍當去殺人遠矣公子宜親君子  
遠小人或萬一可免武領之七郎終不樂<sup>(三五)</sup>輾轉牀席武曰災祥數<sup>(三六)</sup>  
耳何憂之深七郎曰我諸無恐怖徒以有老母在武曰何遽至此  
七郎曰無則便佳蓋牀下三人一爲林兒是老彌子<sup>(三七)</sup>能爲主人權  
一童僕年十二三武所常役者一李應<sup>(三八)</sup>最拗掘每因細事與公子  
裂眼爭武恆怒之當夜默念疑必係此人詰旦喚至善言遣令去  
武長子紳娶王氏一日武他出留林兒居守齋中菊花方燦新婦  
意翁出齋庭當寂自詣摘菊林兒突出勾戲<sup>(三九)</sup>婦欲遁林兒強挾入  
室婦啼拒色變聲嘶紳奔入林兒始釋手逃去武歸聞之怒覓林  
兒竟已不知所之過二三日始知其投身某御史家某官都中家  
務皆委決於弟武以同袍義<sup>(四〇)</sup>致書索林兒某弟竟置不發武益恚  
質詞<sup>(四一)</sup>邑宰勾牒<sup>(四二)</sup>雖出而隸不捕官亦不問武方憤怒適七郎至武  
曰君言驗矣因與告愬七郎顔色慘變終無一語即逕去武囑<sup>(四三)</sup>幹  
僕<sup>(四四)</sup>巡察林兒林兒夜歸爲邏者所獲執見武武掠楚<sup>(四五)</sup>之林兒語侵  
武武叔恆故長者恐姪暴怒致禍勸不如治以官法武從之繫赴

(四六)刺書は名刺書狀。

(四七)紀綱は僕なり。御史家の僕をいふ。  
左傳僖公二十四年「秦伯、衛を晉  
に送る、三千人、實に紀綱の僕なり」  
とあるに本づく。

(四八)叢衆は群集なり。

(四九)籤數は管うつべき數をいふ。

(五〇)肩鑄は固く戸じまりをしたるをい  
ふ。

(五一)耗は消息、様子なり。

(五二)關説は、之に因りて以て其辭説を  
通すること、亦、行者の關津あるが  
如きを謂ふ。依託する所の言有る也。

(五三)張皇は勢威を張大にする也。勇氣  
の盛んなるをいふ。

(五四)血泊は血の流れたるところ。血の  
潮といふが如し。泊は潮澤なり。

公庭而御史家刺書<sup>(四六)</sup>郵至。宰釋林兒付<sup>(四七)</sup>紀綱以去。林兒意益肆。倡  
言<sup>(四八)</sup>叢衆中誣主人婦與私武無奈之。忿塞欲死。他日登御史門。俯  
仰叫罵。里舍勸慰令歸。逾夜。忽有家人白。林兒被人鬪割。拋尸曠  
野間。武驚喜。意氣稍得伸。我聞御史家。訟其叔姪。遂偕叔赴質。宰  
不容辯。欲管恆。武抗聲曰。殺人莫須有。至辱詈。縉紳則生實爲之。  
無<sup>(四九)</sup>與<sup>(五〇)</sup>叔事。宰置不問。武裂皆欲上。羣役禁挫之。操杖隸。皆紳家走  
狗。恆又老耄<sup>(五一)</sup>籤數未半。奄然已死。宰見武叔垂斃。亦不復究。武號  
且罵。宰亦若弗聞也。者遂昇叔歸。哀憤無所爲計。思欲得七郎謀。  
而七郎更不弔問。竊自念。待七郎不薄。何遽如行路人。亦疑殺林  
兒。必七郎轉念。果爾。胡得不謀。於是遣人探諸其家。至則肩鑄<sup>(五二)</sup>寂  
然。鄰人並不知耗<sup>(五一)</sup>。一日。某弟方在內廨。與宰關説。值晨進薪水。忽  
一樵人至前。釋擔抽利刃。直奔之。某惶急。以手格刃。刃落斷腕。又  
一刀始決其首。宰大驚竄去。樵人猶張皇<sup>(五三)</sup>四顧。諸役吏急闔署門。  
操杖疾呼。樵人乃自剄死。紛紛集認識者。知爲田七郎也。宰驚定。  
始出覆驗。見七郎僵臥血泊<sup>(五四)</sup>中。手猶握刃。方停蓋審視。尸忽岬然



躍起。竟決<sub>レ</sub>宰首。已而復踏。衛官捕<sub>レ</sub>其母。則亡去數日矣。武聞<sub>レ</sub>七郎死。馳哭盡<sub>レ</sub>哀。咸謂<sub>レ</sub>其主使<sub>レ</sub>七郎。武破<sub>レ</sub>產。蚤緣<sub>レ</sub>當路。始得<sub>レ</sub>免。七郎尸棄<sub>レ</sub>原野。三十餘日。禽<sub>レ</sub>犬邏<sub>レ</sub>守之。武取<sub>レ</sub>而厚葬<sub>レ</sub>之。其子流<sub>レ</sub>寓<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>登<sub>レ</sub>變<sub>レ</sub>姓<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>修。起<sub>レ</sub>行伍<sub>レ</sub>。以<sub>レ</sub>軍功<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>同知將軍。歸<sub>レ</sub>遼。武已八十餘。乃指示<sub>レ</sub>其父墓<sub>レ</sub>焉。

(五五)登は州の名、山東省に屬す。  
(五六)行伍は兵卒をいふ。兵卒より功を積みて同知將軍に至りしなり。

翮

翮 7

- (一)汾は州の名、今の山西省に屬す。
- (二)國子左廂は官名。
- (三)匪人は人に非ざる人。小人惡人をいふ。
- (四)狹邪遊は妓に狎れ酒を飲むをいふ。
- (五)牀頭金盡は貧困なるを謂ふ。李白の詩に「牀頭黃金盡、壯士無顔色」とあり。
- (六)爾冷は冷遇せらるる也。
- (七)濃穢は甚だしく汚れたる也。
- (八)趨起は進まんと欲すれども前まざる也。
- (九)可以下榻は、御とめ申すことが出来るとの意。
- (一〇)石梁は石の橋。
- (一一)障は屏風の屬。
- (一二)摺疊は衣をたたむをいふ。

羅子浮<sub>レ</sub>汾人。父母俱早世。八九歲。依<sub>レ</sub>叔大業。業爲<sub>レ</sub>國子左廂。富有<sub>レ</sub>金。繒<sub>レ</sub>而無<sub>レ</sub>子。愛<sub>レ</sub>羅若<sub>レ</sub>己出。十四歲。爲<sub>レ</sub>匪人<sub>レ</sub>誘<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>。作<sub>レ</sub>狹邪遊。會有<sub>レ</sub>金陵娼<sub>レ</sub>。寓<sub>レ</sub>郡中。生悅<sub>レ</sub>而惑<sub>レ</sub>之。娼返<sub>レ</sub>金陵。生竊<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>遁去。居<sub>レ</sub>娼家<sub>レ</sub>半年。牀頭金盡。大爲<sub>レ</sub>姊妹行<sub>レ</sub>齒<sub>レ</sub>冷。然猶未<sub>レ</sub>遽<sub>レ</sub>絕<sub>レ</sub>之。無<sub>レ</sub>何。瘡創潰<sub>レ</sub>臭。沾染<sub>レ</sub>牀席。逐<sub>レ</sub>而出。丐<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>市。市人見<sub>レ</sub>輒<sub>レ</sub>遙<sub>レ</sub>避。自恐<sub>レ</sub>死<sub>レ</sub>異域。丐<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>西行。日三四十里。漸至<sub>レ</sub>汾界。又念<sub>レ</sub>敗絮<sub>レ</sub>濃穢<sub>レ</sub>。無<sub>レ</sub>顔<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>里門。尙<sub>レ</sub>趨<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>近<sub>レ</sub>邑間。日既暮。欲<sub>レ</sub>趨<sub>レ</sub>山寺宿<sub>レ</sub>。遇<sub>レ</sub>一女子。容貌若<sub>レ</sub>仙。近問<sub>レ</sub>何適<sub>レ</sub>。生以<sub>レ</sub>實告<sub>レ</sub>。女曰。我出<sub>レ</sub>家人。居<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>山洞。可以<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>榻。頗不<sub>レ</sub>畏<sub>レ</sub>虎狼。生喜<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>往。入<sub>レ</sub>深山中。見<sub>レ</sub>一洞府。入<sub>レ</sub>則門橫<sub>レ</sub>溪水。石梁<sub>レ</sub>駕<sub>レ</sub>之。又數武。有<sub>レ</sub>石室<sub>レ</sub>二。光明徹照。無<sub>レ</sub>須<sub>レ</sub>燈燭。命<sub>レ</sub>生解<sub>レ</sub>懸<sub>レ</sub>鶉。浴<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>溪流。曰。濯<sub>レ</sub>之。創當<sub>レ</sub>愈。又開<sub>レ</sub>障<sub>レ</sub>拂<sub>レ</sub>褥。促<sub>レ</sub>寢。曰。請<sub>レ</sub>卽<sub>レ</sub>眠。當<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>卽<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>袴。乃取<sub>レ</sub>大葉<sub>レ</sub>類<sub>レ</sub>芭蕉。翦<sub>レ</sub>綴<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>衣。生臥<sub>レ</sub>視<sub>レ</sub>之。製<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>幾時。摺<sub>レ</sub>疊<sub>レ</sub>牀頭。曰。曉<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>著<sub>レ</sub>之。乃與<sub>レ</sub>對<sub>レ</sub>榻<sub>レ</sub>寢。生浴<sub>レ</sub>後。覺<sub>レ</sub>創<sub>レ</sub>瘍<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>



- (一三)痴はかさふた也。瘡乾きたる也。
- (一四)滑絶は甚だ滑なる也。
- (一五)翩翩小鬼頭云云。薛姑子好夢の故事は詳ならずれども、大意は、いたづら者の翩翩さん、御樂しみて、おもしろい事は何時までも出来るものにあらずとの意。翩翩と花城との對話はすべて諧謔なり。
- (一六)花城娘子云云。花城さん。久しく御出でが無かつたが、今日西南の風が大層吹くので、風の吹きまはして御出でなされたのですね。男の御子さんが御生れなされたかとの意。
- (一七)又一小婢子。また女の子が生まれしたとの意。
- (一八)瓦釜は女子を生むをいふ。詩經小雅に「乃生女子、載寢之地、載衣之、載弄之瓦」とあるに本づく。瓦は紡釜なり。釜は瓦を焼く籠なり。瓦釜哉とは、あなたは紡織製造の籠ですれ。即ち女の子ばかり産むな戯れて言ふ也。
- (一九)方鳴之云云。さつきまで鳴いて居たが今睡つてしまつたとの意。
- (二〇)小郎君は羅生をさす。若旦那、あなたは好い美人を手に入れましたねとの意。
- (二一)剥果は果の皮をむく也。
- (二二)翹鳳は花城の履をいふ。
- (二三)恍然は恍惚なり。
- (二四)危坐は正しく坐する也。
- (二五)坦然是平氣なる貌。
- (二六)怔忡は懼れ憂ふる也。突突は憂懼

苦既醒。摸之。則痴厚結矣。詰旦。將興。心疑蕉葉不可著。取而審視。綠錦滑絶。少間具餐。女取山葉呼作餅。食之。果餅。又翦作雞魚。烹之。皆如真者。室偶一罌貯佳醞。輒復取飲。少減。則以溪水灌益之。數日。創痂盡脫。就女求宿。女曰。輕薄兒。甫能安身。便生妄想。生云。聊以報德。遂同臥處。大相歡愛。一日。有少婦笑入。曰。翩翩小鬼頭。快活死。薛姑子好夢。幾時做得。女迎笑曰。花城娘子。貴趾久弗涉。今日西南風緊。吹送來也。小公子抱得未。曰。又一小婢子。女笑曰。花娘子。瓦釜哉。那弗將來。曰。方鳴之。睡却矣。於是坐以款飲。又顧生曰。小郎君。焚好香也。生視之。年廿有三四。綽有餘妍。心好之。剝果誤落案下。俯假拾果。陰捻翹鳳。花城他顧而笑。若不知者。生方恍然神奪。頓覺袍袴無温。自顧所服。悉成秋葉。幾駭絕。危坐移時。漸變如故。竊幸二女之弗見也。少頃。酬酢間。又以指搔纖掌。城坦然笑謔。殊不覺知。突突怔忡。間衣已化葉。移時始復變。由是慚顏息慮。不敢妄想。城笑曰。而家小郎子。大不端好。若弗是醋葫蘆娘子。恐跳跡入雲霄去。女亦哂曰。薄倖兒。便直得寒凍殺。相與鼓掌。

- の貌。びく／＼する也。
- (二七)而は爾と通ず。汝なり。あなたの御内の旦那は大層身持が善く無い。あなたのがやうな嫉妬深い奥さんで無ければ、何處へ飛んで行くか分らぬとの意。羅生が邪念を動かすときは、其衣忽ち變じて葉と爲るを以て、翩翩に嫉妬心ありといふなり。これ亦戲謔なり。
- (二八)薄倖兒云云。輕薄なるうはき者は直ちに寒く凍えてしまふのです、と戯るる也。
- (二九)小婢云云。うちの女兒が眼をさました、大層啼いて居るでせうとの意。
- (三〇)貪引他家男兒云云。他の家の男を引つばらうと思つて、自分の幼兒のひどく啼くのを忘れて居たんですねとの意。亦戲謔なり。
- (三一)木脱は木の葉落つる也。
- (三二)善旨御冬。御は禦ぐ也。此句は詩經に「我有旨蓄、亦以御冬」とあるに本づく。
- (三三)蕭縮は寒さうにしてちぢかまる様
- (三四)架覆衣は綿入れの衣。
- (三五)輕鬆は軽くふつくりしたること。
- (三六)訂爲姻好。羅の男子と花城の女子と後日結婚すべきことを約束する也
- (三七)臘は年輪をいふ。
- (三八)懸耿は心配憂慮すること。
- (三九)保兒は未だ懷抱を離れざる子。幼兒をいふ。
- (四〇)塵寰は塵世といふが如し。人間世界。

花城離席曰。小婢醒。恐啼腸斷矣。女亦起曰。貪引他家男兒。不憶得小江城啼絶矣。花城既去。懼貽誚責。女卒晤對如平時。居無何。秋老風寒。霜零木脱。女乃收拾落葉。蓄旨御冬。顧生蕭縮。乃持樸撥拾洞口白雲。爲絮複衣。著之。温煖如襦。且輕鬆常如新綿。逾年生一子。極慧美。日在洞中弄兒爲樂。然每念故里。乞與同歸。女曰。妾不能從。不然。君自去。因循二三年。兒漸長。遂與花城訂爲姻好。生每以叔老爲念。女曰。阿叔臘故大高。幸復強健。無勞懸耿。待保兒婚後。去住由君。女在洞中。輒以葉寫書教兒讀。兒過目即了。女曰。此兒福相。放教人塵寰。無憂不至臺閣。未幾兒年十四。花城親詣送女。女華妝至。容光照人。夫妻大悅。舉家讌集。翩翩扣釵而歌曰。我有佳兒。不羨貴官。我有佳婦。不羨綺紈。今夕聚首。皆當喜歡。爲君行酒。勸君加餐。既而花城去。與兒夫婦對室居。新婦孝。依依膝下。宛如所生。生又言歸。女曰。子有俗骨。終非仙品。兒亦貴富中人。可攜去。我不誤兒生平。新婦思別其母。花城已至。兒女戀戀。涕各滿眶。兩母慰之曰。暫去可復來。翩翩乃翦葉爲驢。令三人跨之。



- (四一) 依依は温順柔和なる貌。  
 (四二) 別は暇乞の挨拶すること。  
 (四三) 老歸林下は官を辭して隱棲する也

以歸。大業已老歸林下。意姪已死。忽攜佳孫美婦歸。喜如獲寶。入門。各視所衣。悉芭蕉葉。破之。絮蒸蒸騰去。乃並易之。後生思翩翩。借兒往探之。則黃葉滿徑。洞口雲迷。零涕而返。

促

- (一) 宣德は明の宣宗の年號。  
 (二) 促織は蟋蟀の別名。  
 (三) 西産は西方の地の産。  
 (四) 里正は里の長。  
 (五) 科斂は割り當てて收斂する也。  
 (六) 操童子業。童子に學藝を教ふるをいふ。  
 (七) 百計營謀は色色様様と工夫する也。

- (八) 不中於款は條件に相當せざる也。  
 (九) 嚴限追比は先例に従つて嚴重に期限を定めて督促する也。比は例なり。  
 (一〇) 轉側は輾轉反側する也。  
 (一一) 駝背は、せむし也。  
 (一二) 紅女は工女なり。白婆は老婆なり。  
 (一三) 翕關は或は閉ぢ或は開く也。

織

宣德間。宮中尙促織之戲。歲征民間。此物故非西産。有華陰令欲媚上官。以一頭進。試使鬪。而才。因責常供。令以責之。里正市中游俠兒。得佳者。籠養之。昂其直。居爲奇貨。里胥猾黠。假此科斂丁口。每責一頭。輒傾數家之産。邑有成名者。操童子業。久不售。爲人迂訥。遂爲猾胥報充里正役。百計營謀。不能脫。不終歲。薄産累盡。會征促織。成不敢斂戶口。而又無所賠償。憂悶欲死。妻曰。死何裨益。不如自行搜覓。冀有萬一之得。成然之。早出暮歸。提竹筒絲籠。於敗堵叢草處。探石發穴。靡計不施。迄無濟。卽捕得三兩頭。又劣弱。不中於款。宰嚴限追比。旬餘。杖至百。兩股間。膿血流離。並蟲亦不能行捉矣。轉側牀頭。惟思自盡。時村中來一駝背巫。能以神卜。成妻具貲詣問。見紅女白婆。填塞門戶。入其舍。則密室垂簾。簾外設香几。問者爇香於鼎。再拜。巫從傍望空代祝。唇吻翕關。不知何詞。



(一四)蘭若は佛寺。  
(一五)青麻頭。賈似道の促織經に、「青麻頭は上品なり」とあり。

(一六)逼似は、よく似たる也。

(一七)冥搜は、あても無く捜し求むる也。

(一八)挿は、つつく也。

(一九)拱壁は大なる壁。

(二〇)蟹白栗黄。劉侗の促織志に「蟹白栗黄米飯をもて食養す」とあり。

(二一)斯須は、しばらくにして也。就はすなはち。

(二二)業根は悪業の根本の意。今、其子を罵る也。

(二三)而翁は汝の父。

(二四)覆算は審に計算する義にて、今、嚴罰に處するをいふ。

(二五)搶呼は大に泣き叫ぶ也。

(二六)向隅は泣く也。説苑に「一人、隅に向つて泣く有り云云」とあるに本づく。

(二七)藁葬は粗末なる葬式なり。

(二八)愷然は息のかすかなる貌。

(二九)癡木は、おろかにして、ぼんやりすること。

(三〇)奄奄は氣息僅に續く也。いきの絶えんとするほどなるをいふ。

(三一)超忽は遠き貌。

(三二)土狗・梅花翅は、共に促織の上等の品種。

(三三)蟹殼青も促織の上等の品種。

(三四)胡盧は笑ふ貌。

(三五)臙然は大なる貌。修は長きなり。偉は大なり。

(三六)木雞は木にて造りたる雞。紀晋子が周の宣王の爲め鬪雞を養ひ、四十日にして之を望むに木雞の如くなるに至りしこと、莊子及び列子に見ゆ。

(三七)撩撥は、つつくこと。

各各竦立以聽。少間。簾內擲一紙出。卽道人意中事。無毫髮爽。成妻納錢案上。焚拜如前人。食頃。簾動。片紙拋落。視之。非字而畫。中繪殿閣。類蘭若。後小山下怪石臥。針針叢棘。青麻頭伏焉。旁一蟻。若將躍舞。展玩不可曉。然睹促織。隱中胸懷。摺藏之。歸以示成。成反復自念。得無教我獵蟲所耶。細瞻景狀。與村東大佛閣逼似。乃強起扶杖。執圖詣寺後。有古陵蔚起。循陵而走。見蹲石鱗鱗。儼然類畫。遂於蒿萊中。側聽徐行。似尋針芥。而心目耳力俱窮。絕無蹤響。冥搜未已。一癩頭墓。猝然躍去。成益愕。急逐趁之。墓入草間。躡跡披求。見有蟲伏棘根。遽撲之。入石穴中。搯以尖草。不出。以筒水灌之。始出。狀極俊健。遂而得之。審視。巨身修尾。青項金翅。大喜。籠歸。舉家慶賀。雖連城拱壁。不啻也。上於盆而養之。蟹白栗黄。備極護愛。留待限期。以塞官責。成有子九歲。窺父不在。竊發盆。蟲躍擲逕出。迅不可捉。及撲入手。已股落腹裂。斯須就斃。兒懼。啼告母。母聞之。面色灰死。大驚曰。業根。死期到矣。而翁歸。自與汝覆算耳。兒涕而去。未幾而成歸。聞妻言。如被冰雪。怒索兒。兒渺然不知所往。

既而得其尸於井。因而化怒爲悲。搶呼欲絕。夫妻向隅。茅舍無煙。相對默然。不復聊賴。日將暮。取兒藁葬。近撫之。氣息愷然。喜寘榻上。半夜復甦。夫妻心稍慰。但見神氣癡木。奄奄思睡。成顧蟋蟀籠虛。則氣斷聲吞。亦不復以兒爲念。自昏達曙。目不交睫。東曦既駕。僵臥長愁。忽聞門外蟲鳴。驚起覘視。蟲宛然尚在。喜而捕之。一鳴輒躍去。行且速。覆之以掌。虛若無物。手裁舉。則又超忽而躍。急趨之。折過牆隅。迷其所往。徘徊四顧。見蟲伏壁上。審諦之。短少。黑赤色。頓非前物。成以其小。劣之。惟徬徨瞻顧。尋所逐者。壁上小蟲。忽躍落衿袖間。視之。形若土狗。梅花翅。方首長脰。意似良。喜而收之。將獻公堂。惴惴恐不當意。思試之鬪。以覘之。村中少年好事者。馴養一蟲。自名蟹殼青。日與子弟角。無不勝。欲居之以爲利。而高其直。亦無售者。逕造廬訪成。視成所蓄。掩口胡盧而笑。因出己蟲。納比籠中。成視之。臙然修偉。自增慚怍。不敢與較。少年固強之。顧念蓄劣物。終無所用。不如拊搏一笑。因合納鬪盆。小蟲伏不動。蠢若木雞。少年又大笑。試以猪鬣撩撥蟲鬚。仍不動。少年又笑。屢撩之。



(三八)報主知。促織志に「勝てる者は翹然として長く鳴き、以て其主に報す。」とあり。

(三九)擺撲。擺は揺かす也。

(四〇)撫軍は官名。

(四一)蝴蝶・螳螂・油利撻・青絲額は、皆促織の上等の品種の名。

(四二)撫臣は即ち撫軍。

(四三)學使は學校の教官たること。

(四四)蹄蹴は馬なり。

蟲暴怒。直奔。遂相騰擊。振奮作聲。俄見小蟲躍起。張尾伸鬚。直齧敵領。少年大駭。急解令休。止。蟲翹然矜鳴。似報主知。成大喜。方共瞻玩。一雞瞥來。逕進以啄。成駭立愕呼。幸啄不中。蟲躍去尺有咫。雞健進。逐逼之。蟲已在爪下矣。成倉猝莫知所救。頓足失色。旋見雞伸頸擺撲。臨視則蟲集冠上。力叮不釋。成益驚喜。撥置籠中。翌日進宰。宰見其小。怒訶成。成述其異。宰不信。試與他蟲鬪。蟲盡靡。又試之雞。果如成言。方賞成。獻諸撫軍。撫軍大悅。以金籠進上。細疏其能。既入宮中。舉天下所貢。蝴蝶。螳螂。油利撻。青絲額。一切異狀。徧試之。無出其右者。每聞琴瑟之聲。則應節而舞。益奇之。上大嘉悅。詔賜撫臣名馬衣緞。撫軍不忘所自。無何宰以卓異聞。宰悅。免成役。又囑學使。俾入邑庠。後歲餘。成子精神復舊。自言身化促織。輕捷善鬪。今始甦耳。撫軍亦厚資成。不數歲。田百頃。樓閣萬椽。牛羊蹄蹴各千計。一出門。裘馬過世家焉。

阿

英 7

(一)表表は人にすぐれたる貌。  
(二)良匹は良き配偶。  
(三)簡拔は選擇する也。  
(四)殊色は容貌の人にすぐれたるをいふ。

(五)汗悸は汗を出し動悸する也。

(六)閒階は閑靜なる階段。取次は次第なり。

(七)踏青は清明の日に遊するをいふ。

(八)鳳頭鞋子は鳳凰の頭の飾あるくつ。

(九)岸然は雄偉なる貌。  
(一〇)鶻は鶻鳥の名。くまたか。鶻睛は眼のざらざら光るをいふ。

甘玉。字璧人。廬陵人。父母早喪。遺弟珽。字雙璧。始五歲。從兄鞠養。玉性友愛。撫弟如子。後珽漸長。丰姿秀出。又慧能文。玉益愛之。每曰。吾弟表表。不可以無良匹。然簡拔過刻。姻卒不就。適讀書匡山僧寺。夜初就枕。聞窗外有女子聲。窺之。見三四女郎。席地坐。數婢陳肴酒。皆殊色也。一女曰。秦娘子。秦娘子。阿英何不來。下座者曰。昨自函谷來。被惡人傷其右臂。不能同游。方用恨恨。一女曰。前宵一夢大惡。今猶汗悸。下座者搖手曰。莫道莫道。今夕姊妹歡會。言之嚇人。不快。女笑曰。婢子膽怯爾爾。便有虎狼銜去耶。若要勿言。須歌一曲。為娘行侑酒。女低吟曰。閒階桃花。取次開。昨日踏青。小約未應乖。囑付東鄰女伴。少待莫相催。著得鳳頭鞋子。即當來。吟罷。一座無不歎賞。談笑間。忽一偉丈夫。岸然自外入。鶻睛熒熒。其貌獷醜。衆譁曰。妖至矣。倉猝闕然。殆如鳥散。惟歌者婀娜不前。被



(一一) 支撐は抵抗すること。

- (一二) 操箕帚は人の妻と爲りて夫に事ふるをいふ。
- (一三) 賢仲は人の弟をいふ。
- (一四) 襟被は寝具なり。
- (一五) 戚朋は親戚朋友。
- (一六) 確耗は確實なる消息。
- (一七) 姿致娟娟は容姿風采の美しくたなやかなること。

- (一八) 夙好は昔のよしみ。いひなづけを謂ふ。
- (一九) 族閥は家柄。
- (二〇) 哥子は兄なり。

(二一) 紅徹面頰は顔から頰まで紅くなること。

執哀啼。強與支撐。丈夫吼怒。斲手斷指。就便嚼食。女即踏地若死。玉憐不可復忍。乃急抽劍。拔關出。揮之中股。股落。負痛逃去。扶女入室。面如塵土。血淋襟袖。驗其指。則右拇斷矣。裂帛代裹之。女始呻曰。拯命之德。將何以報。玉自初窺時。已隱爲弟謀。因告以意。女曰。狠疾之人。不能操箕帚矣。當別爲賢仲圖之。詰其姓氏。答言秦氏。玉乃展衾。俾暫休養。自乃襟被他所曉而視之。則牀上已空。意其自歸。而訪察近村。殊少此姓。廣託戚朋。並無確耗。歸與弟言。悔恨若失。珽一日偶游塗野。遇一二八女郎。姿致娟娟。顧之微笑。似將有言。因以秋波四顧。而後問曰。君甘家二郎耶。曰然。曰君家尊會與妾有昏姻之約。何今日欲背前盟。另訂秦家。珽曰。小生幼孤。夙好都不曾聞。請言族閥。歸當問兄。女曰。無須細道。但得一言。妾當自至。珽以未稟兄命爲辭。女笑曰。駭郎君。遂如此。怕哥子耶。既如此。妾陸氏。山東山望村。三日內。當候玉音。乃別而去。珽歸述諸兄嫂。兄曰。大謬語。父歿時。我二十餘歲。倘有是說。那得不聞。又以其獨行曠野。遂與男兒交語。愈益鄙之。因問其貌。珽紅徹面頰。不

(二二) 妍媸は美醜なり。

- (二三) 許は許嫁なり。
- (二四) 耗問は音信なり。
- (二五) 二三其德は專一ならざるを謂ふ。心變りのすること。詩經に「士や極罔し、其德を二三にす」とあるに本づく。

- (二六) 昆季は兄弟。
- (二七) 外姉はいとこ。
- (二八) 佻達は輕率脱略なり。議は世間の非議なり。

(二九) 悵惘は意を失ふなり。おもしろがらず思ふこと。

(三〇) 質對は質問應對なり。參差はつじつまの合はぬこと。

(三一) 靦然は恥づる貌。

出一言。嫂笑曰。想是佳人。玉曰。童子何辨妍媸。縱美必不及秦。待秦氏不諧。圖之未晚。珽默而退。踰數日。玉在途。見一女子。零涕前行。垂鞭按轡。而微睨之。人世殆無其匹。使僕詰焉。答曰。我舊許甘家二郎。因家貧遠徙。遂絕耗問。近方歸。復聞郎家二三其德。背其前盟。往問伯伯甘璧人。焉置妾也。玉驚喜曰。甘璧人。卽我是也。先人曩約。實所不知。去家不遠。請卽歸謀。乃下騎授轡。步御以歸。女自言小字阿英。家無昆季。惟外姉秦氏同居。始悟麗者所言。卽其人也。玉欲告諸其家。女固止之。竊喜弟得佳婦。然恐其佻達。招議久之。女殊矜莊。又嬌婉善言。母事嫂。嫂亦雅愛慕之。值中秋。夫妻方狎宴。嫂苦招之。珽意悵惘。女遣招者先行。約以繼至。而端坐笑言。良久。殊無去意。珽恐嫂待。故促之。女但笑。卒不復去。質旦晨妝甫竟。嫂自來撫問。夜來相對。何爾快快。女微哂之。珽覺有異。質對參差。嫂大駭。苟非妖物。何得有分身術。玉亦懼。隔簾而告之。曰。家世積德。曾無怨讐。如其妖也。請速行。幸勿殺吾弟。女靦然曰。妾本非人。祇以阿翁夙盟。故秦家姊以此勸駕。自分不能育男女。嘗欲



(三二) 秦家姉勸駕は秦娘子が嫁すること  
を勸めしむ。勸駕の字は、漢の  
高帝の求賢詔に、「其有意稱明德  
者必身勸爲之駕」とあるに本づく。  
(三三) 轉眼は忽ち也。

(三四) 司李は司理と同じ、司法官なり。

(三五) 我望嫂嫂來は、我は兄嫁さんに御  
目にかかつて來ませうとの意。  
(三六) 不妨は差支無しとの意。

辭去。所以戀戀者。爲兄嫂待我不薄耳。今既見疑。請從此訣。轉眼  
化爲鸚鵡。翩然逝矣。初甘翁在時。蓄一鸚鵡。甚慧。嘗自投餌。珽時  
四五歲。問飼鳥何爲。父戲曰。將以爲汝婦。間慮鸚鵡乏食。則呼珽  
云。不將餌去。餓死媳婦矣。家人亦皆以此相戲。後斷鎖亡去。始悟  
舊約卽此也。然珽明知非人。而思之不置。嫂懸情尤切。旦夕啜泣。  
玉悔之而無如何。後二年。爲弟聘姜氏女。意終不自得。有表兄爲  
粵司李。玉往省之。久不歸。適土寇爲亂。近村里落。半爲邱墟。珽大  
懼。挈家避難山谷上。男女頗雜。都不知其誰何。忽聞女子小語。絕  
類英。嫂促珽近驗之。果英。珽喜極。捉臂不釋。女乃謂同行者曰。姊  
且去。我望嫂嫂來。既至。嫂望見悲哽。女慰勸再三。又謂此非樂土。  
因勸令歸。衆懼寇至。女固言不妨。乃相將俱歸。女撮土攔戶。囑安  
居勿出。坐數語。反身欲去。嫂急握其腕。又令兩婢捉左右足。女不  
得已。止焉。然不甚歸私室。珽訂之三四。始爲之一往。嫂每謂新婦  
不能當叔意。女遂早起。爲姜理妝。梳竟。細勻鉛黃。入視之。艷增數  
倍。如此三日。居然麗人。嫂奇之。因言我又無子。欲購一妾。姑未遑

(三七) 宜男は草の名、姪婦、之を佩ぶる  
ときは必ず男子を生むと云ふ。宜男  
相とは男子を生む人相なり。  
(三八) 濃粉は濃きおしろい。藥末は、こ  
なぐすり。

(三九) 離は離なり、遭ふ也。離亂は兵亂  
に遭ふ也。  
(四〇) 阿伯は兄上。甘玉をいふ。  
(四一) 非李非奈は、どちらつかずにて、  
中ぶらりんなるをいふ。  
(四二) 行人は旅行したる人、即ち甘玉を  
いふ。  
(四三) 受恩者は恩を受けたること甚だ大  
なるをいふ。  
(四四) 秦吉了は鳥の名、鸚鵡に似たり。

暇。不知婢輩可塗澤否。女曰。無人不可轉移。但質美者易爲力耳。  
遂徧相諸婢。惟一黑醜者。有宜男相。乃喚與洗濯。已而以濃粉雜  
藥末塗之。如是三日。面色漸黃。四七後。脂澤沁入肌理。居然可觀。  
日惟閉門作笑。並不計及兵火。一夜噪聲四起。舉家不知所謀。俄  
門外人馬鳴動。紛紛俱去。既明。始知村中焚掠殆盡。盜縱羣隊窮  
搜。凡伏匿巖穴者。悉被殺擄。遂益德女。目之以神。女忽謂嫂曰。妾  
此來。徒以嫂義難忘。聊分離亂之憂。阿伯行至。妾在此。如諺所云。  
非李非奈。可笑人也。我姑去。當乘間一相望耳。嫂問行人無恙乎。  
曰。途中有大難。此無與他人事。秦家姉受恩奢。意必報之。固當無  
妨。嫂挽之過宿。未明已去。玉自東粵歸。聞亂。兼程進。途遇寇。主僕  
棄馬。各以金束腰間。潛身叢棘中。一秦吉了飛集棘上。展翼覆之。  
視其足。缺一指。心異之。俄而羣盜四合。繞莽尋之。殆遍。二人氣不  
敢息。盜既散。鳥始翔去。既歸。各道所見。始知秦吉了。卽所救麗者  
也。後值玉他出不歸。英必暮至。計玉將歸。則蚤去。珽或會於嫂所。  
間邀之。則諾而不赴。一夕玉他往。珽意英必至。潛伏候之。未幾英



(四五)要遮はむかへさへさる也。

(四六)勞嫂懸望は、嫂さんに待ちぼうけをくはしたとの意。

(四七)駭絶は甚だしく驚くなり。

(四八)奄存餘息は、氣息の絶えくぐなるをいふ。

果來暴起。要遮<sup>(四五)</sup>而歸於室。女曰。妾與君情緣已盡。強合之。恐爲造物所忌。少留有餘。時作一面之會。何如。玨不聽。卒與狎。天明詣嫂。嫂怪之。女笑云。中途爲強寇所劫。勞嫂懸望矣。數語趨出。居無何。有巨貓銜鸚鵡。經寢門過。嫂駭<sup>(四七)</sup>絶。固疑是英。時方沐。輟洗急號。羣起。謀擊。始得之。左翼沾血。奄存餘息<sup>(四八)</sup>。抱置膝頭。撫摩良久。始漸醒。自以喙理其翼。少選飛遠室中。呼曰。嫂嫂別矣。吾怨玨也。振翼遂去。不復來。

封三娘

(一)曉城は地名なるべきも未詳。祭酒は官名。

(二)隨喜は法要の關係者に非ずして之に列席するをいふ。

(三)盼注は顧み視つめること。

(四)朱門繡戶は豪族なるをいふ。

(五)讖嫌は世間の誹謗嫌疑。

范十一娘。曉城祭酒之女。少艷美。風雅尤絕。父母鍾愛之。求聘者輒令自擇。女恆少可。會上元日。水月寺中諸尼。作盂蘭盆會。是日游女如雲。女亦詣之。方隨喜間。一女子步趨從。屢望顏色。似欲有言。審視之。二八絕代姝也。悅而好之。轉用盼注。女子微笑曰。姊非范十一娘乎。答曰。然。女子曰。久聞芳名。人言果不虛謬。十一娘亦審里居。女答言。妾封氏第三。近在鄰村。把袂歡笑。辭致溫婉。遂大相愛悅。依戀不捨。十一娘問。何無伴侶。曰。父母早世。家中止一老嫗。留守門戶。故不得來。十一娘將歸。封凝眸欲涕。十一娘亦惘然。遂邀過從。封曰。娘子朱門繡戶。妾素無葭莩親。慮致讖嫌。十一娘固邀之。答俟異日。十一娘乃脫金釵一股贈之。封亦摘髻上綠簪爲報。十一娘既歸。傾想殊切。出所贈簪。非金非玉。家人都不之識。甚異之。日望其來。悵然遂病。父母訊得故。使人於近村諮訪。並無



(六)重九は九月九日。

(七)要は戯なり。遊戯なり。

(八)下眼靨は輕視する也。

(九)飛短流長は様様な評判をすること。

(一〇)訂は約を結ぶ也。

(一一)掩入は不意に入り来る也。

(一二)味は隱蔽する也。

(一三)羞暈滿頰は羞ぢらひて顔を赤くする也。

(一四)更衣はもと字の如く衣を更ふることなりしが、後には廁に如くを謂ふに至れり。ここは後者の意なり。

知者時值重九十一娘羸頓無聊。倩侍兒強扶窺園。設褥東籬下。忽一女子攀垣來窺。覘之則封女也。呼曰。接我以力。侍兒從之。慕然遂下。十一娘驚喜頓起。曳坐褥間。責其負約。且問所來。答云。妾家去此尙遠。時來舅家作耍。前言近村者。緣舅家耳。別後懸思頗苦。然貧賤者與貴人交。足未登門。先懷慚怍。恐爲婢僕下眼靨。是以不果來。適經牆外過。聞女子語。便一攀望。冀是娘子。今果如願。十一娘因述病源。封泣下如雨。因曰。妾來當須秘密。造言生事者。飛短流長。所不堪受。十一娘諾。偕歸同榻。快與傾懷。病尋愈。訂爲姊妹。衣服履舄。輒互易著。見人來。則隱匿夾幕間。積五六月。公及夫人頗聞之。一日兩人方對弈。夫人掩入。諦視。驚曰。眞吾兒友也。因謂十一娘。閨中有良友。我兩人所歡。胡不早白。十一娘因達封意。夫人顧謂三娘。伴吾兒。極所欣慰。何味之。封羞暈滿頰。默然拈帶而已。夫人去。封乃告別。十一娘苦留之。乃止。一夕。自門外忽倉皇奔入。泣曰。我固謂不可留。今果遭此大辱。驚問之。曰。適出更衣。一少年丈夫。橫來相干。幸而得逃。如此。復何面目。十一娘細詰形

(一五)但須以梯云云。ただ梯を以て牆を越えさせて下されば宜しとの意。

(一六)惻惻は悲痛する貌。

(一七)興居は起居なり。

(一八)姑姑はお嬢さん。盼は慕ひ思ふをいふ。

(一九)貴介は身分の貴きをいふ。介は大なり。

(二〇)紈袴兒は富貴なる若者をいふ。紈袴は富貴なる者の服なり。

(二一)道場は佛教を修行する所。

(二二)翰苑才は翰林の才なり。翰林學士と爲るべき才の意。

貌。謝曰。勿須怪。此妹癡兒。會告夫人。杖責之。封堅辭欲去。十一娘請待天曙。封曰。舅家咫尺。但須以梯度。我過牆耳。十一娘知不可留。使兩婢踰垣送之。行半里許。辭謝自去。婢返。十一娘伏牀悲惋。如失伉儷。後數月。婢以故至東村。暮歸。遇封女從老嫗來。婢喜。拜問。封亦惻惻。訊十一娘。興居。婢捉袂曰。三姑過我。我家姑姑盼欲死。封曰。我亦思妹。但不樂使家人知。歸啓園門。我自至。婢歸。告十一娘。十一娘喜從其言。則封已在園中矣。相見。各道間闊。綿綿不寐。視婢子眠熟。乃起。移與十一娘同枕。私語曰。妾固知妹子未字。以才色門地。何患無貴介壻。然紈袴兒。敷不足數。如欲得佳耦。請無以貧富論。十一娘然之。封曰。舊年邂逅處。今復作道場。明日再煩一往。當令見一如意郎君。妾少讀相人書。頗不參差。味爽。封即去。約俟蘭若。十一娘果往。封已先在。眺覽一周。十一娘便邀同車。攜手出門。見一秀才。年可十七八。布袍不飾。而容儀俊偉。封潛指曰。此翰苑才也。十一娘略睨之。封別曰。妹子先歸。我即繼至。入暮果至。曰。我適物色甚詳。其人即同里孟安仁也。十一娘知其貧。不



(二三)訂盟は盟約を訂結する也。

(二四)魔劫は悪魔の障害の意。

(二五)更商は改めて相談すること。

(二六)冥想は深く想ふ也。

(二七)妾非毛遂云。平原君が趙の爲めに楚に使せんとし、門下の食客の文武の才ある者二十人と興にせんとせしとき、毛遂自ら薦めて其數に加はりしこと、史記平原君傳に詳なり。曹邱生が季布の名を天下に宣揚せしこと、史記季布傳に見ゆ。われは毛遂の如く自ら薦めて君の妻たらんと欲するに非ず、曹邱生が季布の名を宣揚せしが如く范十一娘の美德を推稱して之をして君の妻たらしめんと欲するなりとの意。

(二八)請倩冰也は媒妁人を依頼することを請ふとの意。

(二九)眷注は眷顧注思。

(三〇)鰥は老いて妻無き人。

(三一)作伐は媒妁を爲す也。

(三二)消吉は吉日を擇ぶなり。消は擇ぶ也。

(三三)小姐はお嬢さん。

(三四)反命は復命する也。

(三五)玉葬香埋は美人を埋葬するをいふ。隋の渭州の刺史張崇の妻王氏の銘文に「深深として玉を葬り、鬱鬱として香を埋む」の語あり。

(三六)資度は生計を立つる費用。  
(三七)小有はどうかかうか不自由無きまでの財産あること。

(三八)效英皇。娥皇・女英は堯の二女にして共に舜に嫁せり。われ等二人共に孟生の妻と爲らんとすの意。

(三九)吐納は故き氣を吐き新しき氣を納るる也。深呼吸に似たり。

(四〇)汗牛充棟は書物の數多きをいふ。柳宗元の陸文通墓表に「其の書たるや、出づれば則ち馬牛に汗し、處れば則ち棟宇に充つ」とあり。

以爲可。封曰。妹子何亦墮世情哉。此人苟長貧賤者。余當扶眸子。不復相天下士矣。十一娘曰。且爲奈何。曰。願得一物。持與訂盟。十一娘曰。姊何草草。父母在不遂如何。封曰。此爲正恐其不遂耳。志若堅。生死何可奪也。十一娘必不可。封曰。娘子姻緣已動。而魔劫未消。所以姑來報前好耳。請即別。當以所贈金鳳釵。矯命贈之。十一娘方謀更商。封已出門去。時孟生貧而多才。意將擇耦。故十八猶未聘也。是日忽睹兩豔。歸涉冥想。一更向盡。封三娘款門而入。燭之。識爲日中所見。喜致詰問。曰。妾封氏。范十一娘之女伴也。生大悅。不暇細詰。遽前擁抱。封拒曰。妾非毛遂。乃曹邱生。十一娘願締永好。請倩冰也。生愕然不信。封乃以釵示生。生喜不自已。矢曰。勞眷注若此。僕不得十一娘。甯終鰥耳。封遂去。生詰旦。浼鄭媪詣范夫人。夫人貧之。竟不商女。立便却去。十一娘知之。心失所望。深怨封之悞己也。而金釵難返。只須以死矢之。又數日。有某紳子求婚。恐不諧。浼邑宰作伐。時某方居權要。范公心畏之。以問十一娘。不樂。母詰之。默默不言。但有涕淚。使人潛告夫人。非孟生。死不嫁。

公聞益怒。竟許某紳家。且疑十一娘有私意於生。遂涓吉。速成禮。十一娘忿不食。日惟耽臥。至親迎之前夕。忽起。攬鏡自妝。夫人竊喜。俄侍女奔白。小姐自經。舉宅驚涕。痛悔無及。三日。遂葬。孟生自鄰媪反命。憤恨欲絕。然遙遙探訪。妄冀復挽。察知業有主。忿火中燒。萬慮俱斷矣。未幾聞玉葬香埋。慘然悲喪。恨不從麗人俱死。向晚出門。意將乘昏夜一哭十一娘之墓。歎有一人來。近之則封三娘。向生曰。喜姻好可就矣。生泣然曰。卿不知十一娘亡耶。封曰。我所謂就者。正以其亡。可急喚家人發塚。我有異藥。能令蘇。生從之。發墓破棺。復掩其穴。生自負尸。與三娘俱歸。置榻上。投以藥。踰時而蘇。顧見三娘問。此何所。封指生曰。此孟安仁也。因告以故。始如夢醒。封懼漏洩。相將去十五里。避匿山村。封欲辭去。十一娘泣留作伴。使別院居。因貨殉葬之飾。用爲資度。亦將小有。封每遇生來。輒走避。十一娘從容曰。吾姊妹骨肉不啻也。然終無百年聚。計不如效英皇。封曰。妾少得異訣。吐納可以長生。故不願嫁耳。十一娘笑曰。世傳養生術。汗牛充棟。行而效者誰也。封曰。妾所得非世人



(四一)華陀五禽圖。後漢書華陀傳に「陀、吳普に與へて曰く、吾、一術有り、五禽の戲と名づく、曰く、虎・鹿・熊・猿・鳥、體、快からざる有れば、起ちて一禽の戲を作す。怡んで汗出づ。因つて以て粉を著く。身體輕便にして食を欲す云云」とあり。

(四二)修煉家は道教仙術などの修行者をいふ。

(四三)鄉會は鄉試と會試となり。

(四四)投刺は名刺を出して謁見せんことを求むる也。

(四五)儂薄は巧慧輕薄なり。

(四六)關節は權門に賄賂を贈ること。

所知。世所傳者。並非真訣。惟華陀五禽圖。差爲不妄。凡修煉家。無非欲血氣流通耳。若得厄逆症。作虎形立止。非其驗耶。十一娘陰與生謀。使僞爲遠出者。入夜強勸以酒。既醉。生潛入汚之。三娘醒曰。妹子害我矣。倘色戒不破。道成當升第一天。今墮奸謀。命耳。乃起告辭。十一娘告以誠意而哀謝之。封曰。實相告。我乃狐也。緣瞻麗容。忽生愛慕。如繭自纏。遂有今日。此乃情魔之劫。非關人力。再留則魔更生。無底止矣。娘子福澤正遠。珍重自愛。言已而逝。夫妻驚歎久之。逾年生鄉會果捷。官翰林。投刺謁范公。公愧悔不見。固請之。乃見。生入。執子婿禮。伏拜甚恭。公大怒。疑生儂薄。生請聞具道情事。公不深信。使人探諸其家。方大驚喜。陰戒勿宣。懼有禍變。又二年。某紳以關節發覺。父子充遼海軍。十一娘始歸甯焉。

西湖主

(一)豬婆龍は鼈の巨大なる者。  
(二)桅は帆柱。  
(三)奄は奄奄と同じ。氣息僅に續く也。  
(四)張翕は開閉する也。  
(五)扱は攀と同じ。援る也。引く也。すがりつくこと。  
(六)暈明は夜將に明けんとして未だ明けざる時。  
(七)靡之は空しく時を過すをいふ。  
(八)捫は撫ぶる也。  
(九)枵腹輾轉は空腹にして腹が鳴る也。  
(一〇)抹額は、はちまき也。  
(一一)髻は一本には髻に作る、是なるに似たり。  
(一二)鞬は臂杆なり。弓を射るとき臂にまとふもの。

陳生弼教。字明允。燕人也。家貧。從副將軍賈綰作記室。泊舟洞庭。適豬婆龍浮水面。賈射之。中背。有魚銜龍尾不去。並獲之。鎖置桅間。奄存氣息。而龍吻張翕。似求援拯。生惻然心動。請於賈而釋之。攜有金創藥。戲敷患處。縱之水中。浮沈踰刻而沒。後年餘。生北歸。復經洞庭。大風覆舟。辛扱一竹簾。漂泊終夜。挂木而止。援岸方升。有浮尸繼至。則其僮僕。力引出之。已就斃。慘怛無聊。對坐息。但見小山聳翠。細柳搖青。行人絕少。無可問途。自暈明以及辰後。悵悵靡之。忽僮僕之體微動。喜而捫之。無何。嘔水數斗。醒然頓蘇。相與曝衣石上。近午始燥可著。而枵腹輾轉。飢不可堪。於是越山疾行。冀有村落。纔至半山。聞鳴鑼聲。方凝聽間。有二女郎。乘駿馬來。騁如撒菽。各以紅綃抹額。髻插雉尾。著小袖紫衣。腰束綠錦。一挾彈。一臂青鞵。度過嶺南。則數十騎。獵於榛莽。並皆姝麗。裝束若一。



(一三)首山は山の名。

(一四)粉垣は白堊を塗りたる垣。圍香は周圍をかこむ也。

(一五)榆錢は榆の實。

(一六)冒索は懸りた繩。ぶらんこの繩をいふ。沈沈は幽靜なる貌。

(一七)禿袖は短き袖。

(一八)玉蕊瓊英は並に花の名。

(一九)方喻は比方譬喩なり。方はくらぶる也。

(二〇)歴階は、階段を上下にするに一段毎に左右の足を揃へずして、一段を一足にて上下する也。

生不敢前有男子步馳。似是馭卒。因就問之。答曰。此西湖主獵首山也。生述所來。且告之餒。馭卒解裹糧授之。囑曰。宜即遠避。犯駕當死。生懼。疾趨下山。茂林中隱有殿閣。謂是蘭若。近臨之。粉垣圍沓。溪水橫流。朱門半啓。石橋通焉。攀扉一望。則臺榭環雲。擬於上苑。又疑是貴家園亭。逡巡而入。橫藤礙路。香花撲人。過數折曲欄。又是別一院宇。垂楊數十株。高拂朱簷。山鳥一鳴。則花片齊飛。深苑微風。則榆錢自落。怡目快心。殆非人世。穿過小亭。有鞦韆一架。上與雲齊。而冒索沈沈。杳無人跡。因疑地近閨閣。惟怯未敢入。俄聞馬騰於門。似有女子笑語。生與僮潛伏叢花中。未幾。笑聲漸近。聞一女子曰。今日獵興不佳。獲禽絕少。又一女曰。非是。公主射得雁落。幾空勞僕馬也。無何。紅裝數輩。擁一女郎。至亭上坐。禿袖戎裝。年可十四五。鬢低斂霧。腰細驚風。玉蕊瓊英。未足方喻。諸女子獻茗薰香。燦如堆錦。移時女起。歷階而下。一女曰。公主鞍馬勞頓。尙能鞦韆否。公主笑諾。遂有駕肩者。捉臂者。褰裙者。持履者。挽扶而上。公主舒皓腕。躡利屣。輕如飛燕。蹴入雲霄。已而扶下。羣曰。公

主真仙人也。嘻笑而去。生睨良久。神魂飛揚。迨人聲既寂。出詣鞦韆架下。徘徊凝想。見籬下有紅巾。知爲羣美所遺。喜納袖中。登其亭。見案上設有文具。遂題巾曰。

雅戲何人擬半仙。分明瓊女散金蓮。

廣寒隊裏應相妬。莫信凌波便上天。

題已。吟誦而出。復尋故徑。則重門扃鑰矣。踟躕計。反而樓閣亭臺。涉歷幾盡。一女掩入。驚問何得來此。生揖之曰。失路之人。幸垂救焉。女問拾得紅巾否。生曰。有之。然已玷染。如何。因出之。女大驚曰。汝死無所矣。此公主所常御。塗鴉若此。何能爲地。生失色。哀求脫免。女曰。竊窺宮儀。罪已不赦。念汝儒冠蘊藉。欲以私意相全。今孽乃自作。將何爲計。遂皇皇持巾去。生心悸肌慄。恨無翅翎。延頸俟死。良久女復來。潛賀曰。子有生望矣。公主看巾三四遍。蹶然無怒容。或當放君去。宜姑耐守。勿得攀樹鑽垣。發覺不宥矣。日已投暮。凶祥不能自必。而餓餒中燒。憂煎欲死。無何。女子挑燈至。一婢提壺榼。出酒食餉生。生急問消息。女云。適我乘間言。園中秀才。可

(二一)雅戲は風雅なる遊戲。  
(二二)半仙。天寶遺事に「宮中、寒食の節に至れば、競うて秋千(鞦韆と同じ)を築き、嬉笑して樂と爲す。帝呼んで半仙の戲と爲す」とあり。  
(二三)瓊女は玉の如き美人。  
(二四)金蓮。齊の東昏侯、金を鑿ちて蓮花を爲りて地に貼し、潘妃をして其上を行かしめて曰く、此れ歩歩、蓮花を生ずるなりと。後世、因つて女子の纖足の稱と爲す。  
(二五)廣寒は月世界の宮殿。  
(二六)凌波。美人の步履の輕逸なるを形容する也。曹植の洛神賦に「凌波微歩し、羅襪、塵を生ず」とあるに本づく。  
(二七)塗鴉は、いたづら書きすること。  
(二八)何能爲地は、罪を免るるを得べき道無しとの意。  
(二九)今孽乃自作。今の禍は自ら作せる禍なりとの意。書經に「天の作せる孽は猶ほ遠く可し、自ら作せる孽は道る可からず」とあるに本づく。  
(三〇)皇皇はあわて急ぐ貌。  
(三一)耐守は忍耐してじつとして居ること。  
(三二)投暮は將に暮れんとする也。



- (三三) 惡耗は悪き消息なり。
- (三四) 緩頰は徐に勸誘する也。
- (三五) 濱告は幾たびも告ぐる事。
- (三六) 盼望は待ち望む事。
- (三七) 空息は呼吸せはしき事。
- (三八) 抵はなげうつ也。
- (三九) 狂僧は氣ちがひ野郎といふが如し僧は賤人の稱。
- (四〇) 將謂何人陳郎耶。誰かと思つて居たら、陳さんでしたかの意。
- (四一) 且勿。しばらくなけれ、と讀む。まあ、手出したななるなどの意。
- (四二) 戰惕は、わななき懼るる也。
- (四三) 炫冶は光りかがやきて美しき也。
- (四四) 再造は再生といふが如し。
- (四五) 神恟恍而無著。心うつとりとして落ちつかざる也。
- (四六) 敖曹は、にぎやかなる貌。
- (四七) 花鬪は花毛氈。

怒則放之。不然餓且死。公主沈思云。深夜教渠何之。遂命餽君食。此非惡耗也。生徊徨終夜。危不自安。辰刻向盡。女子又餽之。生哀求緩頰。女曰。公主不言殺。亦不言放。我輩下人。何敢屑屑濱告。既而斜日西轉。盼望不已。忽女子空息急奔而入。殆矣。多言者洩其事於王妃。妃展巾抵地。大罵狂僧。禍不遠矣。生大驚。面如灰土。長跽請教。忽聞人語紛拏。女搖手避去。數人持索。洶洶入戶。內一婢熟視曰。將謂何人陳郎耶。遂止持索者曰。且勿且勿。待白王妃來。返身急去。少間來曰。王妃請陳郎入。生戰惕從之。經數十門。至一宮殿。碧箔銀鉤。即有美姬揭簾。唱陳郎至。上一麗者。袍服炫冶。生伏地稽首曰。萬里孤臣。幸恕生命。妃急起。自曳之曰。我非君子。無以有今日。婢輩無知。致迕佳客。罪何可贖。即設華筵。酌以鏤杯。生茫然不解其故。妃曰。再造之恩。恨無所報。息女蒙題巾之愛。當是天緣。今夕即遣奉侍。生意出非望。神恟恍而無著。日方暮。一婢前曰。公主已嚴妝訖。遂引生就帳。忽而笙管敖曹。階上悉踐花鬪。門堂藩溷。處處皆籠燭。數十妖姬。扶公主交拜。麝香之氣。充溢殿

- (四八) 戴佩は感謝すること。
- (四九) 憐は愛する也。
- (五〇) 不自主は自分勝手に事を爲すことを得ずとの意。
- (五一) 顛倒は思ひ煩ふないふ。
- (五二) 鮑叔は管仲の人と爲りを善く知れる人、前に註せり。
- (五三) 侍君有日云云。此後長く君の御側に居ることなれば、ゆつくりと阿念に報ゆる仕方を考へなされても、遅くは無しとの意。
- (五四) 關聖は關帝、即ち蜀の關羽なり。蚩尤は黃帝の時、亂を作したる諸侯。
- (五五) 耗は音信なり。
- (五六) 平安書は平安を報する手紙。
- (五七) 言之無少諱。少しも思み憚ること無く、其物語を爲せりとの意。
- (五八) 童稚之交は幼少の時の友人。
- (五九) 南服は南方の地。

庭既而相將入。幃兩相傾愛。生日。羈旅之臣。生平不省拜侍。點汚芳巾。得免斧鑕。幸矣。反賜姻好。實非所望。公主曰。妾母。湖君妃子。乃江陽王女。舊歲歸甯。偶游湖上。爲流矢所中。蒙君脫免。又賜刀圭之藥。一門戴佩。常不去心。郎勿以非類見疑。妾從龍君得長生訣。願與郎共之。生乃悟爲神人。因問婢子何以相識。曰。爾日洞庭舟上。曾有小魚銜尾。即此婢也。又問既不見誅。何遲遲不賜縱脫。笑曰。實憐君才。但不自主顛倒終夜。他人不及知也。生歡曰。卿我鮑叔也。餽食者誰。曰。阿念。亦妾心腹。生日。何以報德。笑曰。侍君有日。徐圖塞責。未晚耳。問大王何在。曰。從關聖征蚩尤。未歸。居數日。生慮家中無耗。懸念綦切。乃先以平安書遣僕歸。家中聞洞庭舟覆。妻子縲絰已年餘。僕歸始知不死。而音問梗塞。終恐漂泊難返。又半載。生忽至。裘馬甚都。囊中寶玉充盈。由此富有巨萬。聲色豪華。世家所不能及。七八年間。生子五人。日日宴集賓客。宮室飲饌之奉。窮極豐盛。或問所遇。言之無少諱。有童稚之交。梁子俊者。宦游南服。十餘年。歸過洞庭。見一畫舫。雕檻朱窗。笙歌幽細。緩蕩煙



(六〇) 體股は股を重ねる也。  
 (六一) 按沙は按摩する貌。摩は即ち按摩なり。  
 (六二) 楚襄は楚の襄王なり。楚の襄王が高唐に遊び、夢に巫山の神女に會したること、宋玉の高唐賦に見ゆ。  
 (六三) 鵝首は舟のへさきをいふ。鵝は水鳥の名にして、其象を船頭に畫きたるを鵝首といふ。  
 (六四) 酒霧は酒の氣をいふ。  
 (六五) 小觀は珍羞なり。窮措大は貧書生なり。發迹は立身すること。  
 (六六) 山荆は己の妻の謙稱。  
 (六八) 早雷聒耳は音樂の聲の甚だ盛んなるをいふ。  
 (六九) 肉は歌ふ聲。竹は笙笛等の樂器の聲をいふ。嘈雜は入り亂れて騒がしきをいふ。  
 (七〇) 能令我眞箇銷魂否。君は我に一人の美人を贈ることを得るや否やとの意。麗情集に「詹天游、風流才思、昔人有、皆、絶色なり。粉兒と名づくる者尤絶なり。一日、天游を招きて、飲み、諸姬を出して、觴を佐けしむ。天游、意を紛兒に屬し、一詞を口占して曰く、淡淡春山兩點青、嬌羞一點口兒櫻、一棹兒玉一窩雲、白藕香中見、西子、玉梅花下見、昭君、不認眞個也銷魂と。楊遂に紛兒を以て之に贈りて曰く、天游をして眞個に魂を銷せしむとあること本づく。  
 (七一) 一美妾之資は一人の美妾を買ふ可き資金。  
 (七二) 綠珠は晉の石崇の愛妾たりし美人なり。此珠を賣らば、綠珠の如き美妾を買ふことも難からずとの意。

波時<sup>(六〇)</sup>有美人。推窗憑眺。梁目注<sup>(六一)</sup>舫中。見一少年丈夫。科頭<sup>(六二)</sup>疊股<sup>(六三)</sup>其上。旁有二八姝麗<sup>(六四)</sup>。按莎<sup>(六五)</sup>交摩。念必楚襄貴官<sup>(六六)</sup>。而騶從<sup>(六七)</sup>殊少。凝眸審諦。則陳明允也。不覺憑欄<sup>(六八)</sup>酣叫。生聞呼。罷棹<sup>(六九)</sup>出臨。鵝首<sup>(七〇)</sup>邀梁過舟。見殘肴滿案<sup>(七一)</sup>。酒霧猶濃。生立命撤去。頃之。美婢三五。進酒烹茗。山海珍錯<sup>(七二)</sup>。目所未睹。梁驚曰。十年不見。何富貴一至於此。笑曰。君小觀窮措大<sup>(七三)</sup>。不能發迹耶。問適共飲何人。曰。山荆耳<sup>(七四)</sup>。梁又異之。問攜家何往。答將西渡。梁欲再詰。生遽命歌以侑酒。一言甫畢<sup>(七五)</sup>。早雷聒耳<sup>(七六)</sup>。肉竹嘈雜<sup>(七七)</sup>。不復可聞言笑。梁見佳麗滿前。乘醉大言曰。明允公<sup>(七八)</sup>能令我眞箇銷魂否。生笑曰。足下醉矣。然有一美妾之資<sup>(七九)</sup>。可贈故人。遂命侍兒進明珠一顆。曰。綠珠不難購<sup>(八〇)</sup>。明我非吝惜<sup>(八一)</sup>。乃趣別<sup>(八二)</sup>。曰。小事忙迫。不及與故人久聚。送梁歸舟。開纜逕去。梁歸探諸其家。則生方與客飲。益疑。因問昨在洞庭。何歸之速。答曰。無之。梁乃追述所見。一座盡駭。生笑曰。君誤矣。僕豈有分身術耶。衆異之。而究莫解其故。後八十一歲而終。迨殯<sup>(八三)</sup>。訝其棺輕。開之則空棺耳。

### 蓮花公主

(一) 奉風は御招待申すとの意。  
 (二) 少問自悉。暫くすると自然にわかりませうとの意。  
 (三) 扁は扁額。  
 (四) 桂府。西陽雜俎に、月中に桂有り、高さ五百丈とあり。  
 (五) 踟蹰は腰を屈めて恐縮する也。  
 (六) 屬對は文をつづけて對句と爲す也。

膠州竇旭。字曉暉。方晝寢。見一褐衣人立榻前。逡巡惶顧。似欲有言。生問之。答云。相公奉屈。問相公何人。曰。近在鄰境。從之。而出。轉過牆屋。導至一處。疊閣重樓。萬椽相接。曲折而行。覺萬戶千戶。迴非人世。又見宮人女官。往來甚夥。都向褐衣人問曰。竇郎來乎。褐衣人諾。俄一貴官出。迎見甚恭。既登堂。生啓問曰。素既不敘。遂疎參謁。過蒙愛接。頗注疑念。貴官曰。寡君以先生清族世德。傾風結慕。深願思晤焉。生益駭。問王何人。答云。少問自悉。無何。二女官至。以雙旌導生。行入重門。見殿上一王者。見生入。降階而迎。執賓主禮。禮已。踐席。列筵豐盛。仰視殿上一扁。曰。桂府<sup>(一)</sup>。生踟蹰<sup>(二)</sup>。不能致辭。王曰。忝近芳鄰。緣卽至深。便當暢懷。勿致疑畏。生唯唯。酒數行。笙歌作於下。鉦鼓不鳴。音聲幽細。稍間。王忽左右顧曰。朕一言煩卿等屬對<sup>(三)</sup>。才人登桂府。四座方思。生卽應云。君子愛蓮花。王曰。蓮花



(七) 夙分は前生よりの因縁といふがことし。

(八) 木坐は默坐して動かざること木の如き也。

(九) 躡之は生の足を踏む也。

(一〇) 慙懼は慚づる也。

(一一) 日旰君勤。左傳昭公十二年に「日旰君勤む、以て出づ可し」とあるに本づく。告出は御いとまいたしませうとの意。

(一二) 縈念は心に懸けて忘れざる也。

(一三) 邯鄲。唐の盧生、邯鄲に在り、呂翁に遇ひ、其枕を借りて睡り、出ては別たり入りては相たり、五十年間、榮華無比なるを夢みしこと、枕中記に詳なり。  
(一四) 隅坐は並び坐せざる也。少し引き下りて坐すること。  
(一五) 奉裳衣は妻とするをいふ。  
(一六) 嫌は疑ふ也。

(一七) 氈氍は毛氍。

(一八) 洞房は新婚の室。温清は、冬は温にして夏はすすしき也。心地よきをいふ。

(一九) 鉛黄は白粉。勻は均なり、齊ふる也。むら無きやうに塗る也。

(二〇) 調笑は戯れ笑ふ也。

(二一) 黄門は宦官。

(二二) 全息は呼吸のせはしきこと。

乃公主小字。何適合如此。甯非夙分<sup>(七)</sup>。傳語公主。不可不出一晤君子。移時珮環聲近。蘭麝香濃。則公主至矣。年十六七。妙好無雙。王命向生展拜。曰。此即蓮花小女也。拜已而去。生睹之。神情搖動。木坐凝思。王舉觴勸飲。目竟罔睹。王似微察其意。乃曰。息女宜相匹敵。但自慚不類。如何。生悵然若癡。即又不聞。近坐者躡之曰。王揖君未見耶。王言君未聞耶。生茫乎若失。慙懼<sup>(一〇)</sup>自慚。離席曰。臣蒙優渥。不覺過醉。儀節失次。幸能寬宥。然日旰君勤<sup>(一一)</sup>。即告出也。王起曰。既見君子。實懷<sup>(一三)</sup>心好。何倉卒而便言離也。卿既不住<sup>(一四)</sup>。亦無敢相強<sup>(一五)</sup>。若煩縈念<sup>(一二)</sup>。更當再邀。遂命內官導之出。途中內官語生曰。適王謂可匹敵。似欲附為婚姻。何默不言。生頓足而悔。步步追恨。遂已至家。忽然醒寤。則返照已殘。冥坐觀想。歷歷在目。晚齋滅燭。冀舊夢可以復尋。而邯鄲路渺。悔歎而已。一夕。與友人共榻。忽見前內官來。傳王命相召。生喜從去。見王伏謁。王曳起。延上隅坐<sup>(一四)</sup>。曰。別來知勞思眷。謬以小女子奉裳衣<sup>(一五)</sup>。想不過嫌<sup>(一六)</sup>也。生即拜謝。王命學士大臣陪侍宴飲。酒闌。宮人前曰。公主妝竟。俄見數十宮女。擁公主出。

以紅錦覆首。凌波微步。挽上氈氍<sup>(一七)</sup>。與生交拜成禮。已而送歸館舍。洞房温清。窮極芳膩。生曰。有卿在目。真使人樂而忘死。但恐今日之遭。乃是夢耳。公主掩口曰。明明妾與君。那得是夢。詰旦方起。戲為公主勻鉛黄<sup>(一九)</sup>。已而以帶圍腰。布指度足。公主笑問。君顛耶。曰。臣屢為夢誤。故細志<sup>(一八)</sup>之。倘是夢時。亦足動懸想耳。調笑未已。一宮女馳入。曰。妖入宮門。王避偏殿。凶禍不遠矣。生大驚。趨見王。王執手泣曰。君子不棄。方圖永好。詎期孽降自天。國祚將覆。且復奈何。生驚問何說。王以案上一章投生。啓讀。章云。含香殿大學士。臣黑翼。為非常妖異。祈早遷都。以存國脈。事據黃門報稱。自五月初六日。來一千丈巨蟒。盤踞宮外。吞食內外臣民。一萬三千八百餘口。所過宮殿。盡成邱墟等因。臣奮勇前窺。確見妖蟒。頭如山岳。目等江海。昂首則殿閣齊吞。伸腰則樓垣盡覆。真千古未見之凶。萬代不遭之禍。社稷宗廟。危在旦夕。乞皇上早率宮眷。速遷樂土。云云。生覽畢。面如灰土。即有宮人奔奏。妖物至矣。闔殿哀呼。慘無天日。王倉遽不知所為。但泣顧曰。小女已累先生。生全息<sup>(二二)</sup>而返。公主方與



(二三)金屋。漢武故事に、帝、數歲のとき、長公主抱きて問うて曰く、兒、婦を得んと欲するや否やと。曰く、兒、得んと欲すと。女阿嬌を指して好否を問ふ。曰く、若し阿嬌を得ば當に金屋を以て之を貯ふべしとあり。

(二四)號咷は泣き叫ぶ也。

(二五)嚶嚶は鳴く聲。

(二六)詬は詬る也。

(二七)依依は捨て去らざる貌。

(二八)頂尖は頂上なり。

左右抱首哀鳴。見生入。牽衿曰。郎焉置妾。生愴惻欲絕。乃捉腕思曰。小生貧賤。慚無金屋。有茅廬三數間。姑同竄匿。可乎。公主含涕曰。急。何能擇。乞攜速往。生乃挽扶而出。未幾至家。公主曰。此大宅。勝故國多矣。然妾從君來。父母何依。請別築一舍。當舉國相從。生難之。公主號咷曰。不能急人之急。安用郎也。生略慰解。即已入室。公主伏牀悲啼。不可勸止。焦思無術。頓然而醒。始知夢也。而耳畔啼聲。嚶嚶未絕。審聽之。殊非人聲。乃蜂子二三頭。飛鳴枕上。大叫怪事。友人詰之。乃以夢告友人。亦詫爲異。共起視蜂。依依裳袂間。拂之不去。友人勸爲營巢。生如所請。督工構造。方豎兩堵。而羣蜂自牆外來。絡繹如織。頂尖未合。飛集盈斗。跡所由來。則鄰翁之舊圃也。圃中蜂一房。三十餘年矣。生息頗繁。或以生事告翁。翁覘之。蜂戶寂然。發其壁。則蛇據其中。長丈許。捉而殺之。乃知巨蟒。即此物也。蜂入生家。滋息更盛。

小

翠

(一)總角時は少年の時をいふ。總角とは男女未だ冠笄せざる時は其髮を總べ聚めて之を結束するを謂ふ。

(二)糠覈は糠の屑。食の粗惡なる者を言ふ。

(三)賣菜云云。章固の故事を用ひしなり。續幽怪録に「章固、少くして未だ娶らざる時、旅次、宋城に、老人が囊に倚りて坐し、月に向つて書を檢するに遇ひ、之に問ふ。曰く、此れ天下の婚書なるのみと。問ふ、囊中は何物ぞと。曰く、赤繩なるのみ。此を以て夫婦の足を繋ぐ。仇家異域と雖も、此繩一たび繋げば、終に易ふ可からずと。固問ふ、予が妻は何に在ると。曰く、君が妻は乃ち此店北の賣菜陳廬の女なりと。固遂に菜市に之き、廬が一歳の女を抱くを見る。徹陋なること亦甚だし。怒りて刀を磨して奴に付し、翌日、稠人中に刺し、眉間を傷つく。後、固、父の蔭を以て、相州の軍事に參す。刺史王泰妻はすに女を以てす。容貌端麗にして、眉間に常に花鈿を貼す。之を問ふ。曰く、妾は郡守の猶子なり。父、宋城に卒す、時方に繼縁なり。

王太常。越人。總角時。晝臥榻上。忽陰晦。巨霆暴作。一物大於貓。來伏身下。展轉不離。移時晴霽。物即逕去。視之非貓。始怖。隔房呼兄。兄聞喜曰。弟必大貴。此狐來避雷霆劫也。後果少年登進士。以縣令入爲侍御。生一子元豐。絕癡。十六歲。不能知牝牡。因而鄉黨無與爲婚。王憂之。適有婦人。率少女登門。自請爲婦。視其女。嫣然展笑。真仙品也。喜問姓名。自言虞氏。女小翠。年二八矣。與議聘金。曰。是從我。糠覈不得飽。一旦置身廣廈。役婢僕。厭膏粱。彼意適。我願慰矣。豈賣菜也。而索直乎。夫人悅。優厚之。婦即命女拜王及夫人。囑曰。此爾翁姑。奉事宜謹。我大忙。且去三數日。當復來。王命僕馬送之。婦言鄉里不遠。無煩多事。遂出門去。小翠殊不悲戀。便即奩中翻取花樣。夫人亦愛樂之。數日婦不至。以居里問女。女亦慙然。不能言其道路。遂治別院。使夫婦成禮。諸戚聞拾得貧賤家兒作。



乳媪、蔬を齎きて以て朝夕を終ふ。嘗て市に抱かれ、賊の傷つくる所と爲れりと。固遂に輿に往事を言ふ。宋城の宰、之を聞き、其店を名づけて定婚店と曰ふとあり。豈賣菜也云云は、少女を率ゐたる婦人の意は、夙に因縁ありて結合するものなれば、價を索むべきにあらずとなり。但し此言を聞きたる王氏は、此語を、取るに足らざるつまらぬ女子の事なれば、價を請求すべきにあらず、との意に解したるなり。言ふ人の意味と聞く人の解する所と相異なるなり。言ふ人は故らに此曖昧の言を爲ししこと言を待たず。

(四)花様は各種の様(もやう)を謂ふ。  
(五)愁然(しゅうぜん)は癡愚なる貌。  
(六)姍笑(しんせう)は諷刺(ふうし)なり。  
(七)圓(ま)は圓(ま)なり。  
(八)刈(き)は削(け)る也、廉隅(れんこ)を削(け)り去る也。  
(九)懸跳(けんてう)は、むやみにはね廻(まわ)ること。  
(一〇)花面(けつめん)は白粉(しろこな)や墨(すみ)などを以て顔をくまどること。  
(一一)摩挲(まさ)は手を以て撫摩(なで)する也。  
(一二)霸王(たうおう)は楚(こ)の項羽(けいよ)をいふ。  
(一三)沙漠(さつぱく)人は匈奴(こつこ)なり。呼韓(こ)邪(か)單(だん)子をいふなるべし。  
(一四)虞美人(よこべに)は項羽(けいよ)の愛姬(あいぎ)にして、項羽、垓下(がいげ)に圍(こ)まれしとき、帳下(ていげ)に舞(ま)ふこと、史紀(しき)項羽(けいよ)本紀(ほんき)に見ゆ。  
(一五)娼婦(しやうふ)は舞(ま)ふ貌(まう)。  
(一六)或(ある)髻(げ)挿(さ)雉尾(けいび)云云。自ら王昭君(わうしやうきん)に擬(な)する也。

新婦共姍笑之。見女皆驚。羣議始息。女又甚慧。能窺翁姑喜怒。王公夫婦。寵惜過於常情。然惕惕焉。惟恐其憎子癡。而女殊權笑。不爲嫌。第善諛。刺布作圓。蹋蹴爲笑。著小皮靴。蹴去數十步。給公子奔拾之。公子及婢。恆流汗相屬。一日王偶過。圓礮然來。直中面目。女與婢俱斂迹去。公子猶踴躍奔逐之。王怒。投之以石。始伏而啼。王以狀告夫人。夫人往責女。女惟俛首微笑。以手剗牀。既退。懸跳如故。以脂粉塗公子。作花面如鬼。夫人見之。怒甚。呼女詬罵。女倚几弄帶。不懼亦不言。夫人無奈之。因杖其子。元豐大號。女始色變。屈膝乞宥。夫人怒頓解。釋杖去。女笑拉公子。公子入室。代撲衣上塵。拭眼淚。摩挲杖痕。餌以棗栗。公子乃收涕以忻。女闔戶。復裝公子。作霸王。作沙漠人。已乃豔服束細腰。扮虞美人。娼娼作帳下舞。或髻插雉尾。撥琵琶。丁丁縷縷然。喧笑一室。日以爲常。王公以子癡。不忍過責婦。即微聞焉。亦若置之。同巷有王給諫者。相隔十餘戶。然素不相能。時值三年大計吏。忌公握河南道篆。思中傷之。公知其謀。憂慮無爲計。一夕早寢。女冠帶飾豕宰狀。翦素絲作濃髭。又以青衣飾兩婢。爲虞候。竊跨厖馬而出。戲云。將謁王先生。馳至給諫之門。即又以鞭撻從人。言曰。我謁侍御王。甯謁給諫王耶。回轡而歸。比至家門。門者誤以爲真。奔白王公。公急起承迎。方知爲子婦之戲。怒甚。謂夫人曰。人方蹈我之瑕。反以閨閣之醜。登門而告之。余禍不遠矣。夫人怒。奔女室。詬讓之。女惟慙笑。並不置詞。撻之。不忍出之。則無家。夫妻懊怨。終夜不寢。時豕宰某公。赫甚。其儀采服從。與女僞裝。無少殊別。王給諫亦誤爲真。屢偵公門。中夜而客未出。疑豕宰與公有陰謀。次日早朝。見而問曰。昨夜相公至。君家耶。公疑其相譏。慙顏唯唯。不甚響答。給諫愈疑。謀遂寢。由此益交驩。公探知其情。竊喜。而陰囑夫人。勸女改行。女笑應之。逾歲。首相免。適有以私函致公者。誤投給諫。給諫大喜。先託善公者。往假萬金。公拒之。給諫自詣公所。公覓巾袍。並不可得。給諫伺候久。怒公慢。憤將行。忽見公子袞衣旒冕。有女子自門內推之以出。大駭。已笑撫之。脫其服冕。撲之而去。公急出。則客去已遠。聞其故。驚顏如土。大哭曰。此禍水也。指曰。赤吾族矣。與夫人操杖往。女已知

(一七)丁丁縷縷然(ていていりゅうりゅうぜん)は琵琶の音なり。  
(一八)過責(かぜ)は詰責する也。  
(一九)三年大計(さんねんだいけい)とは三年毎に群吏の治績の功過を計りて之を賞罰する也。  
(二〇)握河南道篆(くわくわんなんだうせん) 河南道を監督するをいふ。  
(二一)家宰(かさい)は首相なり。  
(二二)虞候(よこべ)は宋の時、官に在りて使役に供する下級の役人なり。  
(二三)蹈瑕(たうけあ)は瑕瑾(けあ)過失を拾うて罪に陥れんとする也。  
(二四)並不置詞(へいふちぎ) 何とも辨解せざる也。  
(二五)赫甚(こくしん)は威勢の盛んなるをいふ。  
(二六)響答(きやうた)は響の聲に應ずるが如く直に應答する也。  
(二七)公覓巾袍云云。公、巾袍を服して出でて給諫に面會せんと欲し、巾袍をさがしたれども、容易に見出すこと能はざりし也。  
(二八)伺候(こひこう)は待つ也。  
(二九)袞衣旒冕(こんいりゅうめん)は天子の服装なり。  
(三〇)禍水(わざい) 漢の成帝、趙合德を寵す、披香博士淳方成曰く、此れ禍水なり、火を滅せんこと必せりと。(飛燕外傳に見ゆ) 此れ禍水の字の本づく所なり。  
(三一)赤族(せきしゆ)は一族を誅滅せらるるをいふ



(三二) 抗疏は上疏する也。

(三三) 梁鯨心は梁の黨の心。

(三四) 黃袱は黄色なる風呂敷。

(三五) 臧獲は奴婢なり。

(三六) 案乃定。裁判の決定せしをいふ。

(三七) 玉皇は天帝なり。

(三八) 京卿は京兆尹を謂ふなるべし。

(三九) 悍は兇暴なり。榻を借りて往きて、選して下さらぬのは亂暴也との意。

(四〇) 喘氣不得。いきをすること難しとの意。

(四一) 蒸悶は湯氣に蒸されて苦悶するなり。

(四二) 坦笑は平然として笑ふ也。

之。闔扉任其詬厲。公怒。斧其門。女在內含笑而告翁。無怒。有新婦在。刀鋸斧鉞。婦自受之。必不令貽害雙親。翁若此。是欲殺婦以滅口耶。公乃止。給諫歸。果抗疏。揭王不軌。袞冕作磔。上驚驗之。其旒冕乃梁鯨心所製。袍則敗布黃袱也。上怒其誣。又召元豐至。見其慙狀。可掬。笑曰。此可以作天子耶。乃下之法司。給諫又訟公家有妖人。法司嚴詰臧獲。並言無他。惟顛婦癡兒。日事戲笑。鄰里亦無異詞。案乃定。以給諫充雲南軍。王由是奇女。又以母久不至。意其非人。使夫人探詰之。女但笑不言。再復窮問。則掩口曰。兒玉皇女。母不知耶。無何。公擢京卿。五十餘。每患無孫。女居三年。夜夜與公子異寢。似未嘗有所私。夫人昇榻去。囑公子與婦同寢。過數日。公子告母曰。借榻去。悍不還。小翠夜夜以足股加腹上。喘氣不得。又慣招人股裏。婢嫗無不粲然。夫人訶拍令去。一日。女浴於室。公子見之。欲與偕笑。止之。諭使姑待。既出。乃更瀉熱湯於甕。解其袍袴。與婢扶入之。公子覺蒸悶。大呼欲出。女不聽。以衾蒙之。少時無聲。啓視。已死。女坦笑不驚。曳置牀上。拭體乾潔。加複被焉。夫人聞之。

(四三) 勸はただむる也。

(四四) 休休は息のかすかなる貌。

(四五) 早は早朝なり。

(四六) 琴瑟靜好云云。夫婦和合し、影の形に隨ふが如き也。

(四七) 何遂不少存面目。少しも自分の體面を考へて下さらぬは餘りにひどしとの意。

(四八) 爽然は自失する貌。茫然といふが如し。

哭而入。罵曰。狂婢何殺吾兒。女輒然曰。如此癡兒。不如無有。夫人益恚。以首觸女。婢輩爭曳勸之。方紛譟間。一婢告曰。公子呻矣。夫人輟涕撫之。則氣息休休。而大汗浸淫。沾浹衲褲。食頃汗已。忽開目。四顧徧視家人。似不相識。曰。我今回憶往昔。都如夢寐。何也。夫人以其言不癡。大異之。攜參其父。屢試之。果不癡。大喜。如獲異寶。乃還榻故處。更設衾枕。以覘之。公子入室。盡遣婢去。早窺之。則榻虛設。自此癡顛。皆不復作。而琴瑟靜好。如形影焉。年餘。公爲給諫之黨。奏劾免官。小有罣誤。舊有廣西中丞所贈玉瓶。價累千金。將出以賄當路。女愛而把玩之。失手墮碎。慙而自投。公夫婦方以免官不快。聞之。怒。交口呵罵。女忿而出。謂公子曰。我在汝家。所保全者。不止一瓶。何遂不少存面目。實與君言。我非人也。以母遭雷霆之劫。深受而翁庇翼。又以我兩人有五年夙分。故以我來。報曩恩了。宿願耳。身受唾罵。擢髮不足以數。所以不即行者。五年之愛未盈。今何可以暫止乎。盛氣而出。追之已杳。公爽然自失。而悔無及矣。公子入室。睹其賸粉遺釵。慟哭欲死。寢食不甘。日就羸悴。公大



(四九)膠續は後妻を娶ること。合璧事類に「漢の武帝の時、西海、膠を獻す。帝、弦絶え、膠を以て之を續ぐ。終日射れども断えず。帝大に悦び、續弦膠と名づく。驚の血を以て之を爲りし也。今取りて續婚の喩と爲す」とあり。

(五〇)澆禱は酒を澆きて禱る也。

(五一)冒認物産は人の財産を自分の所有物とする也。

五二)瘦骨一把。甚だ瘦せたるをいふ。

(五三)前因は前生の因縁。

(五四)榛梗は灌木叢生して道を梗塞すること。先年、公夫婦に呵罵せられたることに喩ふ。

(五五)遲暮は晩年。

(五六)應門は門番をすること。

憂急爲膠續以解。而公子不樂。惟求良工畫小翠像。日夜澆禱其下。幾二年。偶以故自他里歸。明月已皎。村外有公家亭園。騎馬經牆外過。聞笑聲。停轡。使廐卒捉鞍。登鞍以望。則二女郎遊戲其中。雲月昏濛。不甚可辨。但聞一翠衣者曰。婢子當逐出門。一紅衣者曰。汝在吾家園亭。反逐阿誰。翠衣人曰。婢子不羞不能作婦。被人驅遣。猶冒認物產耶。紅衣者曰。索勝老大婢無主顧者聽其音。酷類小翠。疾呼之。翠衣人去。曰。姑不與若爭。汝漢子來。既而紅衣人來。果翠也。喜極。女令登垣。承接而下之。曰。二年不見。瘦骨一把矣。公子握手泣下。具道相思。女言。妾亦知之。但無顏復見家門。今與大姊遊戲。又相邂逅。足知前因不可逃也。請與同歸。不可。請止園中。許之。遣僕奔白夫人。夫人驚起。駕肩輿而往。啓鑰入亭。女趨下迎拜。夫人捉臂流涕。力白前過。幾不自容。曰。若不少記榛梗。請偕歸。慰我遲暮。女峻辭不可。夫人慮野亭荒寂。謀以多人服役。女曰。我諸人悉不願見。惟前兩婢朝夕相從。不能無眷注耳。外惟一老僕應門。餘都無所復須。悉如其言。託公子養河園中。日供食用。而

已。女每勸公子別婚。公子不從。後年餘。女眉目音聲。漸與曩異。出像質之。迺若兩人。大怪之。女曰。視妾今日。何如疇昔矣。公子曰。今日美則美。然較昔則似不如。女曰。意妾老矣。公子曰。二十餘歲人。何得速老。女笑而焚圖。救之已燼。一日。謂公子曰。昔在家時。阿姑謂妾抵死不作繭。今親老君孤。妾實不能產育。恐誤君宗嗣。請娶婦於家。旦晚奉翁姑。君往來於兩間。亦無所不便。公子然之。納幣於鍾太史之家。吉期將至。女爲新人製衣履。賈送母所。及新人入門。則言貌舉止。與小翠無毫髮之異。大奇之。往至園亭。則女已不知所在。問婢。婢出紅巾曰。娘子暫歸甯。留此貽公子。展巾結玉玦一枚。心已知其不返。遂攜婢俱歸。雖頃刻不忘小翠。幸而對新人。如覩故好焉。始悟鍾氏之姻。女預知之。故先化其貌。以慰他日之思云。

(五七)抵死不作繭。晉安郎の詩に「桑蠶不作繭、晝夜常懸絲」とあり。

(五八)吉期は婚禮の期日をいふ。

(五九)玉玦は半環なり。荀子に「人を絶つには玦を以てし、絶を反すには環を以てす」とあり。玦は訣絶の義を取る也。

(六〇)故好は小翠をいふ。



偷

桃

- (一) 春節は立春なり。
- (二) 行は同業の商賈をいふ。
- (三) 彩樓は我が國の山車(ガシ)の如きもの。
- (四) 戲囃は見物すること。
- (五) 嚙嘈はかまびすしき貌。
- (六) 洶動は騒がしき也。

- (七) 殊不了了は事理を解せざること甚だしとの意。
- (八) 籌之爛熟は、十分に此事を計れりとの意。
- (九) 王母は西王母、仙人の名。

童時赴郡。值春節。舊例先一日。各行商賈。彩樓鼓吹。赴藩司。名曰演春。余從友人戲囃。是日遊人如堵。堂上四官皆赤衣。東西相向坐。時方稚。亦不解其何官。但聞人語嚙嘈。鼓吹聒耳。忽有一人。率披髮童。荷擔而上。似有所白。萬聲洶動。亦不聞爲何語。但視堂上作笑聲。卽有青衣人。大聲命作劇。其人應命方興。問作何劇。堂上相顧數語。吏下宣問所長。答言能顛倒生物。吏以白官。少頃復下。命取桃子。術人聲諾。解衣覆笥上。故作怨狀。曰。官長殊不了了。堅冰未解。安所得桃。不取。又恐爲南面者所怒。奈何。其子曰。父已諾之。又焉辭。術人惆悵良久。乃云。我籌之爛熟。春初雪積。人間何處可覓。惟王母園中。四時常不凋謝。或有之。必竊之天上。乃可。子曰。嘻。天可階而升乎。曰。有術在。乃啓笥。出繩一團。約數十丈。理其端。望空中擲去。繩卽懸立空際。若有物以挂之。未幾愈擲愈高。渺入

- (一〇) 得汝一往。お前往つてくれよとの意。
- (一一) 憤憤は心昏亂して事理に昧き也。
- (一二) 失口は、口をすべらして言ひ損つたとの意。
- (一三) 盤旋は廻旋する也。
- (一四) 吾兒休矣は、吾が兒は死んでしまつたとの意。
- (一五) 結草云云。どうかして此御恩を報すべしとの意。左傳宣公十五年。秦、晉を伐つ。魏顆、秦の師を輔氏に敗り、杜回を獲たり。秦の力人なり。初め魏武子、嬖妾有り、子無し。武子疾むとき、顆に命じて曰く、必ず是を嫁せよと。疾病なるとき曰く、當に以て殉と爲すべしと。卒するに及びて、顆、之を嫁し、曰く、疾病なるときは亂る。吾は其治に従ふなりと。輔氏の役に及びて、顆、老人が草を結びて以て杜回を元するを見り。杜回履きて顛る。故に之を獲たり。夜、之を夢みる。曰く、余は爾が嫁せし所の婦人の父なり。爾は先人の治命を用ひたり。余是を以て報すと。
- (一六) 白蓮教は教派の名、大旨は佛教に託し、而して又讖緯符籙を假りて以て衆を惑はす。元明清の世に盛なり。明の天啓の時、王森始めて之を白蓮教と名づく。

雲中。手中繩亦盡。乃呼子曰。兒來。余老憊。體重拙。不能行。得汝一往。遂以繩授子曰。持此可登。子受繩。有難色。怨曰。阿翁亦太憤憤。如此一綫之繩。欲我附之以登萬仞之高天。倘中道斷絕。骸骨何存矣。父又強喝迫之。曰。我已失口。悔無及。煩兒一行。兒勿苦。倘竊得來。必有百金賞。當爲兒娶一美婦。子乃持索。盤旋而上。手移足隨。如蛛趁絲。漸入雲霄。不可復見。久之。墜一桃。如盃大。術人喜。持獻公堂。堂上傳視良久。亦不知其真僞。忽而繩落地。上。術人驚曰。殆矣。上有人斷吾繩。兒將焉託。移時一物墮。視之。其子首也。捧而泣曰。是必偷桃。爲監者所覺。吾兒休矣。又移時一足落。無何肢體紛墮。無復存者。術人大悲。一一拾置笥中。而闔之。曰。老夫止此一兒。日從我南北游。今承嚴命。不意罹此奇慘。當負去瘞之。乃升堂而跪。曰。爲桃故。殺吾子矣。如憐小人而助之葬。當結草以圖報耳。坐客駭詫。各有賜金。術人受而纏諸腰。乃扣笥而呼曰。八八兒。不出謝賞。將何待。忽一蓬頭僮。首抵笥蓋而出。望北稽首。則其子也。以其術奇。故至今猶記之。後聞白蓮教。能爲此術。意此其苗裔耶。